
副会長がボクにキスをした
クールが熱い
1
KAZUMI NITTA
新田一実
ECLIPSE ROMANCE

クールが熱い1

～副会長がボクにキスをした～

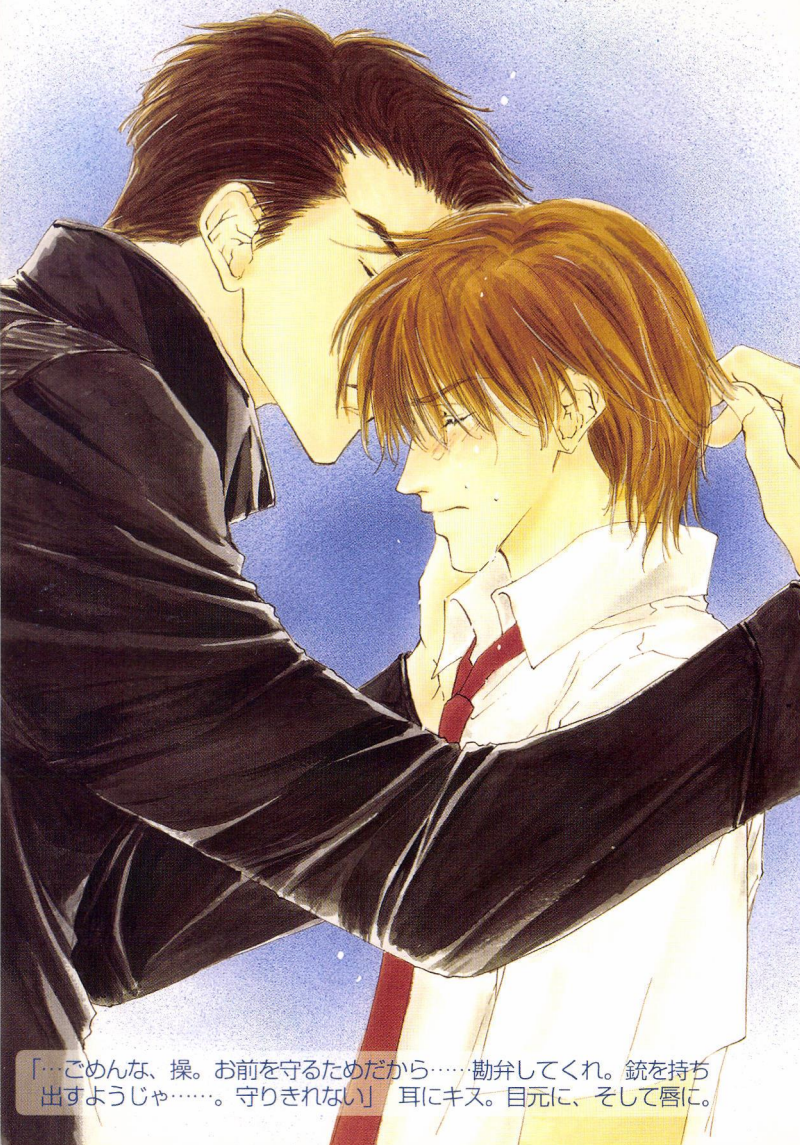
新田一実

illustration／富士山ひょうた

ECLIPSE ROMANCE

クールが熱い 1

副会長がボクにキスをした



「…ごめんな、操。お前を守るためだから……勘弁してくれ。銃を持ち出すようじゃ……。守りきれない」 耳にキス。目元に、そして唇に。

クールが熱い1

～副会長がボクにキスをした～

新田一実

illustration／富士山ひょうた

ECLIPSE ROMANCE

CONTENTS

クールが熱い ACT·1 …… 007
クールが熱い ACT·2 …… 089
杉本くんのヒミツ …… 177
あとがき …… 268

初出一覧
『クールが熱い ACT·1』――小説エクリプス vol·13（99.3）
『クールが熱い ACT·2』――小説エクリプス8月号（99.7）
『杉本くんのヒミツ』――書き下ろし

クールが熱い ACT・1



1

周囲は見事に同じ色の山だった。
グレイのジャケットにスラックス、臙脂のタイ。手にするバッグまでみな同じ。中々壮絶な眺めである。
同じ群れの中で日々生活する者にとっては、制服に載った顔は個性豊かだったが、傍から見れば、どれもこれも制服同様規格モノかもしれない。
はっきり言って、群れの中の一人から見ても、これだけ数が揃えば、少々薄気味悪く思う時があるほどだ。全員が男だというのも、明らかに理由の一つだろう。
そう、校門を目指して歩くのは、全員が全員男だった。
うんざりである。
募集要項を見れば、男女同数の生徒がいる筈なのに、女の姿はどこにもない。同じデザインのグレイのジャケットに、タータンチェックのスカートを穿いている筈の彼女達は、隣の駅で降りてしまうのだ。
周囲の野郎共が目指すのは、共学とは名ばかりの翔峰学園高等部男子部。この道の先にはそれしかない。駅前の商店街からも隔絶された男の園である。
潤いのない通学路の終着点の校門は、何時もと違って妙に混み合っていた。

まず、間違いなく服装検査だ。しかも、あんな風に人の流れが滞るという事は、自治会の行うヤツだ。学校の生活指導部のものより、数段御丁寧でしつこいヤツである。

「ちっ……」

小さく舌打ちをした少年は、その場でくるりと踵を返した。

周囲の流れに逆らって、足早に歩く。

「雑賀操クン……どこへ行くのかな?」

頭上から御丁寧にフルネームで呼び掛ける声に、顔を上げようとした瞬間、左の二の腕が掴まれる。

「なっ!」

抗議の声を上げる前に、無理矢理に回れ右をさせられた。

「学校はこっちだよ。……それとも、何か忘れ物かな……」

嫌味としか思えない、低くよく通る声が、耳元で囁く。

「うっせぇーな! てめえにゃ関係ねえだろ!」

声を荒らげ、腕を掴んだ手を振り解こうとしたものの、益々強く掴まれただけで、自由にはなれなかった。

見上げるまでもなく、声の主は判っている。

それでも、忌々しげに見上げると、一年の後半から、副会長などという肩書きを持っている男が、それはそれは爽やかな笑顔を浮かべて、操を見下ろしていた。

長身、痩軀の副会長は、剣道部の部長様でもある。

歴史を誇る私立高校が掲げる文武両道を地で行っているという、動く広告塔のような男だった。

もちろん、操はこんな学校の看板などに用はない。

「そっちへは行かない方がいいよ。最近、取り締まりが厳しくなったみたいだから……。朝っぱらからデート気分で登校するのは許せないって」

デート気分も何も、ここはれっきとした男子校だ。

しかし、確かにすぐ隣に女子校がある。しかも、校門に掲げられた名前は同じ。男子部、女子部、という看板もないのだから、部外者には区別が難しいだろう。募集要項のからくりはここにある。正門が二つあろうと、本来は一つの敷地の中央に乗り越えられない高い塀があろうと、同じ要項で受験した生徒の通う学校なのだ。事情が判ってみれば厭になるほど古臭い習慣が今に生きている証拠に他ならなかった。何しろ、元を質せば、正真正銘の男子校だったのだ。

校内にいるのは、ネズミ一匹に至るまで総てがオスだったという噂まである。それが、時流に負けて女子部を併設したのが、十数年前。そう簡単には、高い塀は取り払われそうにはない。

小高い山の中腹に、背中合せに存在する二つの高校と言った方が判り易いだろう。正門に向かう道も二本。ご丁寧にも、それぞれ別の駅に繋がっている。

完璧に隔離されているだけなら、別の女子校と思えば済むのだが、身近に監視の目がある分だけ、社内恋愛ならぬ、校内恋愛は、下手に他校の女と付き合うより、面倒らしい。

それでも、兄妹校に彼女がいる連中は必死の思いで同伴登校していた。

お陰で、二つの校門を結ぶ獣道ができている。雑木林の中、下生えに足を取られる道。それが、操が向かおうとした方向にある。

言われなくとも、操には用のない道なのだが、厭味たっぷりに忠告をくださった副会長殿は、手を離す気配もない。ただでさえ、これから一日野郎共に囲まれて過ごす事を思うとうんざりするのに、更に朝っぱらから堅苦しい男に絡まれるなど、あまりに因果で涙も出ない。

学力だけで学校を選ぶと酷い目に遭うという証拠がこれだ。ついでに言えば、進学担当の教師と喧嘩をするものではない。まさかこんな構造になっていると判っていたら、操は絶対に他校を受験しただろう。

誰でも、大学受験が回避できるという理由だけで、三年もの間むさ苦しい男に囲まれて暮らすなど御免蒙りたいに違いない。

正直、嵌められたとしか思えなかった。

「雑賀くん？」

「うっせぇな」

執念深く絡んでくる男の手を、どうにか振り払ったものの、逃げ出す事は諦める。

何しろ、本当に執念深いのだ。操が校門を潜るまで、絶対に諦めない。一度など、肩に担がれて、校内に連れ込まれた。要するに見咎められたら最後なのである。

何故そんなに登校させたいのだろう。大学へはほぼフリーパスと知っていて、真面目に学校に通う奴等の気が知れない。しかも、ここには時代錯誤な校則がゴマンと生き残っているのだ。

大抵の生徒は校則を無視するなり、気付かなかった振りぐらいはしているが、忠実に守っている者も小数ながらいる。

いい見本が、目の前の副会長様だ。

短く切り揃えられた真っ黒な髪に、きっちりと結ばれたネクタイ。びしっと折り目の付いたズボンに磨き込まれた革靴。

校則通りというよりは、既に前世紀の遺物としか見えない。今時こんなヤツが生きていていいのか、と思ってしまうほどである。

また、古臭い恰好が如何にも似合う。一歩間違えばサラリーマンのドブネズミ風なのだが、しっくりと似合っている辺りが嫌味だ。

たかが一年の違い。四月生まれの操とは一月も違わない者もいる筈だ。そんなもので先輩面されたくないと思うのだが、目の前の男は明らかに大人の顔をしていた。

身長はもちろん、骨格も人並み以上である。どうせなら、剣道などやらずに、もう少し派手な筋肉を付けてプロレスラーを目指せと言ってやりたいほどだ。

少しばかりズルをして、漸く一六五に届こうかという程度の身の丈では、抵抗するにも命懸けだった。

もちろん、ただ体格差があるだけなら、簡単には諦めたりはしない。決して、腕っぷしに自信がない訳ではないのだ。小柄なだけに破壊力はないが、小回りが利く分、普通の喧嘩なら、まず負けない。

そうはいっても、リーチが違う上に、武道をやる人間が相手では、何をやってもあっさり見切られてしまう。

剣道部主将というのは伊達ではない。

歴史のある男子校に相応しく、柔道剣道弓道と〝道〟の付く部活には学校側も力を入れている。指導者も揃っているし、生徒の実力もそれなりだ。そんな中であっさりと主将を務めてしまうあたり、実力もあるに違いない。

曲がりなりにも実態を把握しているお隣の女子生徒には敬遠されているらしいが、堅苦しい性格が嫌われているのだろう。

もっとも、この男が誰に敬遠されようと、操の知った事ではない。

「なんで、俺に構うんだよ。……あんた、忙しいんだろ？」

「そう。今も役員の職務を遂行しているところだ」

「なにぃ!?」

目を剝いた操に、にやりと笑い返した矢崎は、立てた親指で校門を示した。

「本日の検査の責任者なのでね」

「え？」

よくよく見れば、彼の手には何もない。

この男が手ぶらで登校する手合いでない事は、操もよく知っていた。

校門前の人集りの原因に捕まるとは、付いていない事この上ない。

「……なんでだよぉ。……そんなもん、風紀委員に任せとけよう……」
いくら文句を言っても、仕方がなかった。
ある意味では、何より似合いの職務かもしれない。
風紀委員だろうが誰だろうが、この男以上に規範通りの生徒は、まず間違いなくいないだろうから。
それにしても、何故、そんな男に目を付けられなければならないのか。
この高校に入学して、およそ二ヶ月と少々。
まだ、目立つ事など一つもしていない筈だ。確かに、模範から大きく外れた言動をしている事は確かだが、それだって、今はまだ可愛いものである。
「タイは？」
「へ？」
「していないようだが？」
「煩いな！　なくなっちまったんだよ。これから、購買で買うんだ。ほっといてくれ！」
「そうはいかないな」
言いながら、ジャケットのポケットを探った男は、臙脂の布を取り出した。するりと、マジシャンの手つきでネクタイを伸ばす。
「ほら、顎を上げて。ボタンも上まで留める」
言いながら、器用な指が操のシャツのボタンを留めて、タイを巻く。



しゅるしゅると音を立てて滑るネクタイは、まさしくマジシャンそのものといった手で綺麗に結ばれた。
余りの手際の良さに、なすがままになってしまったほどだ。
「……な、何をするんだよ！」
今更だ。
抵抗するなら、シャツに手を掛けられた時にするべきだった。
それを、マジックを見るように、のほほんと見物してしまったのである。
他人にネクタイを結んで貰うというのは、亭主関白を気取るオヤジか、小学校低学年の子供というイメージしかない。どう考えても、自分は子供扱いされているのだろう。
「渡しゃいいんだよ、渡しゃあ。……何も結ばなくたって……」
つい、文句も遠慮がちになる。
それでなくても圧倒的な体格の差に気後れしているのに、自分がタイミングを失したという意識はあるのだ。
「ネクタイを結ぶのが苦手みたいだしね」
「悪かったな」
誰が好き好んでネクタイをきっちりと締めるか、だ。
喜んでわざわざ首を絞めるような真似をするのは、よほどの変態か、首輪を自慢する飼犬だけに違いない。

ふん、と鼻を鳴らした操は、その場から逃げ出すように、校門を潜った。

2

武道館と塀との間の隙間が、一年坊主の憩(いこい)の場だ。

日も当たらないじめじめとした空間は居心地は良くないが、滅多に教師が顔を出さない場所が確保されているだけで上等だろう。

噂によると武道館の裏が一年坊主のテリトリーとなっているのは、三十年も昔からしい。父親がこの学校の出身だというヤツが、呆れ顔で教えてくれたのは、入学して一月も経たない頃だった。

ちなみに、二年になれば弓道場の裏、三年になったら屋上。代々の申し送りで、テリトリーははっきりしている。

「雑賀……。おい操チャン。なに、ぼーっとしてんだよ」

「んぁ？」

「だーから。絶対安全って訳じゃねーんだから、ちゃんと警戒してろって……」

煙草を銜(くわ)えたところを見付けられたら、停学は覚悟しなければならない。都立に行った連中は、教室で煙草をふかしているというのに、難儀な事だ。

たかが煙草。

睡眠薬でも麻薬でもないのに、教師はやいやいと煩い事を言った。金さえ入れれば誰にでも売る自動販売機があるのだから、文句を付けられる筋合いではない筈だ。それなのに、教師は煙草を吸うなと命令する。

三十年前からの暗黙の了解の喫煙所でも、公認ではないのだ。

「まぁ、朝っパラからあんな話を聞かされたら、惚けるのも判るけどさ……」

「なんだよ……」

「副総裁と同伴出勤した挙げ句、校門の前でネクタイ直してもらって、後朝の別れを惜しんだってヤツ……」

「副総裁って……」

「愛しのダーリン、矢崎様ってか？」

「……おめぇ……」

ぐっと拳を握った操は、じろりと杉本を睨み付けた。

その手の話題は、聞きたくない冗談の一つだ。戯けた事に、入学以来、操は上級生からラブレターを何通も貰っていた。隣の女子部のお姉様方からなら大歓迎だが、同じ校舎に生息するお兄様方からなのだから洒落にならない。少々の素行不良くらいでは、怯む連中ではなさそうなところが始末に悪い。

高校に入学してからは、子供の頃のように善い子のカワイコちゃんを演じるのは極力避けてきたし、既に素行不良という評判は立っているのに、やっぱりラブレターは来るのだから。

そもそも杉本と知り合ったのは、入学早々、こそこそと煙草を銜えられる所を探していて、ばったりと出会ったのだ。
そこはそれ、同じものを探す二人は、なんとはなく、目だけで意思の疎通ができたのである。
それ以来のダチだが、中坊の頃のダチより、よっぽど親しくなっていた。
「なんだよ、そのキヌギヌってのは……」
「おり？　もう忘れちまったのか？　国語だよ、コクゴ。入試にあっただろ？」
煙草を吹かした杉本は、人を食った笑みを浮かべ、茶色く脱色した髪を掻き上げて見せた。
この学校では、立派な不良だが、入試の内容をしっかり覚えている辺り、所詮お坊ちゃん学校の不良なのだろう。
少なくとも、中学で落ち零れと言われた人間は入学していないのだから、成績を理由にぐれる人間は今のところ一年にはいない筈だった。
入学して二ヶ月では、そこまで行っていないというのが正しいだろうが。
「……不良も中途半端ってヤツかね……」
十一歳違いの兄が、面白そうに言った言葉を思い出す。
グレるんなら、もうちょっとリキを入れろとまで言い切った。
「んだよ、その中途半端ってのは」
「ウチの兄貴」
「兄貴って……。そういや偉ぇ歳の離れてる兄ちゃんがいるって言ってたよな……」

「いっちゃん上は三十越してるし、ちい……下のも二十七だ」
「おおっと……」
大抵の人間は驚くだろう。
もっとも、両親の考えた事は大方見当が付く。三人男が続いて、十年以上離れてできた子供がひょっとしたら女の子かもしれないと、期待したに違いない。
誰が考えても、簡単に納得できる状況だ。
「そんだけオヤジに囲まれてりゃ、副総裁ぐらいどって事ないか」
「なんだよ、それ。お前、まさかマジで言ってんじゃないだろうな」
「ねぇねぇ」
ぴらぴらと顔の前で手を振った杉本は、にっかりと笑って見せた。
きっちりと整えた眉と、一日に何度も拭いている顔はニキビの一つもない。いい男を目指している杉本は、密(ひそ)かに矢崎をライバル視しているようだ。
少々と軽めの明るい性格と、必死で磨いたビボーがあれば、女などよりどりみどり。ついでに、頭の方もそこそこよりは上のレベルというのが、杉本の目指すポジションだった。
今のところ、かなりいい線を行っているらしい。
唯一理想に追い付いていないのは、身長だけだろう。何しろ操よりまだ低いのだ。
ただし、その点に関しては、あまり悲観していないらしい。まだまだ成長期の真っ直中(ただなか)である。
しかも、両親が共に長身と来れば、さして気にはしないものだろう。

「まぁ、お二方とも有名人だから。……少々の噂はやっかみ半分ということで……」
「なんだよ、それ。あいつはそうだろうけど、俺は関係ないぞ」
「ご謙遜。……入学式を堂々と屋上でサボってたのは、どこのどなたさんでしたっけ？」
「そんなの」
その程度の事とは思うのだが、どうやら、翔峰学園に世間の常識は通じないらしい。
「このガッコじゃ、思いっ切り目立つって。挙げ句に授業はサボるわ、怪しげなお兄様が校門まで車でお迎えにくるわ。ついでに言うなら、そのお顔……。有名にならない方が不思議。お友達がいないから、余計尾鰭が付くんだよ」
むっと顔を顰めた操は、煙草を地面でにじった。
操の内心を知ってか知らずか、杉本はぺらぺらと話し続ける。
「知ってっか？　この頃、よく聞かれるんだぜ。雑賀操にネェちゃんか妹はいないのかってね。……意味判る？」
判らない訳はない。中学の頃に、散々友人達から言われた事だ。
親兄弟にまで似たような事を言われた。あくまでも、似たような事、だが。
〝女の子だったら最高だったのに〟というのが、操が幼い頃の家族の口癖だった。しかも、兄達は時々女の子の格好をさせるという暴挙にまで出たのだ。その当時の恥ずかしい写真は、何冊ものアルバムに綺麗に並んでいる。さらにムカつく事に、アルバムに並んだ女の子の写真は、自分で見ても可愛いと来ていた。

なんでも、若い頃、ミスなんとかだったとかいう、祖母にそっくりなのだそうだ。写真を前に何度も聞かされて、耳に胼胝ができている。しかも、腹立たしい事に、操の目から見ても本当に似ていた。

「ふん……そのうち、女装して登校してやろうか」

「うわっ……マジ？　それって最高。……借りてきてやろうか。女子部の制服」

「ばーか」

明後日の方に視線を泳がせた操は、新しい煙草を銜えた。

これを言われたくないばかりに突っ張っているのに、友人と認めた人間に言われたのでは洒落にならない。

「……女子部の制服が欲しいなら、明日にでも持ってきてあげようか？」

「んぁ？」

あらぬ所から声が聞こえて、操はきょろきょろと辺りを見回した。

女子部との間に立ちはだかる三メートル近いコンクリートの塀と、木の壁に挟まれた空間は、自分と杉本以外、誰もいない。

「下、下。しゃがんでごらん」

仕方なくしゃがみ込んだ操は、そこに格子がある事に気付いた。そして、その向こうにいる男の姿にも。

「あ……あんた……」

「やっと顔が見えた」
「……何してやがんだそんなとこで！」
「部活」
それは判っている。
武道館は剣道部と柔道部が使っているのだ。
ただし。
「いいのかよ。昼休みは部活禁止なんだろ？」
「午後から一年生が剣道をやるだろう？　準備をするのも剣道部の仕事なんだよ」
そんなもの部長自らやるな、とも言えずに、操は溜め息混じりに呟いた。
「剣道ねぇ……」
そういえば入学案内の時、竹刀を買わされた。そのままロッカーに突っ込んでいるのですっかり忘れていたが、やはり竹刀を使うのは体育の授業だろう。
「悪い事は言わないから、一番ボロいのを選んだ方がいいよ」
「どうしてですかぁ」
横から口を挟んできた杉本は、愛想笑いを浮かべていた。
長いものには巻かれる主義だというのは、嘘ではないらしい。
平素から、杉本が教師に正面だって逆らう事はない。何を言われてものらりくらりと言い逃れるのだ。生徒会が相手でも、同じ対応になるのだろう。

「どうせ本格的にはやらないけど、最初は防具の着け方を教わるし、面まできっちり着けるからね。……授業で使うのは、代々の剣道部員が残していってくれたものだからね。けど、綺麗なのはつい最近まで使われてたヤツなんだよ」

「……で？」

「臭いがフレッシュでね……。籠手もだよ。汗と革の臭いが混じっていて、慣れないとキツいだろうね。……その点、古いのは臭いも抜けてるし……」

想像しただけで、くらくらした。

最初の一月は体力測定だの専功希望だので体育の授業が潰されて、その後は実力テストが入り、時間割に週に一度だけ現れる「体育（武）」の正体が判ったのは、ほんのつい先週だった。

いきなり武道館に集合させられて、五十分間ただひたすら受け身の練習をさせられたのである。なるほど、今日は剣道らしい。きっとあの初老の教師は防具の着け方と正座で一時間を潰す気に違いない。

「大佐古を甘く見ない方がいいよ。何しろ、剣道と柔道と将棋と書道を合わせて二十段ていう猛者だからね」

「どれが何段なんですか」

「剣道が五段というのは確かだね」

おそらく、剣道部の顧問なのだろう。多忙な副会長が防具の用意を頼まれてしまう理由はそれぐらいしか思い浮かばなかった。

「……あ、そうだ。雑賀くん、俺のを使う？　買い替えたばかりだし、革の臭いしかしないよ」
「結構です」
普通なら、見知らぬ人間の使ったものより、顔が判っている人間のものの方を選ぶだろう。
しかし、矢崎の防具を使う気にはならなかった。
「あ、そうか……サイズに問題ありか」
「そうでしょうね」
そっけなく応じる操に、杉本はにやけた笑みを投げた。
「これ以上噂になるのは勘弁って？」
「煩い！」
ばっと立ち上がった操は、そのままずんずんと歩き出した。
「こら！　吸い殻は始末しろ！　幾ら教師が甘くても、証拠が残っていたら、犯人を捕まえなきゃならない」
ピントのずれた説教をする矢崎は無視する。
狙い澄ましたようなタイミングで予鈴が鳴った。

3

「ちい兄ちゃん。……なんで来るんだよ。罰ゲームは終わったんだろ？」

校門を出た所で、誰が見ても怪しい風体の三男を見付けた操は、思い切り顔を歪めた。
ぞろりと長い髪を後ろで引っ括って、おまけにヘアバンドまでしている。
直ぐ上の兄隆三は、さして顔は売れていないが、一応プロのドラマーだ。ツアーのサポートをやったりレコーディングを手伝ったりと、そこいらのフリーターなど比べ物にならないぐらい、不安定で不規則な生活をしていた。
お陰で、仕事さえなければ、こんな半端な時間に学校までのこのこ現れる事もできる。
「迎えに来られると都合が悪い事でもあんのか？」
「別に……」
まさか、自分の兄を愛人か恋人のように噂するヤツがいるとは言えない。隆三が腹を立てるからではなく——そうならどれほど良かっただろう——面白がって、何をしでかすか判らないからだ。
何しろ、中学に入ったばかりの頃、女装させられてバンドの打ち上げに連れていかれたぐらいである。しばらくの間、ロリコン扱いされたと、嬉しげに宣うほどのヘンタイなのだ。
「お迎えなんかいっくらでもいるだろうが」
「いねーよ。女子部じゃあるまいし」
一応、名の通ったお嬢様、お坊ちゃん校である。冗談ではなく、女子部の方には、お迎えの車の来る生徒がいるらしい。
もちろん、高校生の野郎を迎えに来る車は、流石に皆無だ。

「いーだろうがよ。たまには一緒にメシでも食おうってオニー様の優しい心遣いだ」
ちろりと、操は兄を見上げた。
これが長男の誘いならほいほい乗った。
だが、相手が隆三となると、裏があると思った方がいい。何しろ、前科は数え切れないほどあるのだ。確かに飯は食えるだろうが、必ずオマケが付いてくる。
判ってはいるのだが、ぞろぞろと生徒達が下校する通りで、何時までも立ち話をするのはそれはそれで厭だった。ここは素直に車に乗るしかないらしい。
「……雑賀くん。どうしたんだい？」
――出たな妖怪――
腹の中で呟き、操はくるりと振り返った。
胴着に袴という姿で、矢崎が立っている。その後ろには剣道部員。部長の後ろ姿に軽く会釈してそのままランニングに向かう。
「あ、どーも。すんません。すぐどきます」
言い捨てて、車に滑り込む。
訳の判らない副会長様の説教を聞くぐらいなら、隆三の悪巧みに乗った方がましだ。精々で新しい友人を揶揄うという程度の事だろうから。
が、ドアに手を掛けても動かない。
「このやろっ！」

節高の大きな手が車のドアをがっしりと押さえている。
矢崎は怒鳴った操には目も向けず、隆三を睨み据えていた。
「争っているように見えたんですがね」
「いやー。……うん、中華にするか、和食にするかで揉めてたよ」
へらりと言ってのけた隆三が、運転席に滑り込む。
兄の行動より、矢崎の反応の方が気になった。ここで喧嘩でも始められた日には、目も当てられない。
怖々と見上げると、顎ばかりが見えた。顔が見える訳でもないのに、矢崎がむっとしたのが感じ取れる。
一瞬、息を飲んだ操は、それでも、文句をぶつけた。
「放してくんないかなー」
「雑賀くん……」
酷く戸惑った顔が、覗き込んでくる。
「主将……サボっててていいのかなぁ」
意地悪く切り返すと、漸くドアから手が離れる。
間髪を入れずにドアを閉めると、エンジンが掛かった。
「早く出せよ」
「ほいほい」



妙に浮かれた答えが返り、車は急発進した。
タイアが厭な音を立てて鳴いて、道行く生徒達が、怪訝に振り返る。
「そこまでせんでも……」
操がぶつぶつと呟いたところで、もちろん、隆三が聞いている筈もない。
身を捩って窺い見ると、リアウインドーのフレームの中に、呆然と立ち尽くす矢崎が見える。
やがて、その姿が見えなくなり、操は漸く正面を向いて座り直した。
「なに？　そんなに気になる？」
「なにが？」
「あの、あんちゃん……剣道部の主将だっけ？」
「なんで知ってんだよ」
「なんでって……お前が言ったんじゃないか？」
「そうかい」
「……そうかいって……機嫌悪いなぁ。あいつになんかされた？」
「はいぃ？」
露骨に顔を顰めた操を、隆三がちらちらとルームミラーで盗み見ている。
「なんかってなんだよ」
「エッ？　むりやり部活に勧誘されてんのかなぁ……なんて」
小さく舌打ちをした操は、渋々と頷いた。

「……ま、似たようなモン」
「あっそう。——それで、何食べにいく？　中華？　和食？」
「ばーか。……どうせ、どっかの打ち上げなんだろ？　リクエストなんて聞くなよ」
「まあ、察しのよろしいこと……。でも、カラオケだからね。大抵のものは出てくるよ。頼めば、だけど」
「なに？　レコーディングの打ち上げだろ？　それなのにカラオケ？　わっかんねぇな……」
打ち上げならば、心当たりがある。それなりに名の売れた女性ボーカリストのアルバムだ。隆三は半月も前に仕事を終えてのんびりしていたが、歌入れに手間取っていたらしい。
「まぁ、そう言わずに……。ご褒美に操ちゃんを連れてくって約束で、マキちゃんのご機嫌取ったんだから……」
「げぇ……」
思い切り顔を歪めた操は、内心で安堵の溜め息をついた。
ボーカルのオネーサマが、操をツバメ扱いして喜ぶ趣味があるのである。女装させられて遊ばれるのと、スーツだのなんだのを買い与えられて、その度に着替えて見せるのを比べれば、それはもうスーツの方が百倍もましだ。
何度もルージュを塗り直しながら、キスで頬を真っ赤に染めるというのは勘弁して欲しいが、無精髭だらけの頬を擦り付けられる事を思えば我慢もできた。
何より、彼女の歌は好きだ。

耳元で囁くように歌って貰っているとファンに知られたら、血を見るかもしれない。所謂、ヒットチャートに名前が出るようなボーカリストではないが、熱心なファンを持っていたし、ライブは常に一杯になった。

なんといっても、美人でスタイルがよろしいのが丸である。普通なら、ステージの下から眺め上げるのがせいぜいの相手だ。

隆三が曲がりなりにもドラマーなぞやっているから、お知り合いになれたようなものである。

「なーにニタニタしてるんだ？　あぁ、そういやお前、この前もコートだのスーツだの買って貰ってたもんな。……そうか。もう一年以上経ったか……」

ぼそりと呟いた隆三は、らしくもなく力ない笑みを浮かべた。

「お前、今日は絶対に逆らうなよ。ホテルへ行こうって言われたら、ついてくぐらいの事はしてやれ」

「……おいおい……。弟を売る気か？」

いくらなんでも、初体験が三十過ぎのババアというのは悲しい。三メートルの塀があるとはいえ、兄妹校にはわんさかと女が群れているのだ。高い壁と衆目という監視の眼は光っていたが。

「お、いいねぇ。おねぇ様ってのはいいぞ。手際が悪くったって、下手くそだったって、可愛いの一言で済ませてくれるからな。今時の女の子は文句が多くて、面倒だからな」

ろくでもない事を口走る兄を、胡乱に見やり、操は呆れ声で問い返す。

「まさか援交とかしてないだろうな」

「バーカ。ケツの青いガキに払う金があったら、新しいスネア買った方がましだ」
「……なるほど……。だよな、弟を売り兼ねないぐらいビンボーなんだもんな」
けらけらと笑う兄は、金で売り払わないまでも、ボーカルのご機嫌取りに弟を差し出すぐらいは当たり前と考えているらしい。
これでも小学校の二、三年頃までは、この直ぐ上の兄こそが、操を猫可愛がりしていたという話だが、操自身の記憶にあるのは長兄の事ばかりだった。
「前のアルバム出した直後に、旦那が死んじまったんだよ。……だからさ。思い切り愚痴るかもしんねぇけど、お前はごろごろ懐いてりゃいいから……」
「俺は犬か？」
精々不機嫌を顕に問い返してやると、隆三が事もなげに訂正する。
「猫だ、猫」
マキが結婚していた事も、ましてその相手が死んだ事も知らなかった。高校生になって、それぐらいの話は打ち明けてもいいと判断したのだろうか。
「……判ったよ」
頷いた操の頭の中には、校門の前でトラブった矢崎の事など、微塵も残っていなかった。
「あ、ウチ寄って。着替えるから……」
「へいへい……判ってますよ。お坊ちゃま」
気のない返事をしながらも、隆三は車を彼らの住む家に向かって走らせた。

4

幾ら私服は着ていても、どこから見ても高校生、下手をすれば中学生に見えるガキが、夜の夜中にふらふらしていたら、警察に声を掛けられる。大抵の大人は見て見ぬ振りをするのだが、流石にお仕事で子供を捕まえている連中はそうは行かないらしい。

だが、いかにも保護者という顔をした人間と一緒だと、さしもの警察官もちらちらと見るだけだった。

ちい兄ちゃん、ちい兄ちゃんと操が喚くのは、本物の保護者だと知らせるためだ。

何しろ、最近は野郎が野郎相手に援助交際などという、ちょっと鳥肌ものの関係まであるらしい。下手に疑いの目を向けられるぐらいなら、大声で喧伝してやろうと思ったのは、やはり酔っ払っていた所為かもしれない。

正気なら、いい歳をして兄に甘える不気味さに考えが及んだだろうが、今は難癖を付けられたくない一心しかなかった。

そうしなければならないほど、丸っきり似ていない兄弟なのだ。

長男と三男は父親のＤＮＡが支配的で、次男と四男は母方の遺伝子をしっかり受け継いでいる。両親の顔をしっかり認識していれば、なんの不思議もなく兄弟なのだが、どちらか片方しか知らないと、不思議な兄弟に見えるらしい。

幼稚園児の頃、遊園地で駄々を捏ねて、あやうく長男を誘拐犯にしそうになったのは、幼心にしっかりと刻み付けられたエピソードだった。
年の離れた、しかも似ていない兄弟というのは、色々と面倒に巻き込まれるものなのである。
「酔っ払い。……お前、年々弱くなってないか？」
がっしりと腕にしがみ付いているのが気に入らないのか、隆二が引き剥がしに掛かる。
「兄ちゃん酷いぃ！」
ここぞとばかりに悲鳴を上げる。
「ああ煩い」
「いーじゃん。どーしてだよ。兄ちゃんが連れてきたんだぞ！　俺、連れてきてくれなんて頼んでねーもん」
「はいはい」
「なーにが懐いてりゃいいだよ！　俺なんか、泣かれたんだぞ！　大人の女の人に泣かれたんだからな！」
ああ、酔っ払ってるなぁと自覚しているのだが、口が勝手に喋っている。
「あー、もう悪かった悪かった。……お前が悪いんじゃないから……。な？　おとなしくおウチに帰ろうね」
「当たり前だ！　俺が悪い訳ないだろ！」
「はいはい、その通り」

宥める声が、どうにも気に障る。
「煩いなー。暴れるぞ」
「やめてくれ……」
うんざりとした呟きが、妙に心地好い。
少しぐらいは困らせてやる方がいいのだ。そうすれば、自分の都合で連れ回すのはやめるかもしれない。
「タクシー代出してやるから、ちゃんと帰れよ、な？」
「なんだとぉ。勝手な事言ってんじゃねーぞ。……俺をほっぽり出す気か？」
「人聞きの悪い……お兄ちゃんは、これからまだ付き合いが……いい子だから、おとなしくおウチに帰ろうね」
宥めるような声音が、尚更、操の神経を逆撫でする。
「このやろ。てめえの都合で連れ出した癖に……こんな所で捨てるのかぁ！」
「人聞きの悪いこと言うなよ。……だから、タクシー拾ってやるから……」
操が本当に暴れてやろうかと思った矢先、ごそごそとジーンズのポケットを探った隆二は、よれよれの万札を取り出すと、一枚を手に押し付けてくる。
「これだけ？」
ぼそりと呟くと、もう一枚増える。
「へっへっ……。仕方ねぇな……帰ってやるぜ」

まあ、小遣い稼ぎと思えば、散々飲み食いして一万円なりなら悪くはない。年上のお姉様に泣き付かれるくらいは御愛敬だ。
「ほら、タクシー捕まえろよ」
兄の手を解放して、背中を強かに張る。
「へぇへぇ……お坊ちゃまの言う通り」
歩道から車道を眺めやった隆三は、やってきたタクシーを無理矢理に止めた。
タクシーの運転手に何事か告げて、操を手招く。
「いーか。ちゃんと帰るんだぞ。お袋には明日には帰るって言っといてくれ」
「いーもん。和隆に言うから」
ふふんと鼻で笑った操を、隆三が悲痛な眼で見詰め返す。
両親より誰より、真面目で怖い長男。夜中に操を放り出したとなると、ねちねちとした厭味攻撃が始まるのは目に見えている。
「おい、冗談……」
「いいから出して。……バイバイにーちゃん！」
景気良く手を振ってやると、窓を手早く閉める。
「方南町でよろしいんですね」
「そ。よろしく」
「判りました」

珍しく、お返事のいいドライバーに、改めて目を向けた操は、女だという事に気付いた。驚くほどの事でもないが、昼間ならまだしも夜中の十二時に遭遇するとは思わなかったのだ。
「こんな時間まで、大変っすね」
酔っ払いの気易さで、声を掛ける。
「……こんな時間まで遊んでるヤツが言う事じゃないか……」
「いいお兄さんですね」
「そうかなぁ。おっきい兄ちゃんなら判るけど……」
「御兄弟は多いんですか？」
いい気分になっている所為で、話し掛けられるのが苦にならない。元々、年上と話す方が気が楽なのだ。
「四人。珍しいでしょ。クラスでも一人だったし、大抵驚かれるんだよね」
「そうですね。今は珍しいかもしれませんね」
「すっげ歳が離れてるから、親父が四人いるみたいでさ、もうウザイったらねーの」
くすくすと笑うドライバーは、操の母親と同年代に見える。
コンソールパネルの左端に載った身分証明書には、四十九と年齢が書かれていた。その年齢まで行くと、女の歳を当てるのは中々難しい。母親より七歳若いとはいえ、こんな時間まで働くのは大変だろう。それくらいは操にも簡単に想像できた。
「……駅の傍でいいですか？」

「えーとそうだけど……。近くになったら教えるから……」
ガラスに顔を押し付けた操は、ほっと溜め息を吐いた。
冷たいガラスが心地好い。
元々、そんなに飲める訳ではない。もちろん、立派な未成年なのだから、おおっぴらに飲むとまずいぐらいの事は知っている。
しかし、身内と一緒に飲むくらいは認められるべきだと思う。そうでなければ、自分の体質も知らないまま、いずれ他人と飲む事になる。その方が余程、社会の迷惑だなどと思うのは、操だけだろうか。
今のところ、操の酒量はビール中瓶一本に、カクテル一杯というところだ。それ以上飲むと眠ってしまうので、兄が監視していた。二日酔いをした事がないのは、兄のお陰かもしれない。
「……あれ？」
信号で止まったタクシーの横に、バイクが並ぶ。
その姿に、見覚えがあった。
黒いフルフェイスに、スモークのシールド。
と、男がちらりと、そのヘルメットをこちらに捩じ向ける。
顔など見える筈もないのに、何故か知っている人物だという気がした。
「誰だろ……」
呟いた操は、目をごしごしと擦った。

自分ではそこまでとは思っていないが、結構酔っ払っているらしい。よく知っている人間だと思うのに、名前が思い出せなかった。
「もうすぐ駅ですけど……」
「あ、ここでいいや。……うん。ありがとう」
一万円札を出して、ずりずりと尻をずらせる。降り際に釣りを受け取って車を降り、ガードレールを跨ぎ越す。
走り去るタクシーを見送った操は、大きく息を吐いてその場にしゃがみ込んだ。
「……俺ってバカかも……」
バイクの人物を見極めたかったからといって、車を降りてしまったらなんにもならない。
もちろん、バイクはとっくの昔に走り去っていた。
やはり、酔っているのだろうか。
「間抜けぇ……」
よろよろと歩き始め、すぐに自動販売機の光に引き寄せられる。
握り締めたままの釣り銭を見て眉を寄せ、財布をポケットから引っ張り出す。
「なんだよぉ……」
二万五千百十五円。
千円札の一枚もないのでは、ジュースは買えない。
「チクショウ……。勝手に値上げしやがって！」

一年も前の事を今更愚痴る。
財布に金はあるのだ。
だが、自動販売機は千円札とコインしか受け取ってくれない。
「カワイクない」
飲めないと思うと、見本の缶がやたらと美味そうに見えてくる。これが本物なら、ぶち壊してでも手に入れてやるのに、単なるプラスチックの筒が並んでいるだけだという事を忘れるほどには酔ってはいなかった。
「うー……」
自動販売機は煙草が二台。ジュースが二台。
釣り銭の出口に手を突っ込んで回る。返金のレバーをがちゃがちゃと回して、もう一度返金口に指を突っ込んでみた。
「十円でいーんだよ、十円でぇ！　くそっ！　どーしてねぇんだよ！」
販売機を蹴り飛ばす。
釣りを取ろうとして、余分に百円玉を見付けた事もある。それなのに、こういう時に限って、ただの十円も残っていないのだ。
「十円、欲しい？」
「へ？」
問い掛けに顔を上げると、黒尽くめの男が、つかつかと歩み寄ってくるのが見えた。

フルフェイス越しで妙にくぐもった声だ。
「ほら、十円」
「サンキュっ！」
今時、子供でも十円では喜ばないだろう。もちろん、十円をくれるという人物に疑いの目を向けたりしない。その程度の金額だ。
それでも、操はこの十円が本当に嬉しかった。
嬉々としてコインを自動販売機に入れて、スポーツドリンクのボタンを押す。
「どーして出ねぇんだよぉ！　チクショウ！　泥棒！」
がんがんと自動販売機を蹴る。
「こらこら……」
襟を摑まれて、猫の子のように自動販売機から引き剝がされる。
すごい力だ。
いくら酔っ払い相手でも、右手一本で簡単に人間の動きを制御できる筈がない。
「な……な、な……」
「なな？　何？　……ポカリじゃないのか？」
暴れる操を涼しい顔で押さえ付けた男が、グローブをしたままの手で、自動販売機に百円玉を食わせた。
今度こそ、スポーツドリンクが出る。

男の指先が、コインの返却口を探った。
唖然と見守る操に、男がくるりと向き直る。
「はい、この百円は気に入らなかったみたいだね」
右手にスポーツドリンクの缶、左手に百円玉を載せられて、操は頬を引き攣らせた。
「御礼は？　ありがとう。……ほら、幼稚園で教わらなかった？」
「ありがとうよっ！」
思い切り身体を捻って、手から逃れる。
右手だけで押さえられていたかと思うと、無性に腹が立つ。
たとえそれが、プロレスラーもどきの大男だったとしても、プライドはしくしくと痛むのだ。
この場から逃げたがっている足を叱り付けて、態とらしくない程度にゆっくりとステイオンタブを押し開け、ドリンクを流し込みながら、家に向かう。
「冷たいなぁ。……いいのかな、夜中にこんな所をふらふらしてて……。未成年が酔っ払ってるっていうのも、感心しないな」
「煩い！　帰んだよ！」
今時、ちょっと酒が入ってるからといって、文句を言うヤツはいない。それこそ、担任の教師に見付かれば別かもしれないが、それにしたって気付かなかった振りをしてその場から逃げられれば、しらを切り通す事も簡単だった。
「雑賀くん。君ねぇ……。せめて誰かに送って貰うぐらいの事は」

「ウルセェってんだろ！」
喧嘩を仕掛けても負けるだろう。それぐらいは操にも判る。それでも、逆らわなくてはいけないような、妙な義務感がふつふつと湧いてくるのだ。
だいたい、どうして、夜中の路上で見ず知らずの男に説教されなくてはならないのか。
険悪な視線を振り向けて、繁々とヘルメットの男を睨み据える。
なんだって、夜の夜中に、スモークシールドのヘルメットなんぞ被っているのだろう。それだけでもこの男は怪し過ぎる。
もしかして、顔を見られると困る商売の御方なのだろうか。もしかして……。
酔っ払った頭は、止めどもなく現実感のない想像を組み立てていく。
「あ……」
取り留めのない思考が、不意に蘇った記憶に断ち切られる。
「あんたさっきの！」
タクシーに並んだ男だ。走り去った筈の男が、どうしてここにいるのか判らないが、間違いはない。
「さっきのって……」
ヘルメットの頭が、僅かに傾げられる。
「あんたのせーで俺は車降りちまったんだぞ！　責任取れよな！」
とてつもなく不条理な事を口走っている自覚はあったが、口から出た言葉は回収できない。

むっとした表情でスモークシールドを睨み据えたまま、スポーツドリンクを飲み干す。
「送ろうか？」
「へ？」
男が路上に止めたバイクを振り返る。
「送ってやろう」
「て、あんた誰だよ」
「誰？」
振り向いた男が、ヘルメットのシールドを上げる。
シールドから覗いた顔は、確かに見覚えがあった。
「あーっ！」
なんの間違いか、副会長殿である。
口をぽかんと開けている操の目の前で、黒いヘルメットが取り去られた。
「本当に気付いてなかったの？」
如何にも不本意といった顔で問い返されても困る。
確かに気付いていなかったが、見覚えがあるから咄嗟に車から降りてしまったのだ。
「知るかよ」
「……僕の所為で車を降りたって」
「知ってりゃ降りなかったよ！」

怒鳴って、くるりと背を向けた。
実際、何故そんな事をしてしまったのだろう。こんな顔が出てくると知っていたら、絶対に降りたりしなかったのに。
「それでも、降りてしまったんだから……。責任を持って送り届けるよ」
「なに言って……！」
足早に歩き始めた途端に、またもや、襟首を捕まえられた。
首が絞まって、一瞬気が遠くなる。
ああ、きっと矢崎は、本当は殺すチャンスを待っていたのだ。毎日毎朝、校門の前で見張っていたのも、こ憎たらしい後輩をどうやって殺すか、密かに計画を立てていたからに違いない。
素面に戻ったら、恥ずかしくて叫び出しそうなロマンチックな想像に、酔っ払いはしっかり浸っていた。
もちろん、だからといって、殺されていいとは思わない。相手に殺意があるのだから、どれだけ暴れても正当防衛だという免罪符を貰った気になったというだけだ。
「こら！　ちょっとおとなしく……」
渾身の力で暴れ回る操に、流石の矢崎も手を焼いているようだった。それが妙に嬉しくて、余計に暴れる。
「こら！　雑賀！」
大男が小柄な操を手に余らせておたおたする図というのは、想像するだに楽しい。



「放せよ！　こら！　ヘンタイ！」
頭のどこかで、かちっと音がして、笑いのスイッチが入った。
「こらーっ。何するんだー！」
きゃはきゃはと笑いながら、矢崎の手から逃れる。
「助けてぇ！　あははは……」
無言で手を伸ばしてくる矢崎を、軽いステップで躱す。
矢崎と顔を付き合わせて、相手の動きを探り合いながら、ステップを踏んだ。
自動販売機の皓々とした光の中で、踊る。
ガチガチの堅物の生徒会副会長が、真夜中にこんな所で踊っていると思うと、おかしくて仕方がない。
「あれ？」
一瞬、足を止めた瞬間、操は矢崎に捕えられた。
息が乱れてもいない矢崎が、眉間に皺を寄せて操を睨み下ろしている。
「睨んでも無駄だよ！　弱み握っちゃったもんね。副会長、バイクなんか乗ってんだ。わーるいんだ、悪いんだ。免許取っちゃいけないんだろ？」
鬼の首でも取った気分で囃す。
操にしてみれば、これ以上ない脅しネタだと思ったのだが、狼狽えるかと思いきや、当の矢崎は事もなげに応じた。

「残念だな。安全運転講習に出たら、二ヶ月は乗っていいんだよ。成績の上位百番以内なら受験が認められるし、二ヶ月に一度講習を受け続ければ、違反切符を切られない限り、乗り続けられるんだ」
「んにゃ？」
後ろ首を摑まれている所為か、思わず猫のような声が出てしまう。
「そういう校則に変えたんだよ、ウチの兄貴が」
「ええぇぇ……。ひょっとして、役員て世襲制？」
「何をバカな事を……。こら、操、おとなしくしろ！」
「操ってゆった！　友達でもないのに、操ってゆった！」
「ええい、煩い。黙れ！」
がっしりとした腕に抱きすくめられる。
暴れるタイミングを見計らっていた操は、口を塞がれて、目を見開いた。
やっぱり殺す気なのだ。
両手でしっかり身体を押さえ付けて、挙げ句に口を塞ぐなど、殺意があるとしか思えない。
二の腕の辺りを縛め、動きを封じる腕を必死に抜き取って、容赦なく男の顎を突き上げる。
顔がずれた。
「……こ、殺す気？　東京湾に沈める気だな！」
ぜいぜいと、音を立てて息を吸い込み、矢崎を睨み上げる。

「どうしてそういう結論になるんだ？」
「大黒埠頭から投げる気だ！　そうだろ！」
「おい操……」
ぶんぶんと身体を振って、殺人者の手から逃れた操は、スポーツドリンクの缶を投げ付けて、そのまま走り出した。
勝手知ったる地元だ。
知人の家の庭を抜け、家と家の間の路地とも言えないようなスペースを横歩きして抜けて、自宅に向かう。殺人者の手から逃れたかと思うと、酷く気分が良かった。
あんな大男を出し抜けたのは、立派だ。
「よしよし、操。……まだ、鈍っちゃいないぞ……」
くすくすと楽しげに笑う操は、急激な運動の所為でふらつく足で、皓々と玄関灯が付いた家に入っていった。

5

手作りのパンに自家製のソーセージ。スクランブルエッグとグリーンサラダ。
木曜の朝の定番メニューのメイン、手作りパンは、昨日の夜、母親が近所のおばちゃん達と開いたパン教室の成果だ。

朝っぱらからメロンパンというのはちょっと違う気がするが、冷凍されている食パンを焼く気にはなれなくて、操はぼそぼそと、甘ったるいパンを食べていた。
「……ちい兄ちゃんは、帰った？」
「まだよ。どうせ今日中っていっても、夜になるんじゃないかしら」
細かい事には拘らない母親は、美味そうにメロンパンを食べている。
確かに、これはこれで美味いが、やはりおやつだろう。
どうやって食べるべきか考えている操の前に、食パンが置かれた。電子レンジで解凍されたらしい食パンは、ほかほかと湯気を立てているが、焦げ目はなかった。
「まだましだろう？」
「うん。ありがとう」
にっこりと笑った和隆は、操の隣に腰を下ろした。
操が生まれた時、既に大学生だった長兄は、間違いなくもう一人の父親である。本物の方は友人の父親と比べると、祖父とも言える年かもしれなかった。ただし、正真正銘の祖父とも同居している所為で、操自身はそこまで老けているとは思わないが。
母は元より、父の方も実際の年齢よりは若く見える方だろう。兄の和隆と、そんなに歳が離れているとは思えないのである。
何しろ、操と和隆を親子と見て、父の隆一を和隆の兄と信じていた友人もいるぐらいだ。
「どうしたんだ、ぼんやりして」

「親父は？」
ひくっと眉を動かした和隆は、ソーセージをナイフで切り分けた。
「急な出張だそうだ。……昨日、何時に帰って来た？」
「いや……。昨日っつうか今日っつうか……」
これ見よがしな溜め息を吐いた和隆は、母親に目をやった。
操を上の三人と同じように子育てした彼女を、兄達が責めるのは間違っていると思うのだが、彼等にはとんでもない放任主義に見えるらしい。
女の子を期待していた祖父、父、兄三人と違って、彼女は〝余計なものを付けて生まれた四番目〟を、すぐに男の子と認めた。ところが残りの男共は、兄弟の誰より、可愛らしい弟に女の子の服を着せ、七五三に振袖バージョンの写真を撮り、随分と長い事、夢幻（ゆめまぼろし）の女の子を追い掛けていたのだ。
十年以上前とでは少々世間様の事情は違うとはいえ、母親にしてみれば、所詮は大人ぶりたい男の子でしかない。少しばかり羽目を外したところで、前例が三人もいれば鷹揚（おうよう）に構えて当然だろう。
もっとも、その至って公正な母親も、兄達が末っ子を着せ換え人形にするのを止めなかったのだから、どこかで引っ掛かっていたのかもしれない。
「ちい兄ちゃんの打ち上げに行ってたんだよ。……マキさんのアルバムの……」
「隆三は帰ってないのか？」

「うん。マキさん、ちょっと荒れててさ。ちい兄ちゃんは、お守り。で、俺はタクシーで帰って来た」
「午前様？」
「まあ……ちょびっとね」
「酒を飲んで、一人でタクシーで帰ってきたのか？」
「大丈夫だって。ちい兄ちゃんがそんなに飲ませてくれる訳ないじゃん」
そうは言ったものの、昨夜の記憶が妙に霞んでいた。
常日頃、記憶がなくなるのはアルコール依存症と言い切っている和隆には、どうあっても知られたくない事実だ。万が一、和隆に禁酒令でも出された日には、隆三のお誘いに乗る事もできなくなるだろう。
「酔ったという自覚があれば、立派な酔っ払いだ」
「またぁ。自分が滅茶苦茶強いからって……。俺、二日酔いもしてないだろ？　記憶もちゃんとしてるし、大丈夫、大丈夫」
「何が、だ。二日酔いするのは、体質が酒を受け付けないからだ。二日酔いなんぞをするくらいなら飲むな。酒を飲めないのは恥でもなんでもないんだからな。酒を言い訳にするのは恥以外の何ものでもないが」
よくもまぁ、文句がぺらぺらと出てくるものだ――そんな感想はおくびにも出さずに、操は神妙に頷く。

どんなに酒を飲んでも、ふらつきもしない〝鋼鉄の肝臓〟の持ち主は、酔っ払いに酷く冷たかった。

そして、それを誰よりよく知る隆三はといえば、二日酔いしそうだと思うと、酔いが醒めるまで帰ってこないという方法で、四度に三回くらいの割合で和隆の攻撃から逃れている。

そんな荒技が使えない操はといえば、口煩い兄に二日酔いではないと証明するために、ソーセージを丸齧りするしかなかった。

実のところ、兄の監視下でしか飲んだ事がないので、二日酔いがどうなるか、経験した事がない。〝二日酔いの実態〟は立派に二日酔いをする隆三を、密かに観察するくらいしか知りようがないのだが、彼の様子を見ている限り、油っこいものは食べたくなくなるらしいのだ。

どうせ二日酔いできない体質の和隆は、本物の二日酔いがどういうものか、見て理解しているだけだろう。二日酔いの隆三が、したがらない事を積極的にして見せるのは効果がある。

「送っていこう。……早く食べなさい」

「あ……うん」

言い置いてダイニングを出ていく和隆の背に応じると、操はパンにかぶり付いた。

どうやら、彼は操の食パンを解凍するためだけに、ここに現れたらしい。

甘やかされているとは思う。

しかし、生まれた時から甘やかされてきた操は、それを鬱陶しいとも思わなかったし、自立しなければなどとも思わなかった。

兄がいなければ、などと想像する事はできても、まるでリアリティを感じられないように、甘やかされない自分を想定する事ができないのだ。

そのうち彼女ができれば変わるわよ、と言う母の言葉など、それにも増してリアリティがなかった。それが、自分を指しているのか、長兄を指しているのかは知らないが、どらにしても、十数年培われた関係が、根本的に変わるとは思えない。

操自身にしても、精々がところ、兄達に寄って集って甘やかされている事を隠そうと思うようになった程度だ。中学の頃など、操の甘い兄達を友人総てが知っていた。折角、その中学の時の同級生が数えるほどしかいない高校に行ったのだから、外では恰好を付けたかった。それさえ、既に過去形になりつつある。

もとより、不良を気取るには、少しばかり迫力が足らない事は自覚しているのだ。本物の迫力がある人間が、優等生の顔をして平然と居座っているという事実を知ってしまうと、虚しさを感じるばかりである。

今のところ、規格外と認識されているだけでも上等というところだろう。何しろ、入学して、二ヶ月と少しだ。いずれ見た目の方も付いてくれば、完璧になる。そうなれば、ラブレターを送ってくる先輩方も目が覚めるだろう。

そう、夏休み明けくらいには……。

「あーあ……何食ったら、兄ちゃんらみたくでかくなるんだろ?」

ぼそぼそとした呟きに、思いも掛けず、母親が答える。

「無理じゃない？　あんたの歳には、みんな今と大差なかったもの。……言っとくけど、おんなじもの食べさせてるからね。……そうでもないかな。あんたの方がいいもの食べてるかも……。カルシウムとか気を遣ったし……」

言うだけ言って、にっこり。

どこの誰が見ても、母子と断定してくださるだろうほど、そっくりな顔をした母親は、歳の割りには若くて可愛らしい容貌とは裏腹に、雑賀家の誰よりも辛辣だ。

「ああ、そう」

「可哀想にねぇ。顔だけじゃなくて、体格まで、私に似ちゃったのね。——でも、あんたくらい可愛いのが一人くらいいなくちゃ。あんなのが四匹も五匹もいたんじゃ、鬱陶しくて仕方がないもの……ねぇ、マリちゃんもそう思うわよねぇ？」

テーブルの下にいたマリに猫撫で声で問い掛けた母親は、ソーセージの切れ端を彼女に差し出した。とても猫とは思えぬサイズの真っ黒な猫は、にゃんと可愛げな声で答えて、ソーセージを銜える。

何代目かの雌の黒猫は、操と同様、甘やかされまくった挙げ句、骨格からして巨大に育ってしまい、誰も雌とは信じない。

が、彼女は正真正銘雑賀家唯一の娘、である。

「お前はおっきくなったのにねぇ……」

しみじみと呟かれて、操はむっと頬を膨らませた。

猫とまで比べられたら、立つ瀬がない。
そこまで言わんでも、である。
「操……早くしろよ」
リビングの方から、声で急かされて、操は益々顔を顰めた。
「早食いは身にならないんだぞ……」
文句を垂れると、またもや、母親の追い撃ちが掛かる。
「そう思うなら、もう少し早く起きるのね」
全く、こんな不良がいるわけがない。
自分の現実に、密かに溜め息を吐いた操は、残りのパンを口に押し込むと、ダイニングを飛び出した。
車で送って貰えるのはラッキーだが、それにはお説教が漏れなく付いている。
この上、のろのろしていると、文句が倍増するに決まっていた。
今日に限れば、文句は隆二に言って貰いたい。誰がなんと言おうと、操を酒席に連れていった犯人なのだから。
姑息な事を考えながら、上着と校章入りのバッグを取ると、ダイニングに形ばかり顔を覗かせて母親に沙汰をする。
「いってらっしゃい」
にこやかに送り出されて、玄関先で長兄を待つ。

「いいのか？」
「いいよ」
操は振り返りもせずに頷くと、キーボックスに掛けられた和隆の車のキーを取った。

6

「おーい、ミサオー」
窓際の席に座って、あまり美味いとも思えないサンドイッチを頬張りながら、ぼんやりとグラウンドを眺めていた操に、全身から力の抜けそうな間延びした声が掛かる。
「あれー？　もう食ってんの？」
人様のクラスに遠慮もなく踏み込んできたのは、杉本だった。
「一限目の休みに買いにいったからな」
「あ、いーな。焼きそばパンゲットした？」
「誰が買うかいあんなもん」
「なんでよ」
「なんでも。冷えた焼きそばなんて食えたもんじゃネェだろうが……だいたい、焼きそばは焼きそばで食べるもんだろう」
「えー……ま、いいけどさ。昼飯の分も買っちゃった？」

「昼は学食行くよ。お前は？」
「キタムラ行こっかなっと、一緒に行かねぇ？」
「カレーかぁ。それ、いいかも」
賛同すると、杉本は満面に笑みを浮かべた。
もちろん、昼休みに校外に出るのは、校則違反である。だからこそ、誘いがあれば、操としては積極的に参加したいところだ。
「そんな事言いにきたのか？」
杉本と操のクラスは、廊下の端と端、十分休みに遊びにくるにはちと遠い。
「いや、違う違う、古文の教科書持ってねぇ？」
「古文？」
がさがさと机の中を探った操は、小さく首を竦めた。
「ない？」
「……ロッカーだな」
顎でしゃくると、杉本は跳ねるように、教室の廊下側に並んだロッカーに走っていく。
操のロッカーのナンバーロックは杉本にとっては、秘密でもなんでもない。
「借りてくぞ」
操が頷く間もなく、一声残して杉本は教室を飛び出していった。
ふと、見渡すと、教室内にはほとんど人影がない。

「あり……」
そろそろ始業時間の筈だ。
「あ……化学だ」
化学の授業は移動教室である。
チャイムが鳴った。
「あちゃー……。完全遅刻だな、こりゃ」
化学の担当講師は、化学準備室の隣の講師室に生息していた。職員室から出勤あそばす教師と違って、遅れる事はまずない。しかも、時間には極めてシビアと来ている。
取り敢えず、教科書とノートだけは手にしたものの、授業に出る気にはならなかった。化学の講師は、自分が時間に正確なだけに、恐ろしく遅刻に煩いのだ。
密かにサボタージュを決めて、それでも、ふらふらと廊下を歩き出す。
教師に見付かれば、煩い事を言われるだろうが、今のところ、その心配はなさそうだ。
階段まで辿り着いて、上に行くか下に行くかをしばし迷う。
上に行けば、美術などの特別教室と、屋上。
下に行けば、今の授業で使っている筈の化学室。
どちらに行くかは考えるまでもない。下への階段を目の隅で窺いながら、上り階段に足を掛けたところで、聞き覚えのある声が上から降ってきた。
「雑賀くん、どこに行くのかな。上の教室で一年の授業はない筈だが……」

うんざりと天を仰いだ操の視線の先に、昨夜も見た顔がある。
「そう言うあんたは、何してんだ？　授業は始まってんじゃないの？」
嫌味たっぷりに言い返すと、矢崎は呆れたように首を竦めた。
「コンピュータの授業は、課題さえ片付ければ終わりだからね。……空いた時間を執務に使うのに、誰も文句は言わない」
――執務！　執務!?　てめぇは政治家か、厭味なヤツー！――
内心で毒吐いた操は、視線を逸らすと、階段を駆け上がった。
「確か……今の時間は化学だろう」
「はいい？」
何故知っているのだろう。
いや、調べようと思えば簡単な事だから、不思議というより、既に無気味だ。
もちろん、少々規格外れとはいえ、所詮は入学したての一年生の時間割を、天下の生徒会副会長殿が調べ上げている事が、である。
「あまりサボらない方がいいよ。山本先生は記憶力がいいからね。どういう言い訳をしたのかまで、ひとりひとり覚えているよ」
「なんだよそれ」
「その場限りの言い訳が見破られるって事。腹痛が続いたり、熱が続いたり、交互だったり、分析まで得意だからね」

にやっと笑った矢崎は、授業をサボる事自体は咎めなかった。
真面目な生徒会役員からは、ちょっと信じられない反応だ。少なくとも、朝から制服のタイがきちんと結ばれているかなどと、チェックしている御方の言葉とは思えない。
「あんた、結構悪いんだ……」
「悪いのは君の方だろう。先輩に向かってあんたはないんじゃないか？」
くすくすと楽しげに笑う矢崎は、操の肩に手を回した。
「何すんだよ！」
「生徒会室へおいで……」
「なんだとぉ？」
「訪ねてきて、眠ってしまったって事にすればいい」
「はぁ？」
訳が判らず惚けた顔で見上げる操を見下ろし、矢崎副総統が嬉しそうに解説してくださる。
「下手な言い訳をするより、よっぽど信じてくれるよ。生徒会室のソファーは山本先生の払い下げ品で、座り心地がいい事はご存知だからね。この時期、日向ぼっこしていたら、眠くなるのも当たり前だ」
確かに、天気のいい日は窓際の席だと、目を開けているのが辛くなる。だからといって、居眠りしていて授業に遅れたというのは、言い訳にすらなっていないような気がした。
だからといって、納得できる解説でもない。

「大丈夫だって。先輩の言う事を信じなさい。山本先生は下手な言い訳より、生理現象に理解があるから」

頷きそうになって、操は慌てて表情を引き締めた。

何か違う。

授業をサボって、教師の心証が悪くなる事を気にする不良はいない筈だ。それを、愛想良くして、お目こぼしして貰うというのでは、中学の時のままではないか。

そもそも、私語などで授業を妨害するぐらいなら、教室から出ていけというのが、この学校の教育方針だった。他のクラスも含めて、授業の邪魔をしない限り、うろうろしている事は認められている。

図書館も、食堂も、授業に出たくない生徒のために常に解放されているのだ。

もちろん、成績の悪い人間は、真面目に授業に出て教師の心証を良くするしかなくなるのだが。

「お茶を淹れてあげよう。……おいで」

猫撫で声の副会長は、ひょっとするとドロップアウトしそうな生徒をチェックするという使命感に燃えているのかもしれない。

副会長直々に目を付けられたと思うと、少しばかりプライドがくすぐられる。

機嫌の良さが顔に出たのか、ほっとしたように笑みを浮かべた矢崎が、操の腕を摑んで生徒会室に連行していった。

「おいおい。何すんだよ！」

身長差は二十センチ近くある。体重の差は二十キロではきかないだろう。
昨夜のように酔っ払っていたなら、後先考えずに逆らう事もできたが、今はついつい現実を見てしまう。
「やめろって！」
声を殺して怒鳴る。
大袈裟に罵声でも上げれば、教師が出てくるだろう。そうなったら、操の方が授業妨害者に見える事は確実だった。
結局、腕を掴まれてずるずると引っ張られるまま、歩くしかない。
途中で何度かタイミングを計って脱走しようとしたのだが、その度に引き戻された。片手で動きを制するところは面白くないが、お陰で逆らう気力が萎えるのも事実だ。
「……どうぞ」
結局、何事もなかったかのように、生徒会室に案内される。
「おや……。雑賀くん」
「げ……。総裁……」
どうして生徒会長にまで名前を知られているのだろう。
確かに、操の方は、嘘か誠か、総裁に纏わる話は幾らでも知ってる。
たとえば、東大進学間違いなしと言われているのに、京大を受けると宣言して、教師を嘆かせている変わり者だという噂とか。

優秀な生徒は系列の大学に進ませたい。そうでなければ、高校のランク表示の基準となる東大に行って欲しいというのが、経営者の望みなのに、総裁は学者になってノーベル賞が欲しいからという、よく判らない理由で京大を目指しているという話とか。

もう少し卑近なところで、全国模試の類は、常にトップだとか。学年トップを小学生の時から続けているとか。この学校の女子部を始め、近隣の学校にいくつもファンクラブがあるとか。

どこまでが本当かは判らないが、新入生が真っ先に吹き込まれる華々しい噂の持ち主である。おまけに、いかにも総裁という渾名がぴったりの、がっちりした逆三角形のアニメに出てくるような軍人体型をしていた。

そう、矢崎を更に、ごつくした男である。如何にも武闘家という雰囲気の矢崎とは違って、こちらはエリート将校なのだ。

「お邪魔かな？」

腰を上げた総裁が、にっこりと笑みを浮かべる。

「放課後、見回りに出るからな」

そう告げた総裁は、操の頭に手を置いた。

「ごゆっくり……」

「会長……」

明らかに、機嫌が悪いと知れる声を出す矢崎は、操の肩を摑んだまま、窓際のソファーに向かった。

なるほど、暖かな光が差し込み、ついつい昼寝をしてしまうというのも、あながち嘘ではなさそうだ。
「鍵は掛けておけよ」
それだけ言いおいて、会長が消える。
幾ら生徒会室でも、授業をサボって昼寝しているのがばれるとまずいのだろう。
しかも、生徒会とは無関係な一年坊主までいるのだ。
「こんな親切にしてくれなくたって、副会長が暴走族だなんてばらしませんよ」
鍵を掛ける矢崎を見守った操は、ソファーに腰を下ろした。
なるほど、座り心地がいい。スプリングもちゃんとしているし、枕にするのに都合の良さそうなクッションもある。
「暴走族とは心外だな」
「じゃ、なんであんな時間にうろうろしてたんですか？　しかも夜中にスモークのシールド付けて……。顔を見られたくないからでしょ？　まさか、俺のこと付けてた訳じゃないよね？」
けけけと笑って、クッションを腹に抱える。
ぽかぽかと暖かな日の光が差し込んで、このまま昼寝をしたらさぞや気持ちいいだろうと思わせるものがあった。
「あれは偶然だ。……ちょっと野暮用があってね」
偶然と言い切るまでは、酷くきっぱりしていたくせに、最後は随分と歯切れが悪い。



「ふーん……野暮用ね」
皮肉たっぷりに繰り返すと、矢崎はごまかすように小さく咳払いをした。
「雑賀くん。今朝、車で通学していたね」
都合が悪くなっての話題転換にしては、かなり露骨だ。
矢崎でも焦る事はあるらしい。
内心密かに嘲笑いながら、悪びれる事なく答えた。
「……あ、と。ちょっと遅くなっちゃったから、送って貰ったんです。別に、許可はいりませんよね」
常時、通学に使用する場合は、届け出が必要だと、入学の時に注意された。なんでも、去年の卒業生には、三年間、車で送迎された者がいたらしい。
「御家族が送る分には問題ないが……」
全く似ていない兄を、矢崎は他人だと思ったらしい。
だとすれば、どういう関係の人間だと思ったのだろうか。まさかお抱え運転士ではないだろう。乗っていた車も普通のファミリーカーで、所謂送迎車ではないのだ。
「いーじゃん、別に……」
どさりと音を立てて、矢崎が隣に座った。酷く醒めた目を操に向けると、奇妙に唇を歪めた。笑っているような、泣いているような顔。
「彼とはどういう関係だ？」

「どう思う？」
妙な表情の意味に想像を巡らせながら、態とらしく聞き返す。
「昨日の彼は？」
全く似ていない長男と三男を見たのだから、混乱するのは判る。唯一兄弟らしく見える次男は、結婚して別に一家を構えていた。近所に住んでいるのだが、顔を合わせる事は滅多にない。
「……まさか、援助交際とか……」
「はぁ？」
素っ頓狂な声が出る。
「なんだとぉ！」
あまりに突飛な言葉に、脳味噌が意味を把握するのに、少し時間が掛かった。
「エンコーって……。俺が売春してるってかぁ!?」
じっくりと顔を見詰めていた矢崎が、不意に視線を逸らした。
「……すまない」
そんな噂がある事は杉本から聞いているが、まさか副会長様にまで滲透しているとは……。
「てめぇ！　いーかげんにしろよ！　兄貴に送って貰っちゃいけねぇってのかよ！　昨日のも兄貴だよ！　下の兄貴！」
腹が立つ。
思い切り、腸が煮えくり返っている。

いきり立った操は、矢崎の耳をひっ摑んだ。
「どこをどう捏ね回したら、俺が援交してるって事になるんだよ、このヤロー！」
「悪かった」
思いの外あっさりと詫びた矢崎に、益々腹が立ってくる。
「そんな事、よくも思い付いたもんだな！」
「……確かに……君とは無縁の話だ。すまなかった……。クズと付き合っていると、そんな考え方が染み付くみたいだな……」
「クズ？　クズだと？　あんた以上のクズがどこにいるって！」
耳の中に怒鳴り付けてやる。
頭ががんがんする。
体温が跳ね上がって、自分が何をしたいのかも判らなくなった。女と間違われ、挙げ句に兄の恋人だと誤解された事もある。男だと判っていて、それでも恋人だと言われた事まであるのだ。
それでも、ここまで腹は立たなかった。
どうしてだか、自分でも判らないが、無茶苦茶に腹が立つ。
「……悪かった。……言い訳にしかならないが……聞いてくれないか。……こんな、お坊ちゃん学校だからな、いいカモだと思う連中は幾らでもいるんだ」
どうごまかす気なのか。言い訳にしては遠回りし過ぎるような気もするが、頭がいい連中は、何を考えているか、判りはしない。

どうせろくでもない策略が頭の中には詰まっているのだ。
「生徒会長が総裁と呼ばれているのは伊達じゃない。彼は、ウチの生徒にちょっかいを出す奴に睨みを利かせている」
「あんたもだろ」
きっと、下校時にこれ見よがしに竹刀を持ってランニングをしているのには、それなりの意味があるに違いない。
近所には、あまり評判の良くない中学校もあるし、今時の中坊が、少年法を熟知して、悪さをしているのは、つい最近まで中学生だった操もよく知っていた。
「……最近、この学校を壊そうとする力は外からだけじゃなくなったんだ。むしろ、内側の腐敗の方が酷いかもしれないな。教師には手を出せない事もあるし、我々も伝統を汚す輩を許すつもりはない」
矢崎の言葉を聞きながら、操は大昔の少年マンガを思い出していた。
番長だの影番だのという、酷くロマンチックな役職の事だ。
だが、歴史だけはたっぷりとあるこの男子校には、そんな化石のようなシステムが、少しばかり形を変えて生き残っていたのかもしれない。
「で？　援交してるようなクズは、叩き出すつもりだったのか？　俺は目ぇ付けられてたんだな！」
「……そんな簡単な話なら……」
「え？」

がっしりとした腕が操を腕ごと抱きすくめる。挙げ句に、口を塞ぎにきた。
秘密を知られたから、殺すつもりだ。
一瞬、頭を過った考えは、次の瞬間には消え失せる。
残念ながら、酒は一滴も入っていないのだ。酔って登校する根性などないし、校内で飲酒する習慣などある訳もなかった。いっそ、そんな悪癖があった方がましだったかもしれない。荒唐無稽な想像で現実逃避するには、操は余りにも冷静だった。
これはもしかして……。
必死に両腕を突っ張って、どうにか逃れると、頭突きを食らわしてやる。
「あたっ！」
怯んだ隙に腕から逃れ出て、そのままドアまで走る。
が、三歩と行かないうちに、足を掴まれた。
思い切り無様に転んだところを、ずるずると引き擦られる。
悲鳴を上げるのは簡単だったが、なけなしのプライドが一瞬それを思い止まらせた。
それが、命取りだった。
次の瞬間には、引き起こされて、床の上でがっしりと背後から両手首を掴まれてホールドされてしまう。
「悪かった……」
耳元で囁かれ、その、なんだか妙に真摯な声音に気が抜ける。

叫ぶのは本当に取りやめ、矢崎の様子を窺った。
子供がお気に入りのぬいぐるみを抱くように、矢崎は操を抱え込んでいる。しかも、どうやらこの大男はぬいぐるみに欲情しているらしいのだ。
下手に暴れたら、火に油を注ぐ事になる。
いきなり、暴力で襲ってきた訳ではない。上手く立ち回れば、逃げられるはずだ。
情けないかな、そういう経験だけは事欠かなかった。
ちょっとした誤解と、場の雰囲気に流されただけなのだから、笑わせればいい。張り詰めたものが切れたら、自然と冗談になるし、二度と手出ししなくなる。
相手が中学生だからこそ通じた技かもしれないが、いきなり野郎を押し倒そうとする野郎に、大差があるとは思えなかった。
少なくとも、操自身が本物のオッサンにモテない事は、確認済みなのだ。相手が本物でない限り、同性に手を出すのは、気の迷いに決まっている。
「あんたさぁ。せっかくいい男なんだから、もうちょっと愛想良くすれば？　なんだったら無愛想な若い子が可愛いとか言っちゃうお姉様紹介してやるよ。アイドルはちょっち難しいけど、エッチ臭いロックなおばちゃんだったら、いつでもオッケーだよ」
大抵の男はここで操も男だった事に気付いてくれる。どうしてそんな人物と付き合いがあるのか、とか、相手の名前を言え、と言われれば、笑いに持っていくのは簡単だった。
何しろ、本当にお知り合いのオバチャンはいたし、紹介すると言われれば笑うしかない婆ちゃ

んも知っていた。
こういう時は、兄の人脈を最大限に利用させて貰う。
だが、矢崎は微塵も興味を示さなかった。
それどころか、抱き締めてくる腕の力を益々強くする。
「……おい、おっさん」
「おっさん？」
「だって、おっさんみたいなもんじゃん。何なついてンだよ」
おっさん呼ばわりには、本気で気分を害したらしい。少々冷たい声が反論してくる。
「心外だな。まだ同い年だよ」
「なんだと？」
「四月生まれだよね。俺は十月生まれだ」
申告通りなら、その通りだが、とても信じられない。どこをどうすれば、この男と自分が同じ歳に見えるのだ。
「なんだとぉ！」
半年か。
たったの半年でこの体格の差か？
思い切り世の中の不条理を実感した操は、低く唸り始めた。
生まれ付いての体格の差とか、遺伝子に支配される人間の悲しさは良く判っている。環境に左

右されると信じられている性格でさえ、六割は遺伝子に支配されているらしい。
デオキシリボ核酸は偉大だ。それは充分判っている。
しかし、同じ人類で、同じ黄色人種で、同じ国に生まれて、同じ年代で、こうも体格が違うというのは、我慢ならない事実だった。
次兄と自分が母親のDNAの影響を強く受けている事は判っていたが、それでも年齢の差が、一抹の望みを抱かせていた。
ところが、自分に貼り付いている男との圧倒的な体格差は、現実を直視せざるをえないインパクトを持っている。
「……俺と付き合ってくれないか？」
「やだ」
きっぱりと答えた操を、矢崎は益々強く抱き締めた。
「やめろって苦しいだろ。おりゃそんな不毛な事はする気はないんだ！」
「不毛か？」
「だろうがよ。なんの得があるってのさ。あんたやーらかくもないし、オッサンだし……」
ぶつくさと文句を並べる操の耳を、熱い舌がぬるりと舐めた。
「やめろって！」
「俺と付き合うと、色々と特典が付いてくるぞ」
「なんだそれ」

「上級生から手出しはされなくなるし、大抵の教師のテストの傾向は教えてやれる。ついでにカツアゲされる危険も減るし、ヤバイ薬を売り付けられる事もなくなる」

ラブレターを貰うのが手出しなら、確かにその通りだが、実害はないし、他も操とは縁がない。唯一特典といえるのは、テストの傾向くらいだろう。

そもそも、これは本当に口説き文句なのだろうか。

「なんだそれ。……やっぱ、あんたかなりヤバイみたいだな」

「冗談だろ。俺なんか真面目なものだ。煙草はやらない酒は飲まない。もちろんクスリもシンナーもな……」

「んなもん、やってねぇよ」

覚醒剤や麻薬、シンナーを使うとどんな悲惨な末路が待ち受けているのか、心配性の兄達が懇切丁寧に教えてくれた。若者の間に蔓延しているなどというニュースを見聞きする所為か、色々な裏情報が耳に入る業界に生息している所為かは知らないが、カリスマとまで言われたボーカリストが、覚醒剤のフラッシュバックで惨めな骸を晒した話を、懇切丁寧に話してくれたのだ。

薬をやめて何年経っても、なんの前触れもなく錯乱する事があるというのは、中学生にはインパクトのある話だった。

「……それは良かった。なんだったら、伯父の病院に見学に連れていこうかと思ってたよ。シンナーっていうのは、脳が溶けるからね」

「いったい何を……」

不意に、操は言葉を途切れさせた。
そういえば、昨夜、シンナーの臭いがしていたかもしれない。もちろん、そんなものを吸っていた訳ではない。ただ単に、衣装フェチのギタリストが、打ち上げの席でまで、エイリアンの貼り付いたチョーカーを作ろうとして四苦八苦していたからだが。
酒に酔っ払ってふらふらしていたのを、シンナー中毒と思われたのかもしれない。
「……あんたさぁ、エンコーやってる薬中のヤローと付き合いたいって思ったわけ？」
皮肉たっぷりに聞き返すと、矢崎は至極真剣に答えた。
「全部やめさせる気だった。……クスリをやっていても、まだ間に合うと思ったしね……」
「あ？」
「炭酸を飲むだろ？　パンも食べていた。……覚醒剤をやっていると、すぐに判るよ。炭酸が飲めなくなって、乾いたものが食べられなくなるからね」
医者の親戚とやらに聞いたのか、酷く実質的な見分け方だ。
「まぁ、大抵顔を見れば判るが……」
だが問題は、操が炭酸飲料を飲み、パンを食べている事を矢崎が知っているという事実だ。
ひょっとすると、こいつはストーカーだったのだろうか。そういえば、妙な場面に限って現れる。昨夜の出会いも、偶然という言葉を信じていいのか不安になってきた。
「あんた……そんなに俺を観察してた訳？」
操が問い詰めても、矢崎は少しも悪びれなかった。

「……危なっかしくて。甘えるのが上手な、可愛らしい子がいるっていうのは、入学して三日と経たずに耳に入ったよ。……橋本さんも、心配して……」
「誰、その橋本さんて……」
「会長だよ」
溜め息と共に、矢崎が告げる。
よし。これで話を日常に戻すきっかけを摑めた。
このまま、やくたいもない話を続ければ、怪力の副会長の腕から逃れられるかもしれない。
「総裁って普通の名前だったんだ」
「どういう意味だ？」
「いや……。なんかさ、なんとかビッチとか、なんとかスキーとかって名前が似合いそうじゃないか」
「体格だけで言っているな……」
「まぁ、顔は日本人だよな」
どんどん話を下らない方へ誘導していく。
それなのに、矢崎はさわさわと操の手を撫でていた。
四角四面、がちがちの優等生という顔をしていて、実は立派な不良の元締めだったり、暢気に他人の噂話をしながらヤローの手を撫で回したり、矢崎は奇々怪々な人物らしい。
まぁ、お堅いだけの優等生より、不良の元締めの方がよっぽどいいが。

操は、もうすっかり、矢崎を不良の元締めと決めていた。どうしても、それ以外には思えないのだ。

「……ロシアの軍服とか着せたら似合いそうだな、とか、思ってたんだよね。やっぱあそこまで分厚い胸ってのは、ロシアでしょ」

「橋本さんは駄目だよ。……あの人は彼女持ちだ」

「へ？　どうして駄目なのさ」

「来年には総裁になる。……厭か？」

「いや、全然……」

ちょっと待て！　厭じゃないと言ったのは、生徒会が実は悪の秘密結社だったという事で、えっちするのが厭じゃないと言った覚えはない！

そう叫びたかった。

だが、顎を摑まれ、いきなり口に舌を突っ込まれたのでは、何も言えない。

挙げ句に、噛み付いてやろうと思った歯の裏を舌先で擽られて、ぞくぞくとした快感まで感じてしまったのだ。

「……やだっ……」

「本当に？」

「やだって……」

全然本気に聞こえないだろう。

舌ったらずな甘ったれた声で厭と言われても、言葉通りに受け取る筈がない。こんな声で厭と訴える相手をコマシて、セクハラで訴えられた人がいたら、操は間違いなく同情しただろう。
本人がそう思うぐらいだから、矢崎はもちろん、言葉通りに受け取ったりしなかった。
舌を擦り合わせて、口の中を舐め回し、制服を剝ぎ取ってゆく。
真っ昼間の学校。
しかも授業中。
眩しいばかりの日の光が差し込む生徒会室で、とんでもない事が起きようとしている。
「やめ……」
「やめない」
妙に自信たっぷりに言い切った矢崎は、操の顔を覗き込んだ。
楽しげな顔。
こいつは本物の不良だ。学校でこんな事をしてても、全然びびっていない。自分とは大違い。
不良に憧れたりしない、不良を気取ったりもしない。
優等生の顔をしていても、誰にもバカにされたりしないだけの、迫力を持つ男。
腹立たしいが、操は負けを認めてしまった。
毎日毎朝、校門の前でねちねちと文句を付けられても、一度として裏門から登校しようとは思わなかったのだ。
つまり、そういう事だ。

矢崎と張り合って、勝てる訳がない。
だったら、懐柔してやる。
その方が、ずっと自分らしいやり方だ。操を子供扱いしたり、女の子扱いする男達を手玉に取る方法は、物心付いた時から鍛錬している。
不良になる努力よりはずっと楽だし、向いているのだろう。きっと。
どう考えても、窮地にいるというのに、操はそんなことを悠長に考えていた。
「操……。よくもずっと無視していてくれたな……」
ぎらつく目で睨みながら、矢崎が慌ただしく手を這わせてくる。
優等生の飼犬にちょっかいを出しているつもりだったが、実はとんでもない野生の獣だったらしい。
「知るか……よ……」
それでなくても隆三の友人達の鬱陶しいほどの求愛に慣らされているのだ。ただの難癖にしか思えないようなアプローチに気付く筈もない。
「覚悟しとけよ」
「……やだぁ……」
舐められたくないから粋がる、というのは、普通の思考だと思う。舐められそうだから、学校内の実力者に擦り寄るというのも、ありがちだろう。
だが、舐められたくないから舐めさせるというのは、どう考えても違う筈だ。

それなのに、矢崎に撫で回され、舐められまくった乳首が、ぴりぴりとした痛みと快感を伝えてくる。

「痛い…よ……」

「我慢しろ」

酷い言いようをする矢崎を、思い切り睨み付ける。

と、唇の端を上げて、矢崎は笑った。

「人の事をいい加減焦らしまくった報いだ。後で幾らでも文句は聞くから、今は黙って我慢してろ」

不条理だ。操の方には焦らした覚えなど全くないのだから。

操の態度をどう取ろうと、あくまで矢崎の勝手である。それを操の方に責任転嫁されても困るのだ。

しかしながら、とても言えない。

嫌悪で鳥肌でも立ってくれれば、ささやかな抵抗くらいになるのだが、残念ながら、半分は気持ちいいのだ。

「我慢すんのかぁ？」

色気のない文句を口にしても、矢崎は耳を貸しもしなかった。

まぁそうだろう。

どう考えても、自分が我慢する事になるに違いない。



不良を気取っていて、チェリーボーイというのもちょっと違う気がする。相手が男というのは想定外だったが、そう悪い取り引きではないかもしれない。

そう。副会長を後ろ楯にするというのは、これからの学校生活を無事に送るという免罪符でもあった。

「やだよ……。気持ち悪い……。やだ、そんなとこ……」

「いいんだろ？」

「やだって……」

これも一種の援助交際というのだろうか。

えっちしていいほど好きだと思っている訳でもないのに、付き合うためには仕方がないなどと思っているのだ。

けれども、身体は気持ちがいい。

溺れてしまうのは、いかにも癪で、なんとか醒めた事を考えようとしているのに、どうしても上手くいかなかった。

男に触られても、ジンマシンが出るだけだと思っていたのに、矢崎に触れられている肌が快感にそそけ立っている。

息が上がってしまう。

叫び出しそうだ。

自分の身体なのに、矢崎がいいように使っている。とんでもなく熱くなった身体を撫で回して、

好きなように折り曲げて、舐めたり弄ったりしているのだ。
自分の息が上がっているのも忘れて、男らしい額に汗を浮かべ、真剣に愛撫する矢崎の顔を、操はぼんやりと見ていた。
ぐいっと、膝の裏を持ち上げられる。
次の瞬間、衝撃が襲った。
もちろん、操は意識を保つ努力などしなかった。気絶できるものなら、さっさと意識を飛ばすに限る。
ただ、その時の矢崎の顔が見られないのが、ちょっと悔しかった。

7

ほかほかと暖かい布が、身体を這い回っている。
熱が出たのだろうか。
ばれたら大変だ。兄ちゃんがかわるがわる現われて、世話焼き競争が始まって、余計に病気が重くなる。幾ら風呂に入れないからといって、三人の兄に従容と身体を拭かれるのは、決して嬉しいものではない。第一、一日に六回もパジャマを着替えたくはない。
けれども、愛されている弟としては、にっこりと笑ってありがとうと言うべきなのだろう。
もちろん、本当に言ったりはしないが。

熱の所為で身体中がぎしぎしいっている。
怠い。
痛い。
でも、眠い。
「操……。大丈夫か？」
声が変だ。
幾ら兄達が甘やかしたがりでも、こんな糸を引きそうに甘い声は出さない。
「……う……ん……」
自分の声も変だ。
パジャマもごわごわしている。
夏はシルク、冬はネルという定番のパジャマではない。
どうしてだろう。
このパジャマはノリが利いている。シーツもノリ着けさせないぐらい、固い布が嫌いなのに、どうしてこんなパジャマを着せられるのだろう。
「操ぉ……」
「……んだよ」
ぱちっと目を開けた操は、矢崎の顔を見付けて、目を剝いた。
何があったのか思い出す。

訳の判らない大騒ぎをして、矢崎に頂かれてしまったのだ。
「悪かった。……ちょっとがっついてて」
そろそろと身体を起した操は、低く呻いた。
痛い。身体中が痛い。人に言えない場所もだが、それより痛いのは股関節だ。
「なにを……。痛ぇ……」
おろおろとして手を伸ばした矢崎は、操の身体を支えた。
「ゼリーがなかったから傷薬使って……。一応。血は出てなかったけど……。ごめんな」
謝るくらいならするな、と言いたいところだが、生憎、今の操にはそんな元気は微塵もない。
ぶつぶつと文句を垂れるのが精々だ。
「身体中がぎしぎしいってる。打ち身もありそう……」
危惧していた痛みとは違うと判ったからか、矢崎は酷くほっとした笑みを見せた。
「身体が固いからだ。……少しは鍛えた方がいい。なんなら、剣道部に入らないか？」
挙げ句に説教好きらしい台詞まで吐いてくださる。
途端に、操の腹の底に怒りの炎が点った。
何をふざけた事を言っている。この身体の痛みは全部矢崎の所為なのだ。それを幸せそうな顔をしやがって。
その上、一瞬とはいえ、操は矢崎に見蕩れてしまったのだ。
許せない。

「……俺、剣道部よか、生徒会の手伝いの方がいいな……」
途端に、相好を崩した矢崎が何を考えているのか、手に取るように判る。
だが、そのまま喜ばせてやる気は、操には微塵もなかった。
「副会長、ぜんぜん優しくないし……。だいたい、不良になるのよか、総裁のオンナとかやる方が面白そうだし……」
「み、操……」
「告白と強姦がセットだし……」
実のところ、全然、強姦などと思っていない。
途中で意識は手放したが、矢崎の事は結構気に入っている。
だが、甘い顔を見せる気はなかった。
最初が肝心という話は、何人もから聞かされた。二十代から四十代まで、様々な年代の知り合いが、揃いも揃って操にアドバイスした事がそれだった。
注がれる愛情こそが問題なのであって、今のところ、操が譲らねばならないのは、どうやら、肉体関係の許容だけらしい。
そう考えれば、これは中々良い取り引きだ。
雑賀操、十六歳。
高校生活は明るいものになりそうだった。

クールが熱い ACT.2



1

腹の底に響く、軍隊調の校歌が、とんでもなく老けた高校生に朗々と歌われる。
旧校歌だ。
三十年も前に新しい校歌ができたというのに、何故だか旧校歌がしっかり生き残っている。確かに、初めて聞いても、どこか聞き覚えがある気がするような、ごくごく普通のありがちな校歌より、誰が聞いても古い、と思う校歌の方が、歴史を誇る男子校には相応しいだろう。
何しろ、生徒手帳にまで旧校歌は載っている。
その上、数多の先輩方と会った時、旧校歌を知っていないと話にならない、などと言われて、入学早々、学校の出身者でもある担任にしっかり歌唱指導まで受けた。挙げ句に、何かというと歌わされるのは、旧校歌なのである。現在の校歌は、全体集会で一度歌っただけで、メロディーさえうろ覚えなのに、旧校歌の方は歌詞まで覚えてしまったぐらいだ。
「なんか……この歌を聞く度、十年ぐらい昔に戻ってくような気がする」
ぼそりと呟くクラスメイトは、ピアスに茶髪という恰好だ。
普段は滅多に話さない相手に擦り寄ってしまうのは、ほとんど全員がスポーツウェアという中で、同じ半袖シャツにネクタイという、少数派の所為か。
「それ……判る……」

こくりと頷いた操は、壇上の応援団を見詰めた。
毛布のような小団旗を腹で支えている男は、結構な優男だ。体育館の入り口では、六畳はあるという大団旗を腰溜めにした男が、ひとり我慢大会をやっているのも見た。
ものすごい時代錯誤だ。
「なんかさ……。オヤジの時代っていうより、ジジイの時代に戻りそうだ……」
クラスメイトは胡乱な目付きで囁いた。
「じいちゃんもここ？」
ひょいと首を竦めたクラスメイトは、溜め息混じりに応えた。
「ジジイのオヤジもここ」
「おおっと……」
創立何年、などと言われるより、親子代々が卒業生、現在四代目が在校中と言われた方が、インパクトがある。どれだけかび臭い習慣が残っていても仕方がない。
もちろん、だからといって、自分もそれに塗れる気はなかったが。
「これより球技大会の開催を宣言する」
低い声が響き渡る。
宣言したのは、生徒会長だ。
すぐ隣の、長ランに襷姿の応援団長も、かなりの威圧感があったが、会長に比べると所詮は側近という感じだった。

わざわざ生徒手帳の制服の欄に、旧制服の着用も認めると書かれているのは、偏に応援団のために違いない。ブレザーにチェックのパンツの応援団では迫力がないのだろう。

それでも会長の方が威圧感があるというのが、笑える。

やはり会長というよりは、SFアニメの軍人だ。

「解散！」

応援団長の怒声と共にわらわらと動き出した生徒達は、出口を潜ると直ぐに大団旗に向き合う事になる。

自然と目礼してしまうのは、そんなものを支えるのがどれだけ重労働か、余りにも簡単に想像できるからだ。当然ながら、見上げるばかりの大男がずらりと並んで睨みを利かしているからでもあったが。

「確かに十年じゃ利かないな……」

私立翔峰学園高等部は、時の流れから取り残されているに違いない。

「おい！　操！」

教室に向かってだらだらと歩いている操に、背後から小柄な男が飛び付いてきた。

「あ？　杉本……。サボりじゃなかったのか？」

「誰が。俺ぁ、ぜってー藤原を負かしてやる！」

どうした訳か、普段はへらへらと世渡りをしている杉本が、今日は妙に鼻息が荒い。

「誰だよ、それ」

「数学の藤原だよ。あんなジジイに負ける訳ねぇだろうが。な？　そう思うだろ？　応援に来いよ。どうせ何も出ないんだろ」
何があったのかは知らないが、子泣きジジイと化した杉本は、そのまま操の背中に負ぶさった。
「重いってー」
「体力温存……」
「何言ってるかなー、この男は」
「これから、男の戦いだぜぇ。無駄な力は使えん！」
「なんのこっちゃ……」
「操ちゃーん。教室まで連れてってぇ」
「なんで教室よ。お前、何かに出るんだろ？」
振り落とそうと足掻いても、杉本は猫撫で声を出しながら、益々しがみ付いてくる。
「だって、ラケット教室だもん」
「ラケットぉ？　何する気？」
杉本から答えは返らず、蛙のような声が聞こえてくる。
「げぇ……」
同時に、背中に張り付いていた体温と重さが、消えてなくなった。
振り向くと、杉本の身体が宙に浮いている。
じたばたと暴れる身体が、すとんと落ちた。

と、その後ろから現れた図抜けた長身の男。時代錯誤な学校に似合いの、見るからに武闘派の男前は、生徒会のナンバー2、泣く子も黙る副会長殿だった。

翔峰学園生徒会副会長、矢崎様。

見慣れた制服でも、胴着姿でもない、学校指定のスポーツウェア姿の矢崎は、なんだか別人のようである。

それでも、中身に違いがある訳もなく、なるほど、子泣きジジイを黙らせるには適役だ。

流石に大団旗の旗手には負けるが、壇上で小団旗を掲げていた男よりは、絶対に一回りはでかい。その視線の位置だけでも充分な威圧感なのに、その眼付きが、また迫力なのだから始末に負えない。

周囲にいたクラスメイトたちは、何時の間にか、蜘蛛の子を散らしたように四散していた。

取り残されたのは、操と杉本だけ。

「な……な……」

何が起こったのかを理解し切れていないのか、へたりと座り込んだ杉本が言葉にならない声を上げつつ、自分の斜め後ろを怖々と見上げていた。

恐ろしげな眼差しと揃ち合わないのは、杉本にとって幸運だっただろう。真っ直ぐに睨み付けられたら、確実に杉本は石化している。

敵の足元で、いつまでもぐずぐずしている辺り、まだ杉本は自分を摘み上げた相手の正体に気付いていないらしい。

溜め息を吐いた操は、杉本の言葉を代弁してやった。
「……何してんだよ。あんた」
いや、代弁というよりは、自分の言いたい事を口にしただけだったが。
どうやら、背中から子泣きジジイを引き剥がしてくれたらしい親切な御仁を、操は斜めに睨め上げた。
しかしながら、副会長殿は、聞く耳は持たないらしい。
「杉本、お前は卓球だろう。……さっさと体育館の地下に行きたまえ」
「は、はいっ!?」
叫ぶなり、杉本が飛び上がるように立ち上がる。
鳩が豆鉄砲を食らった顔というのは、こういう表情の事なのだろう。
半分他人事の気分で、杉本を眺めた操は、次の瞬間には回れ右をしていた。
この際、天下の副会長様が、何故ここに現れたのかとか、杉本の参加種目を知っているのかとか、深く考えない事にする。
ばたばたと走っていくのは杉本だろう。
残りの一人は、どうやら操の後ろ姿を凝視しているらしい。振り返らなくても、痛いくらいに視線を感じる。
なけなしの根性を拾い集めて矢崎を無視した操は、そのままずんずんと教室に向かって歩き始めた。

「操……」
地の底から響いてくるようなホラーな声。本当なら盛大な金切り声を上げてやりたいところだが、やはり野郎の声では興醒めだろう。
「操！　聞こえてないのか？」
「ぐえ！」
後ろから、襟を摑まれて、思わず蛙二号になってしまう。
「人殺し！」
「何を大袈裟な……」
「ばか力なんだから、加減しろっての。あんたは撫でたつもりでも、相手は脳挫傷ではかなくなっちまうぞ！」
これ見よがしな溜め息を吐いた矢崎は、操の腕を摑んだ。
「何すんだよ！」
「球技大会はクラス対抗だと説明を受けた筈だが？」
「知ってる」
一年から三年までの縦割りで対抗するらしい。
勝ったからといって、何がある訳でなし、必死になる奴等の気分が判らない。
「操……。お前、友達いないだろ」
「あ？」

唐突に言われて、操は思わず、自分を拘束する男を唖然と見上げてしまった。
目が合った途端に、何故だか矢崎はにやりと笑う。
「球技大会でポイント上げれば、冬のマラソンの成績が底上げされる」
「うそ！」
「……やっぱり聞いてなかったな……」
「マラソンなんてあんのか？」
「ああ。といっても、たかが十五キロだがな」
充分だ。
瞬発力には自信がある操も、持久力はゼロと言ってもいい。毎日毎日学校の周りの坂道を走っている矢崎など、異星人としか思えない。
「ちょっと待て……。その十五キロって、まさかこの坂の登り下りじゃないだろうな」
「それ以外、どこにある？　山ごと私有地だから、道路を閉鎖するのも簡単だしな」
「……もう、勘弁してくれよ……」
泣き声で呟き、ずるずるとその場にしゃがみ込んだ操を、矢崎も引き立てようとはしなかった。
「一回戦敗退でも、ポイントはある。選手登録するべきだったな。……見学じゃ、点はない」
「ちくしょう……」
道理で、皆が真剣に競技を選んでいた筈だ。こんな時代錯誤な学校に来る連中だから、真面目に行事に参加するのだろうと、のほほんと考えていたのが悔やまれる。

どんなに学校が古くても、茶髪やピアスは珍しくないのだ。という事は、中身は普通だという事だ。好き好んでかったるい球技大会に参加する筈もない。

同じ中学の出身者がいないと、こんな時の情報も出遅れてしまうのだろうか。

「杉本のやつぅ……」

いくらクラスが違っても、それぐらい教えてくれてもいいだろう。

もっとも、杉本もさぼるものだとばかり思っていたから、球技大会の事など話題にも上らなかったのだが。

「逃げる方法がひとつだけあるぞ」

ショックを受けている操を、楽しげに見下ろす副会長様は、器用に片方の眉を聳やかせた。

「何？」

「援団に入るんだな」

「はにゃ？」

「いいぞ、応援団は。制服の着用も免除されるし」

代わりにガクランを着ている。

「何かの大会があれば授業は免除だ」

炎天下で声を嗄らして叫び回るのだ。

「大学も最優先で入れる」

で、大学でも応援団か？

声を出す元気もない操に、矢崎は妙な事を喋り続けている。
何故か嬉しそうな矢崎を見上げて、操は盛大な溜め息を吐いた。

2

「ちくしょー！　負けた、負けた、負けた」
こてんぱんに、それはそれは見事に、一度もサーブを返す事もできずに、見ている方が後ろめたくなるほど見事に、杉本は五十過ぎの数学教師に、負けた。
ちなみに、競技は卓球である。
「卑怯者……。きっとあいつは本当は中国人だぜ」
「ドイツ人かもよ。確か、ドイツは卓球のプロリーグがある」
「うー。がうがうがう」
日本人のジジイに負けたのは、どうにも我慢ができないらしい。中国なら、元々卓球が盛んな国だし、鬼のように元気なじいさんをテレビで見たりするから、納得できる気にもなるのだろう。よほど気が立っているのか、どう見てもモンゴロイドという藤原がドイツ人というベタなジョークに、杉本は乗ってきてくれなかった。
「ちくしょう。こんな事ならさぼりゃよかった」
悔しげにぼやく杉本を眺め、操は目を瞬かせた。

「なんでよ。藤原と対戦てだけでボーナスポイントあるんだろ？　俺なんか、ただの見学だもんな。きっついぜ、実際。マラソンで四百位以内ってのは……」
「なんだよ、それ」
眼を見開いた杉本は、どうやら操とご同輩らしい。マラソン大会の事など知らないようだ。
おそらく、藤原憎しで選手登録しただけなのだろう。
「なーんだ。お前も知らんかったんか……。なーんと、球技大会出ないと、マラソンやるっきゃないんだってさ。十五キロだってよ。この山の登り下りで……。冗談じゃねぇっての……」
「うそ……」
「本当。この大会のポイントと、マラソン大会のポイントで単位になるらしい」
「そんなん聞いてないぞ。そんなんだったら、バスケ出るんだった……」
武道館の裏、一年坊主の憩いの場で、どっぷりと落ち込んだ杉本は、そのままずぶずぶと地面に潜っていきそうだった。
「バスケ得意なん？」
「ま、ね」
「なんで部活やんないんだよ」
「それを言うか？」
ちろりと睨まれて、操は口を閉ざした。
よほど才能がない限り、この学校のバスケ部に入るのは、根性がいる。

武道系が優遇されている事にかねがね不満を抱いているバスケット部は、大学の三軍という立場を選んでいるのだ。公式試合こそ別々だが、普段の練習すら大学と合同である。ただでさえ、体格や経験に差がある上に、先輩の数が四年分割増しになるのだ。人間関係だけでも、かなりキツいものがあった。

平均身長に足りない杉本が入部するのを躊躇うのも理解できる。

「あーあ。やっぱ背が欲しいや……」

「だったら煙草はやめるんだね」

「あ？」

唐突に聞こえた声に、操と杉本は顔を見合わせた。

ゆっくりとその場にしゃがみ込むと、武道館の柵の向こうに橋本がいた。

「会長……」

「成長ホルモンが出るのは、夜の十一時から一時の間だから、早く寝ること。睡眠時間は最低でも七時間は確保して……。過度の運動は禁物。少々疲れて、気持ち良く寝られる程度の運動というのが理想的だね」

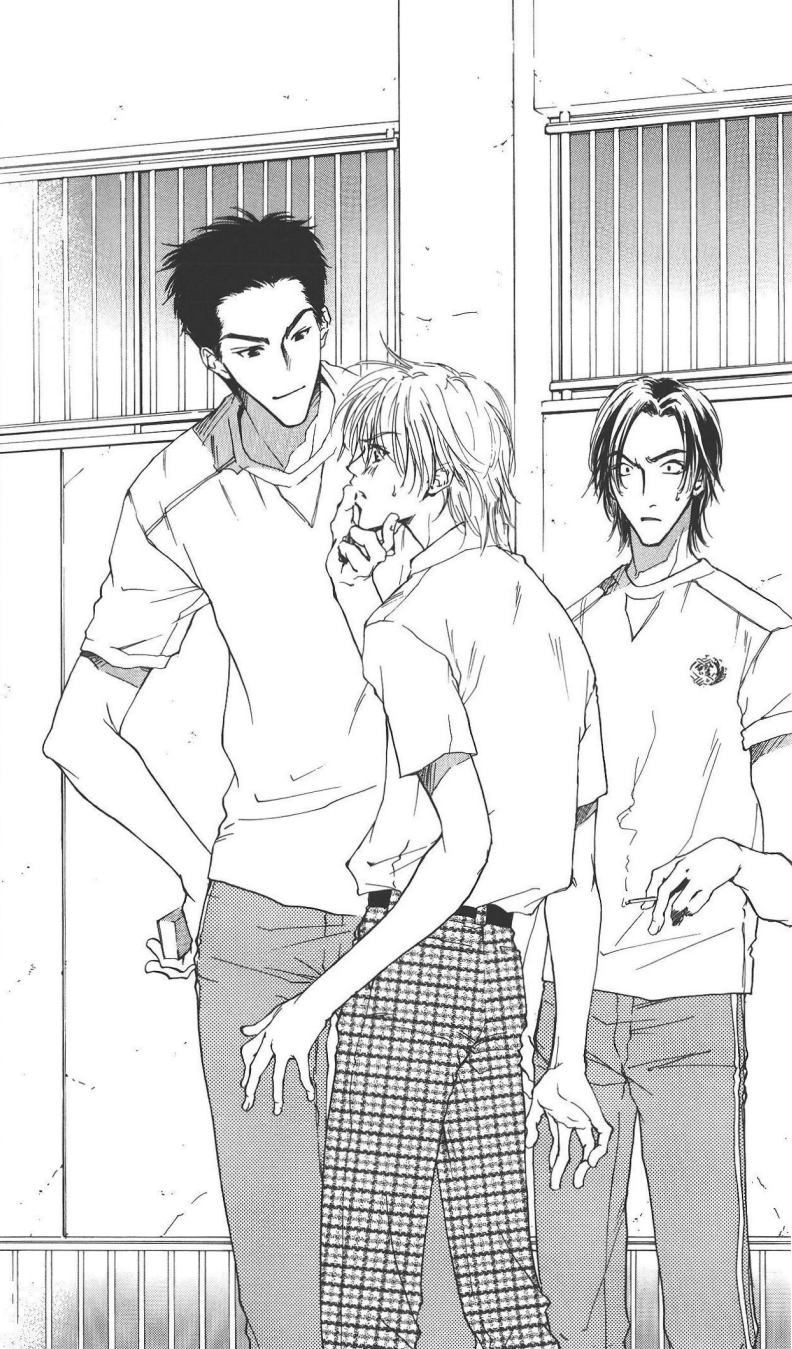
目をまん丸くした杉本は、まじまじと橋本を見詰めていた。

「何言って……」

橋本は後輩が驚いている事など、気にする様子もなく、訳の判らない事を聞いてくる。

「ウチの新人と一緒に、レントゲンでも撮ってみるかい？」

「だから……なに……」
「手先のレントゲンだから、そんなに心配しなくてもいいよ。骨端線を確かめるだけだからね」
にっこり。
その笑みは、何やら良からぬ事を企んでいるように見えた。
矢崎にしろ橋本にしろ、信用できない。こんな連中が生徒会のボスとサブだと思うと、行く末が心配になろうというものだ。
うんざりとして、煙草を取り出した操は、スナップを利かせてハードケースを振り、一本を飛び出させた。そのまま銜えようとして、視線に気付く。
わざわざ見なくても、それが誰なのか、もう判っていた。
悲しい事に、覚えてしまうほど、この男の視線はインパクトが強い。
その視線の持ち主は、走る勢いで近付いてくると、操から煙草を取り上げた。
「なに！」
「煙草はやめろと言っただろう」
「あんたに言われる筋合いじゃないね。……俺は別にチビでもいいもん」
抗議というには情けない科白を、視線を合わせぬままに呟いて、操は煙草を引っ手繰るように取り返す。
「確かに、可愛いままでいてくれるという決心はありがたいが」
「なん……」



喚こうとした操から、再び煙草のパッケージが取り上げられ、ついでのように唇が指先でなぞられる。
「煙草臭いキスってのは興醒めだろう？」
「待ていっ！」
矢崎の手を叩くと、ぎっとばかりに睨み据える。
「何を？」
くすりと笑った矢崎の顔を掌で押し退け、杉本の腕を引っ摑んだ操は、突然、脱兎の如く駆け出した。
矢崎がこれ以上ばかな事を言い出す前に、なんとしても逃げ出さねばならない。
必死に走って建物の角を曲がった途端に、訳も判らず走らされた杉本が、初めて声を上げ、操の手を振り解いた。
「何しやがる！」
「あ……わり……」
文句の割には、操に付き合って足は止めない。
「追い掛けちゃこないんじゃねぇ？」
ちらりと後ろを振り返った杉本に釣られて、操も後ろを振り向いた。
建物の陰から人影が出てくる気配はない。
「な？」

同意を取ったつもりか、杉本が走る足を緩める。
さらに角を曲がって、並びの建物の陰に駆け込むと、ようやく二人は足を止めた。
「しっかし、おどれーた」
大きく息を吐いた杉本の第一声だった。
まあ、気持ちは判る。おそらく、操は杉本以上に驚いていたと思う。
「で、どういうこと？」
「はい？」
不意に聞かれて、操は眼を見開いた。
「やっぱ、副総統と操って……」
「なんだよ」
「なんか変だと思ったんだよな。球技大会のポイントがどうのとかって、そんなん誰も言ってなかったし……。ひょっとして、副総統がこっそり教えてくれたん？」
「だったら、何かに出てるよ。あの野郎、今朝になって言いやがった」
「愛されてないんだ」
一瞬、世界が止まった。
「は、ば…ば……バカタレがぁ！」
言葉の槍を耳に突っ込んでやる。
そのまま脳味噌まで突き刺して、ぐちゃぐちゃに掻き回す。

夢想でしかないところが悲しかった。できるなら本当にやってやりたい気分だ。
「うがぁー」
耳を塞いだ杉本が、視線で脅してくる。
「やるか？」
「おおよ。上等じゃい！」
ばっとファイティングポーズを取る。
「ふざけたこと言いやがって」
「本当だろうがよ。あ？　惚れてんなら、それぐらい教えるだろうがよ」
「それがふざけてるってんだよ。気持ちの悪いこと言うんじゃねぇ！」
怒鳴り合った後、顔を見合わせる。
「らぶらぶしてんじゃねぇの？」
「だから気色の悪い事言うんじゃねぇ！　ほら、見てみろ、サブイボ出たぞ」
鳥肌の立った腕を突き出してやる。
と、思い切り眉を寄せた杉本は、両手を上げた。
「悪ィ。マジに付き合ってンだと思ってた」
全くの外れではない。確かに一回エッチはした。
しかし、付き合っているかと言われれば、絶対に違う。一回付き合った、というのと、付き合っているというのでは、全然違うのだ。違ってくれなければ困る。

「けど、付き纏われてるのは本当だろ？」
「弱みを握ったから、口を塞ぐ気なんだ」
「言うな！　ぜってー聞かないからな。おりゃ副総統に睨まれたくねぇ！」
耳を塞いだ杉本が、そのまま走っていく。
あっけに取られてそれを見送った操は、長い長い溜め息を吐いた。
矢崎に関わらないというのは、この学校で無事に過ごすためのお約束のようだ。
何しろ、一回付き合っただけで、不気味なラブレターだのプレゼントだのが、ぴたりと来なくなったのである。
杉本の言葉ではないが、〝付き合っている〟という噂が蔓延しているのかと思うとげっそりするが、警戒しなければならない相手が一人だけというのは、思った以上に楽だった。
「昼飯どうしよう……」
杉本と一緒に食う気だったのだが、逃げられてしまった。このまま帰ってもいいのだが、家には長兄がいる。
休日出勤の代休を金曜日に取るというのは、ごくごく自然な事だろう。
だが、操にとっては最悪のタイミングだった。一人で遊びにいくのは気が進まない。
仕方なく、重い身体を引きずるようにして、操は食堂に向かった。
「げ！」
操の目に飛び込んできたのは、餓えた野獣と化した、食い盛りの高校生の群れだった。

3

色とりどりのオカズが詰まった弁当箱が三つ。
どれもこれもきちんと栄養バランスを考えているようだ。
「……これが一番美味しい」
「動いてないからだね。汗をかくと、こっちの方が旨い」
品評会だ。
失礼な奴等である。
女子部のチアリーダーが差し入れてくれた弁当を、こっちが旨いだの、こっちが不味いだのと騒いでいる男達は、武道館の畳の上で、車座になっていた。
何の因果か、操はその猛者たちに囲まれて、弁当のお惣菜の品評会を眺めている。
「で、これ、何部な訳？」
ボスが橋本総統だというのは判るが、周りに集まっている男達は、身長も体格もばらばらで、何をやっているのか、全く想像もできなかった。
お客というより従者か何かのように操を隣に座らせた橋本が、妙に嬉しげに答える。
「アメリカンフットボール」
「んにゃ？　そんな部、あったっけ？」

「あるよ」
橋本はあっさりと応じ、ついでに笑顔で操を眺め下ろした。その笑顔に不穏なものを感じるのは操だけだろうか。
失礼な事を口走ったのかもしれない。それなのに、男達は穏やかに笑っていた。
だが、怖々と周囲を見回しても、聞こえなかった訳でもないだろうに、スポーツウェアの男達は穏やかに笑っていた。
「あれって、すっげえプロテクター着けてやるんだよね。どうして着てない訳？」
失礼ついでに聞く。
「幾ら球技大会でも、アメフットは無理だよ。いきなりできる訳じゃないからね」
「えぇ？　ラグビーはあるのに？」
「ラグビーは授業でやるからね」
「げげ！」
「雑賀（さいが）みたいな細いのは、ラグビーの方がきついだろうな。……アメフットなら、キッカーやってれば、接触されないからね」
「何、それ」
「今度ゲームに連れていってあげよう」
「ホント？　ルール教えてくれる？」
こんな猛者（もさ）共の真ん中で突っ張る気など毛頭ない。

精々、カワイイ後輩を演じ切るつもりだ。
騙せているのか、如何にもひ弱な後輩など眼中にないのか、周りを取り囲む男達は、部長に懐いている操の存在に、疑問も抱いていないようだった。
もっとも、疑問を持たれても、知った事ではない。
操を連れてきたのは彼らの一人だ。殺伐とした食堂の入り口で立ち尽くしていた操を、有無も言わせず拉致してきたのは橋本の向かいに座ったクマ男なのである。悲鳴を上げる暇さえなかった。
周りが見て見ぬ振りをした理由も今なら判る。会長配下の仕業なら、一般生徒が口を出す筈もない。
そして、武道館に到着した途端に、操が思った事といえば。
――総統には誰も逆らえないってか――
校門を一歩出れば、そこは日本国の筈なのに、塀の中は絶対君主制の橋本王国なのである。まぁ、今更だが。
それにしてもだ。
総統の親衛隊が、アメフト部というのは、いかにもでき過ぎである。
日和見と言われようと、拉致された瞬間から、操の強がりなど霧散している。
そもそも、むさ苦しいお兄様方相手に、カワイコぶりっこするくらい、操にはお手の物だ。何しろ、生まれた時から、十以上も年上の兄達に、甘やかされまくって育ってきたのである。

カワイイ後輩を演じて学校一の実力者を懐柔しよう、くらいの方向転換は朝飯前だ。
元々腕力体力に難があるのは、自分が一番よく知っていたし、化け物じみた男のお陰で身をもって思い知らされている。どっぷり甘やかされる状況から脱却しようと、一念発起しての突っ張りだった事など、当の昔に忘却の彼方だ。
勝ち目のない争いは趣味ではない。
「ほら、雑賀クン。食べなさいよ。……この巻き寿司美味いよ」
名前も知らない誰かが、操にすしの詰まった器を差し出してくれる。
お決まりの具の巻き込まれた寿司を摘まむと、口に運ぶ。
確かに美味かった。
「生徒会長って……役得だね」
「いや、人徳でしょう。……いつでも遊びにおいで。食べ物だけはたくさんあるよ」
そう言って笑った橋本に、思わず素直に頷いた。兄達に比べれば小食の操でも、やはり、男子高校生として人並みの食欲はある。
食堂のあまりものメニューよりは、絶対にこっちの方がいい。
「橋本さん……差し入れ第二弾」
武道館に飛び込んできた男が、大きな風呂敷包みを差し上げる。
「今度はどこからだ？」
クマ男が聞く——というより吠えた。

「それが……矢崎先輩から……」
「エッ！」
誰より先に叫んだのは、もちろん操だった。
「何？　操ちゃん」
にやにやと笑った橋本が、操の頭をくしゃくしゃと撫でる。
「なにって……」
「矢崎は矢崎でも、ＯＢの矢崎昭夫（あきお）さん。孝昭（たかあき）のお兄様」
「えー、なーんだ」
矢崎が孝昭という名前だと初めて知った。
――変なの。普通の名前じゃん。……もっとなんていうか……こう――
言葉の内容よりも、孝昭という名前のインパクトの方が強かった事に気付いて、操は急に悔しくなる。
思い浮かんでしまった、矢崎の顔を無理矢理に追い出すと、橋本に負けずににこやかな笑みを作って問い返す。
「……て、それって、バイク乗れるように校則変えたヒト？」
「あれ、よく知ってるねぇ」
そう答えた橋本の顔に浮かんだ笑みは、本物のにっこりだった。
操が知っていた事を、心底喜んでいるらしい。

「……ちょっと……まぁ」
「孝昭に聞いた？」
「そんなトコです」
ぼそぼそと答えた操から視線を外し、橋本は困り顔で風呂敷包みを抱えている男を手招いた。
「それで？　矢崎さんは？」
「後で顔出すっておっしゃってました」
妙な具合に姿勢を正した男が、包みを車座の中に置く。
「……顔出す？」
小声で呟いた操の声を、橋本は聞き逃さなかった。
「見てみたい？」
まじまじと相手を見上げた操は、慌てて首を横に振る。
「今、孝昭を更にごつくしたお兄さんを想像したでしょう？」
聞きながら、橋本がくすくすと笑った。
何度も頷いた操に衆目が集まる。
和気あいあいと弁当に集っていた男達の眼が、少しばかり険しくなったような気がするのは気の所為だろうか。
「ぜひともご対面頂かなくちゃね」
今度のにっこりは、どう贔屓目に見ても、悪巧みの裏がありそうだった。

4

たおやかな美人、というのがその人の印象だった。
それはそれは上等の美人で、華奢な体付きといい、深窓の令息風のものごしといい、弟とは似ても似つかない。
いや、それ以前に、矢崎の方が弟というのが、全く信じられないと言うべきだろう。
――この人も矢崎かぁ――
昭夫などという、普通の名前は似合わない。もっとこう美々しい名前が付いていて当たり前っていう気がする。
それこそ、クマ男が雪弥（ゆきや）という名前だったと同じぐらいの違和感だ。幾ら雪の日に生まれたからと言われても、クマが雪弥では承服できないものがある。
「新入生？　随分可愛い子が入ったねえ」
「いえ……確かに新入生ですけど、勧誘はこれから……。これは雑賀操くんです」
橋本が紹介すると、矢崎兄は突然目を輝かせた。
「操くん？　孝昭が言ってた、操くん？　なんかイメージ通りだね」
矢崎弟が何を言ったのか知らないが、麗人（れいじん）の訳の判らぬ言動は聞かない振りで、操は愛想良く会釈（えしゃく）を返しながら、周囲を怖々と盗み見た。反論すれば、鉄拳が飛んできそうだ。

彼が何を喋っても、むくつけき野郎の集団は詔でも聞くように拝聴しているのである。
さっきまで争って食べていた弁当など、その存在すら忘れ去られたようだ。
楚々とした美人に、むくつけき大男が嬉々として傅くのは、なんとなしに理解はできる。ただし、橋本が先陣を切っていそいそと接待するというのは、想像外だった。
どこからか引っ張り出してきた座椅子に座布団。しゃっきりと身体を伸ばして座った昭夫は、楽しげにアメフト部の面々を眺めていた。
「懐かしいねぇ。後で部室の方にもお邪魔していいかな」
「ぜひ、いらしてください。パソコン、新しくなりましたから」
「そういえば、富士通のソフト、どう？　使えそう？」
「現役が開発したソフトですからねぇ……」
話し掛けられた人間が、それはそれは嬉しげに応じる。他の連中も、チャンスを窺っているのは見え見えだった。
それが憧れの先輩を見る目なのか、女王サマに傅きたいという妙な男心なのか、いまいち理解できない。
いや、どちらでも、余り差はないだろうが。
「……何？　どうしたの？」
いきなり顔を覗き込まれて、操は目を見開いた。
「目、おっきいねぇ……」

つくづくと、感心したように言われて、操はかっと顔が熱くなった。
おそらく、耳まで赤くなっているだろう。
「可愛いなぁ……。悪さしちゃ駄目だよ」
「しません」
「してるのは弟さんだけですよ」
「えぇ？　本当に？」
「本当も何も、しょっちゅう追い掛け回してて、雑賀君は逃げ回ってるんすよ」
「なんだったら、ウチの部室に逃げておいで」
「それがいい」
口々に喋る連中は、操など眼中にない。矢崎(兄)と話すためなら、なんでもやるという意気込みだけで、口を挟んでいるのだ。
「ごめんね。君達も、あんまりしつこいようだったら、助けてあげてよ」
「それはもう。何時でも逃げておいで。三年ならAからGまで全部のクラスに部員がいるから」
にんまりと笑う橋本は、矢崎に厭がらせをする許可を貰ったと思っているらしい。
何故だか知らないが、矢崎は操が他の男と話をするのを嫌う。理由は薄々判っているが、もちろんそんなものには気付かない事にしているし、彼女持ちだという橋本に懐いた方が安全なのは、判りきっていた。
「一年は？　ウチのクラスにはいないよね」

「勧誘するのはこれからだよ。何しろマイナーな部だからね」
なるほど、存在すら知らなかった筈だ。熱狂的過ぎる運動部の勧誘に辟易した者や、クラブ活動に失望した者に声を掛けているのだろう。自信たっぷりに告げる橋本の口調が、新人勧誘に苦労はしないと言い切っているようにも聞こえた。
代々の生徒会とも関係しているらしいし、操には計り知れない、裏事情があるに違いない。近頃、ここの生徒会の事情には、極力詮索しない事にしていた。判らない事や、理解の及ばぬ言動は、都合良く利用できるところだけ利用して、後は知らない振りで心の隅に仕舞い込む。
それくらいのつもりでないと、この先輩方とは付き合えない。
と、その先輩様が、にこやかな笑みと共に、ろくでもないお誘いをしてくる。
「マネージャーやらない？」
「やです」
きっぱりと言い切った操に、橋本が苦笑を浮かべた。
「だめかぁ？」
「遊びにいいくのはいいけど、タテ関係苦手だもん」
「遊びにくるっていうのもいいな。何だったら孝昭も連れてきてもいいよ」
むっと唇を引き結んだ操は、橋本を睨み付けた。
途端に、笑い声が弾ける。
げらげらと大袈裟に笑う男達の中で、矢崎の兄は、涙まで浮かべていた。

「いいなぁ。連れて帰りたい。これからデートしない？」
「駄目ですよ。一応、授業の一環ですからね」
橋本が会長の顔をして、説教を垂れる。
「どうせ見学でしょ？　ジャージ着てないし……遊ぼう遊ぼう」
楽しげに笑う昭夫は、今にも抱き付いてきそうだ。男に付き纏われる事には辟易としている操だが、昭夫が相手だと、嬉しいと思ってしまうのが、不思議だった。
「先輩……」
呆れ声の橋本を無視して、昭夫は操に向き直った。
「先輩の接待も、仕事のウチだろ？　大丈夫。見付かっても、上手く言うから。行こう行こう」
腰を上げる男達を笑顔で牽制した昭夫は、操の腕を摑んで、武道館を出た。
たおやかな美人という印象は、可愛らしいワガママを言う人、という風に変わったが、それもまた女王サマっぽくていい、などと思ってしまう。
矢崎(弟)に女扱いされていようと、矢崎(兄)を可愛いと思える自分が、男の感覚を保っている事を確認した操は、機嫌良く昭夫に連行されていった。
周りから見れば、自分の方がお守りされているように見えるだろうが、知った事ではない。気分的には操が、エスコートしているつもりなのだ。
内心、二人で歩いていれば、さぞかし見場がいいだろう、などと悦に入っている。
ふらふらとそこらを歩いている生徒達から注がれる視線も、かなり心地のいいものだった。

この際、先輩の接待が操の仕事かどうかは問題ではない。仕事ではないと思うとか、昭夫が翔峰の卒業生である以上、やはり後輩である操の仕事かもしれない、などという疑問も大した問題ではなかった。操にしてみれば仕事であろうがなかろうが、連れ出して頂くのは大歓迎である。

何しろ、何故登校してしまったのかと、日本海溝より深く後悔していたところだったのだ。たまたま長兄が家にいたので、サボるにサボれなかったというのが、事実に近い。家を出たついでに、ホームルームでの出欠点呼だけは受けようなどと、助平根性を出したのが運の尽き。つい杉本の完敗振りを見学して、さらに、妙なところで橋本に捕まって。

要するに、このまま応援だの見学だのを続けるのは、決して、操の本意ではないのだ。

「矢崎じゃないか」

あらぬ方向から声が掛かる。

声の方向を振り仰ぐと、大佐古がいた。

「先生、お久し振りです」

満面に笑みを浮かべる昭夫は、二階に向かって手を振った。

「たまには部の方にも顔を出してやれよ」

「差し入れしてきましたよ。……あ、雑賀くんに案内して貰ってますから、よろしくお願いします」

「……仕方ないな」

呵呵と笑った大佐古と昭夫の顔を交互に見詰めた操は、内心で溜め息を吐いた。

はっきり言って、大佐古はこの学校で一番恐れられている教師だ。その大佐古に、サボりの許可を貰うとは、やはり昭夫は只者ではないらしい。

「さて……。これで最低限の単位は貰えるね」

「え？」

「先輩の接待は在校生の義務だからね。こういうイベントだと先輩が来る事はよくあるし……。大佐古先生に頼んでおけば大丈夫だよ。心置きなく遊べるでしょ？」

にっこり。

こんな笑みを見ていると、嘗て、昭夫がどうやってこの学校を支配していたのか、想像ができてしまう。橋本のような軍部支配ではなく、女王サマをやっていたに違いない。

ひょっとすると、その頃から、橋本は騎士を気取っていたのだろうか。

という事は、昭夫と親しくなれば、二重の切り札になる。人目を引く美人と散歩できるだけでも楽しいのに、その上、単位まで貰えるらしいのだ。

にんまりと笑った操は、真剣に昭夫を接待する事にした。

5

「操っ！」

来た来た。やっと見付けたらしい。

昭夫と手を繋いで、昼休みの校内をうろついていた操に、矢崎が駆け寄ってきた。
「……兄さん……。どうして……」
弟の疑問など無視して、昭夫が聞き返す。
「孝昭。……お昼食べた？」
「食べたけど……。どうして操…くんと」
「悪さしてるんだって？」
「は？」
露骨に顔を顰めた矢崎弟を、兄が愉しげに眺め上げる。
「学校が愉しい筈だねぇ」
「何してんだよ。ここで」
「先輩に……何してんだよはいけないなぁ」
半分思惑通りで、半分は予想外の展開に、操はくすくすと笑い始めた。
「何がおかしい？」
「何かおかしい事あった？」
矢崎兄弟が、声を揃えて問う。
操は思わず笑いを飲み込んだ。矢崎弟はもちろん、昭夫の方も妙に迫力があるのだ。下手に逆らうと危ないと、操の自己防衛本能が警戒警報を鳴らしていた。
「……いえ、別に」

言い澱むと、笑みを取り戻した昭夫が揶揄うように聞いてくる。
「ホントに兄弟？　とか思った？」
「え？　……いえ、反対。やっぱり兄弟だなあ……と」
「ありゃ、そう？」
「えー……と、ウチの兄貴も俺とは似ても似つかないから……」
とても、異常なほどの迫力が似ているとは言えない。
「そんな事どうでもいい。……操、さっさと着替えてこい」
兄の傍から操を引き剝がすと、矢崎が怒鳴るように命じる。
「ええっ？」
「早くしろ。バスケに欠員が出たから、お前を登録したんだ」
「嘘……」
言葉の意味を理解し切れぬ操の腕を、ほとんど担ぎ上げる勢いで摑んだ矢崎は、そのまま教室に連行しようとした。
「こらこら。大佐古先生に貰ってきたんだから、持ってっちゃ駄目だよ」
俺は案内ロボットか、とも思ったが、もちろん操は口を噤んでいた。身の危険を覚える男と、一緒にいて楽しい男のどちらを選ぶかと問われて、迷う筈がない。
「サボりを奨励してどうすんだよ」
「ほう……先輩の接待がサボり？　さすがいい根性してるなぁ。僕なんか、冷や汗ものだったの

に。……ねぇ？」

ねぇ、と聞かれても、どう応じればいいのか判らない。ただ、この美人さんと一緒にいるだけで単位が貰えるのなら、バスケなどやる気はなかった。

「減らず口叩いてないで。ほら、操！」

「どうせ誰かを無理矢理怪我人にしたんだろ？　まったく悪巧みばっかりして……。いいから、ちゃんと試合しなさい。僕はこの子と見学してるから」

むっとした顔をして、それでも矢崎は渋々と操の手を離した。

兄には逆らえないらしい。

いや、それとも、先輩には逆らえない、なのだろうか。

どちらにしても、予想通り昭夫と親しくなれば矢崎への牽制になると確信した操は、昭夫の腕に抱き付いた。

「先輩。橋本さんの応援に行きましょう」

何に出場しているのかは知らないが、そこいらの人に聞けば判るだろう。この学校の中で矢崎に負けないのは橋本総統ぐらいだろうし、昭夫を連れていけば、追い返される心配もない。

「こら、橋本さんはGだろ。応援するならCにしろ」

しつこく文句を付けてくる矢崎を、操はちろりと見上げた。

何がなんでも逆らってやりたい気分だ。

なんと言っても、虎の威を借りられるこんな状況でもなければ、矢崎に逆らう機会など、操に

はない。
「いや、先輩の接待ですから」
昭夫のにっこりを真似してやった。
と、音を立てて息を吸った矢崎が、操を睨み付けてくる。
ぞくっと背筋を冷たいものが走った。この目付きは、つくづく心臓に悪い。
思わず、ごくりと咽喉を鳴らした操の代わりに、昭夫が呆れた声で告げる。
「こらこら。後輩を脅してどうするの。そんな事だから、誤解されるんだよ」
誤解ではない。そういう奴なのだとは思ったが、操も訂正するほど命知らずではない。
やがて、女王サマのお達しに、矢崎は渋々と踵を返した。
その背中に、思い切り舌を出してやりたいのを我慢する。可愛い後輩としては、精々で思い切り睨むぐらいしかできないのがつまらないが、久々に勝った気分だ。
取り敢えず、万歳三唱を頭の中だけで叫ぶ事で満足して、操は副総統の気落ちした後ろ姿を見送った。
「嬉しそうだねぇ。操チャン」
「へへ……そりゃもう。退却する副総統なんて、滅多に見られないもん」
女王サマが苦笑を浮かべた事など気付かぬ振りで、操は会心の笑みを返した。
「つくづく報われない男だね」
何気なく呟かれた言葉に、妙な含みが感じられる。もののついでに内心を見透かされそうな気

がしてきて、操は女王サマから視線を逸らした。
と、建物の陰から現れた人影に軽く会釈している矢崎が、視界に飛び込んでくる。
その相手に、操の目は釘付けになった。
「んにゃ？　兄ちゃん？」
「え？　お兄さん？」
矢崎と二言三言交わした操の長兄が、大股で歩いてくる。
紙袋を提げた大男を繁々と眺め、昭夫がぼそりと呟く。
「本当に似てないねぇ……」
小柄で可愛らしいと評される操と違って、矢崎弟と遜色ない大男で充分以上に迫力もある。
「滅茶苦茶歳も離れてるしね」
十七歳も離れた長兄だ。若く見られがちな操と、昔から落ち着いていた和隆では、親子に見られる事も珍しくない。
「兄ちゃん、どうしたのさ」
近付いてきた長兄に、声を掛けると、予想外の答えが返ってくる。
「弁当の配達。……こちらは？」
しかも、操ではなく、何故か昭夫に視線を据えて、当然のように問いまで返される。
早速昭夫に目を付けた和隆を、お目が高いと誉めるべきだろうか。
もっとも、昔から、操の友人には片端からチェックを入れていた兄だ。今日知り合ったばかり

の昭夫に反応する辺り、流石というべきだろう。
「弁当？　どうしてそんなもん……」
恐る恐る聞くと、兄は呆れ顔で答えた。
「母さんが作ってくれた。球技大会なんだろ？　男子校じゃ、食堂は一杯だろうからって……」
渡された巨大な紙袋は、ずしりと重かった。寿の金文字が眩しい紙袋は、先月父親が持ち帰ったものに違いない。
確かに母親と朝、顔を合わせた時に、球技大会だと告げた。そういえば、お弁当を作るとか言っていたような気もする。もっとも、家を出る時間には出来上がっていなかったと思うが。
「いいお母さんだねぇ。……矢崎と申します。この学校の卒業生です。操くんには、学校の案内をして貰っているんですよ」
にこにこと笑う昭夫は、簡単に自己紹介した。
「雑賀和隆です。……失礼ですが、案内が必要とも思えませんが……」
「部外者じゃないっていう証拠です。……入ってくる時、結構煩かったんじゃありませんか？」
「……そうですね。操のクラスとか、担任の名前とか、色々聞かれましたよ」
一応、お坊ちゃん学校だ。わざわざ高校生を誘拐するとも思えないが、警戒だけはしている。実際に警戒しているのは、近所の中学生かもしれなかったが。
どちらにしろ、わざわざ監視網を潜ってきた兄には、操も感心するしかない。正式に客を招く体育祭や文化祭ならともかく、球技大会の観戦に出向いてくる父兄などいない筈だ。



だいたい、和隆が担任の名前を知っていたというのが、驚きだ。
予想外の展開が半分理解できず、無駄な考えが脳味噌を掻き回してくれる。
苦手な長兄が突然現れて、パニックに陥る寸前の操など眼中にもない様子で、二人の兄は暢気に会話を続けていた。
「見てらっしゃいますか？」
「そうですね。……ご一緒してよろしいですか？　校内はなるべく弟と一緒にいるように言われたんですが」
隆三じゃあるまいし、見物までするとは思わなかった。だが、何故だか和隆は校内をうろつく気になったらしい。
まずい。
とんでもなくまずい。
普段の所業がばれたら、説教の一時間や二時間は覚悟しなければならないだろう。酒はまだ目を瞑ってくれるが、煙草は絶対に許さないのだ。
余計な事を言う連中に出会わぬよう祈りながら、操は二人に連行されて体育館に向かった。

6

ものすごく長い一日だったような気がする。

帰りのホームルームまで出てしまったのは、この脱力感の所為だ。
「はぁぁ……」
矢崎昭夫が大佐古先生に捕まり、一人になった兄が放課後まで待っていてやるというのを、どうにか追い返した。
自由を取り戻したのはいいが、巨大な紙袋入りの〝お弁当〟は手付かずのまま残っている。
持って帰るのも面倒だし、食べなければ二度と弁当は作って貰えない。
それは困る。
毎日弁当持参という訳ではないが、二度と作って貰えないというのは不便だった。操を甘やかしまくる父親や兄達とは違って、母親はどちらかというとシビアなのだ。作らないと宣言したら、一月二月は実行してくれるだろう。
だが、校内をうろつく間、色々な人から差し入れを貰った所為で、操の胃には弁当の入る隙間などどこにもなかった。
「……そうだ！　総統んとこだ！」
アメフトというのは、きっと腹が減るに違いない。なんだったら、剣道部でも柔道部でもいい。腹を減らしている人間は山のようにいるのだ。
「よしよし……」
矢崎兄と自分の兄の、なごやかなのか陰湿なのか良く判らない会話を聞いていただけで、操の脳味噌は限界まで疲弊(ひへい)したらしい。

こんな簡単な事も思い付かなかったぐらいだから、かなりの重症だ。
顔見知りのいる部を思い浮かべ、結局、一番部室が近い剣道部に向かう事にする。
考えてみれば、アメフト部の部室がどこにあるかよく知らないのだ。おそらく、体育館裏の部室棟とは思うが、ここからではちと遠い。それに、この時間なら、矢崎はランニングをしている筈だし、部室に残っているマネージャーはクラスメイトだった。
「ばっちりじゃんか」
嬉々として、教室を出た操は、そのまま階段を駆け下りて、渡り廊下を使って武道館に向かう。
手前が剣道部。奥が柔道部の部室だ。
「こんちゃー」
声を掛けて、ドアをノックする。
ひょいと顔を出したのは、案の定、クラスメイトだった。
「あれ？　雑賀？」
「篠塚。これ、差し入れ。て、いうか、お袋の弁当だけど、食えなかったんだよ。残すと煩いから、貰ってくんない？」
最後まで言ったか言わないか。突然、大声が室内から響く。
叫び声とともに、
「おぉ！　食い物？」
ばん、と、目の前のドアが大きく開いて、巨大な男が現れた。

「あれ？　雪弥さん？」
どうしてアメフト部員がこんな所にいるのだろうか。本日知り合ったばかりの、名は全然体を表していない大男は、らしくもなくきょとんと操を見下ろした。
目を瞬かせる操に、大男が訝しげに問い返してくる。
「操ちゃん？　食い物の差し入れって本当なのか？」
「あ……。どうぞ……。お昼ご馳走になったし……。部室判んなくて……」
本当が半分、嘘が半分。
部室棟に行けば、看板が出ている筈だから、判らない訳がないが、大男は気にする様子もなかった。食べ物しか頭にないらしい。
「いい子だなぁ。……おぉっ……。すごいな、これ。いいのか？　こんな手の込んだもの貰っちまって……」
感無量といった表情の大男に、笑みを返しながら頷いてみせる。
「どうぞ、どうぞ」
巨大なパンを綺麗にくり貫いて、取り出した中身を使ったサンドイッチが詰め込まれている。これなら、操が出掛ける時間に出来上がらなかったのも頷けた。
どうやら、母親の機嫌は良かったらしい。
「どうした、どうした」
声がしたかと思うと、操は背後から押されるように、部室に押し込まれた。

「わっ……」
蹌踉めいた操を数人の男達が荷物のように除けながら、好き勝手に喋り出す。
「なんだ？」
「食いモンだって……」
「助かったぁ」
「何が助かっただ！」
突然喚いた操に、衆目が集まる。
「あ、操ちゃん」
「雑賀？」
「……雑賀クン……なんで？」
知った顔ばかりという訳でもないのに、全員が操を知っているらしい。しかも、操の存在を認識した途端に、全員が一歩引く。
まぁ、ここは剣道部の部室だ。操が知らなくても、操を知っている人間ばかりでも不思議はなかった。一歩退く理由も、矢崎の平素の態度を考えれば、認めるのは厭だが、想像が付く。
「これ……雑賀の差し入れ……です」
取って付けたように篠塚が説明すると、皆が皆、つい先ほどまで群がろうとしていたサンドイッチから、化け物でもいるかのように怖々と視線を逸らす。
流石と言うべきか。それとも、総統の直属の所為か。雪弥だけが平気でサンドイッチを頬張り

始めている。
「いらないの？　だったらアメフト部の方に持ってってもいいよ」
少しばかり意地悪を言ってやる。
「いいのか？」
口にサンドイッチを突っ込んだまま、雪弥が問う。
「いいよ。ここじゃいらないみたいだし」
「いるぞ！」
「貰い」
「頂きますっ！」
やはり、食欲の方が勝ったらしい。幾ら矢崎の威光に平伏していても、胃袋には勝てないという事だ。それを確認できただけでも、わざわざ弁当を運んできた意味がある。
「こら！　半分にしろ半分に！」
「ばか言うなよ！」
男共が我先に手を伸ばして、サンドイッチに襲い掛かる。
高校生がどれほど食欲があるか、男ばかり四人も育てた母親はよく理解していた。
大抵の場合、多過ぎるという事はない。友人に分ければ、一抱えもありそうな巨大なサンドイッチ詰めパンも、一気に片付く。
パン作りが趣味の母親に、この様子を話してやればさぞや機嫌が良くなるだろう。

操が内心でほくそ笑んでいると、突然、肩を背後から摑まれた。
一瞬にして、背筋が粟立つ。
「逃げ回りやがって……」
低い呟きに、操だけでなく、部屋の空気が凍った。
サンドイッチをぱくついていた連中も、一斉に背筋を伸ばす。
なんでここにいるのか、などという疑問は、浮かぶ余裕もなかった。
「もういいのか？　じゃ、貰ってくぞ」
平然と宣うのは雪弥だ。半分以上残ったパンを紙袋に仕舞い、ついでのように操の腕を摑む。
「へ？」
「部室においで。橋本さんが待ってるよ」
「総統が？」
「そう。……ここで張ってろって言われたけど、本当に来るんだもんな」
のんびりと話してはいるが、手を離してくれそうにない。
「あ、後で行くから……。パンは持ってってください」
必死に告げても、雪弥は手を離してはくれなかった。
矢崎も厭だが、橋本も恐ろしい。矢崎兄を独占した事はまずかったのではないか。そんな事まで思い浮かべてしまう。
アメフト部の面々が矢崎兄を崇め奉っているのは、明白だ。今更反省しても仕方がないが、の

このこアメフト部の部室に顔を出したら、鉄拳制裁が待っているような気がする。
「橋本さんがどうして操に用があるんだ？」
雪弥の手をさりげなく払った矢崎は、片眉を引き上げた。
「さぁ、聞いてみれば？」
恐れを知らぬ反論に、操は背筋が寒くなったが、周囲の野郎の集団にとっては、さほど珍しい場面ではなかったらしい。
どちらかというと、揉めるなら他の場所で、と目が訴えている。
が、操にとっては立派なチャンスだ。せっかく鳴と蛤が争っているのだから、漁師は逃げるに限るだろう。生き延びる事こそが操にとっての利だ。
そろそろと後退る操の腕が、左右から捕まれる。
「どこへ行く？」
「あ……の」
「ウチの部室だろ？」
雪弥にまで畳み掛けられて、操は天を仰いだ。
「えっと……俺は……」
「判った。俺も行く」
「え？」
唐突に宣言した矢崎が、操の手を摑んだまま、廊下に出る。

頼りがいのある援軍を得たと言うべきか、話が余計にややこしくなったと言うべきか。
「で……でも、部活……」
「ばか言うな。球技大会の日に部活がある訳ないだろ？」
「そーなの？」
どうやら、ここに近寄ったのが、そもそもの間違いだったらしい。こんな事なら、グランドの外れ、学内でも僻地と呼ばれる陸上部にでも行けば良かった。
それにしても、捨ててしまうという、最も短絡的な方法を思い付けない、いや、思い付いても実行できない自分が恨めしい。
もっとも、今となっては、総てが後の祭というやつだろう。
仕方なく、頼りがいのある援軍を得たと思い込む事にする。
「いやー。いいお袋さんだなぁ。外側を食べるのにジャムまで付いてるよ」
暢気な事を宣う雪弥は、矢崎と殴り合っても勝つ自信があるに違いない。そうでなければ、殺人光線を発している矢崎をここまで無視できる人間などいる筈がないのである。つくづく、アメフト部恐るべしだ。
実際、まだ学校に残っていた生徒達は、顔を背けるようにして逃げていく。
逃げられるものなら、操だって逃げ出したい。だが、悲しいかな、そんな勇気も度胸も持ち合わせていなかった。
そして、連れ込まれたアメフト部部室で、どんな無茶をしてもいいから逃げるべきだったと、

思い知らされる事になった。
部屋の中央の、背もたれもないようなベンチに、橋本がどかりと腰を下ろしている。
その背後には三人の男。
全員が全員、巨大だ。
細くても小さくてもアメフトはできると聞いたが、この一団を見る限り、やはりデカイ野郎が肉弾戦を繰り広げるスポーツとしか思えない。
「操になんの用ですか？」
何故かと言うべきか、やっぱりと言うべきか、最初に口を開いたのは矢崎だった。
「君を招待した覚えはないのだが」
表面上は穏やかに、が、明らかに裏がある会話から逃れるように、操は周囲に目を走らせた。
壁にはスチール棚が並び、ファイルが並んでいる。その隣にはテレビとビデオ。奥のデスクにはコンピュータが座っている。
そういえば、アメフトは情報戦が重要だと、矢崎兄が言っていた。マネージャーといっても、スカウティングが重要な仕事で、やりがいがあるとも。ひょっとすると、マネージャーを引き受けさせようと画策していたのだろうか。
あの綺麗な女王サマが、そんな理由で付き合ってくれたとしたら悲しいが、その間独占していた事には違いない。
きっと、橋本の後ろにいる連中は、操を捻り殺したいと思っているだろう。

矢崎と橋本の訳の判らない会話は、まだ延々と続いている。もちろん、袋叩きにされるのは厭だが、ねちねちと嫌味を並べられるよりは、いっその事、橋本に怒鳴られた方がすっきりするに違いない。

なんで操が、などと擁護してくださるのはありがたいけれど、矢崎が口を挟むと、何事も話が長くなっていけない。

兄の説教を聞き流す要領で話を聞き流していた操に、不意に矛先が向いてくる。

「……どうする？　操」

「え？　な、何？」

「お前、聞いてなかったな。どうして自分の事を話してるのに、無視できるんだ？」

「あー。悪口は聞かない方が幸せだと……」

矢崎と橋本が顔を見合わせる。

「悪口か？」

「でしょ。トロいとか、ボケてるとか言ってなかった？」

口煩い兄に鍛えられたお陰で、右から左へ聞き流すのは得意技だ。下手に真剣に聞いていると抵抗したくなるし、抵抗すれば説教が長引く。そんな環境で育つと、悪口にも反応しなくなる。

「トロいと思われてるから、狙われるって言ったんだが……。時々本当にボケていると言ったのは、こいつだ」

楽しげに笑う橋本は、矢崎を指差した。

「狙われるって？」
「こいつに恨みを抱いてるヤツは幾らでもいるからな。さっきそういう情報が入ってきたんだ……、このバカの情報を集めてる野郎がいるって、ね」
その情報源は何なのか、という疑問はこの際無視して、もっと現実的な問いを口にする。
「それがどうして俺が狙われるって事になる訳？」
「本人に手は出せない。けど復讐はしてやりたい。だったら傍にいる奴って事になるだろう？」
よく判らない精神構造だ。
本人以外に復讐して楽しいという感覚は、まるで判らない。力で敵わないなら精神的にとか、もっと強い者を利用するとか。手段はどうであれ、標的は本人だ。少なくとも、操にとっての復讐とはそういうものだった。
たとえ、陰険と言われようと、人の手を借りようと、である。
「何不満そうな顔してるんだ」
そう聞く矢崎の方が、よほど不満そうな声だったが、操は形ばかり笑い返した。
女王サマ絡みで何か言われるとばかり思っていた操にしてみれば、不満そうも何もない。ただただ、訳が判らない、というのが素直な感想だった。
「要するに、操ちゃんがこのバカの恋人だって事になってるんだよ。……噂か真実かは知らないけどね」
溜め息混じりに告げた総統がにやりと笑う。

「人質にされるとか？」
操が憮然と問い返すと、総統はまたもやにっこり。
「判ってるじゃないの」
理屈は判る。
敵わぬ相手の動きを封じる方法と思えば、ある種常套手段とも言えるかもしれない。少々卑怯でも、矢崎や橋本を相手にするなら、それくらいの事を思い付く輩もいそうだった。
しかし、だ。
「てねぇ。あんた。……いったい、誰が誰の恋人だって！」
突然喚いた操に、戸惑う視線が投げ掛けられる。
「……まぁまぁ……噂は噂だからね」
宥めるように答える橋本から、ふいと視線を逸らした操の視界に、酷く複雑な表情の矢崎の横顔が飛び込んでくる。
もしかしたら、虎の尻尾を踏んだかもしれない。
ちらりと脳裏を掠めた予感を振り払うと、橋本に向き直った。

7

気を付けろ、と言われたのは、つい二時間ほど前だったと思う。

トロいとかボケてるとか散々な事を言われたが、操は右から左へと聞き流していた。送ると言った矢崎を、上手い事撒いたのも、操自身だ。真っ直ぐ帰ればいいものを、なんとなくゲームソフトの揃った店に立ち寄って、店に置かれた新作のレースゲームのモニターでだらだらと遊んでいたのも、当然ながら操の意思だ。

金がないのを言い訳に、危ない人間が混じっていても不思議のないゲーセンには立ち寄らないくらいの理性も働いていた。

それなのに。

「ッたくよ！」

こんな事が現実に起こる事が信じられなかった。

両手の自由はない。

ガムテープだかなんだか知らないが、幅広の粘着テープで後ろ手にグルグルと巻き留められている。脚の自由も利かなかったから、同じようにされているのだろう。

テープの幅が広い分だけ、紐で縛られているより始末が悪いかもしれない。その上、皮膚にぴったり張り付いて、少しでも動かすと、肘の関節が酷く痛むのだ。

これが映画とかドラマだったら、手近な所に錆びた釘とかガラスの破片や、やたらとざらついたコンクリートの柱とかがあって、人質は手を血だらけにして縛めを解く事になるだろう。

ところが、現実は闇に沈んだ室内は、何があるのか皆目見当も付かなかった。

それでも、かなり広い空間である事だけは判る。

閉まらないのか、わざと開けているのか、少しだけ開いたドアの向こうも薄暗い。それでも、窓があるのか、ここよりは明るいようだ。ドアに隙間があるお陰で真の闇ではないが、当然電灯も点いていないから、周りの様子を見る事もできなかった。

どうにか手ざわりを確かめた壁は、コンクリートにペンキを吹き付けたものらしく、どう頑張ってもヤスリの代わりになりそうもない。

「はぁ……。みっともねぇ……」

橋本の忠告を無視した事が悔やまれる。

小学生じゃあるまいし、どうしてこうも簡単に誘拐されてしまったのだろう。

忠告は受けていたというのに。

幾らゲームに熱中していたとはいえ、馴れ馴れしく話し掛けてきたヤツを警戒しなかったのは、間違いだった。

ナイフを突き付けられ、三人がかりで連れ出される時も、周囲の人間は友人だと信じていたようなのだ。少々荒っぽく扱われていても、げらげら笑っていれば周りは怪しまないものだろう。

店から出てしまえば、車に押し込んで監禁場所に連れていくなど、造作もない。

臭い上着を頭から掛けられた操は、その時点で抵抗を諦めた。逃げ出すチャンスは幾らでもあると思ったし、狭い密室で暴れるのは得策ではないという判断だった。

まさか、明かりも点いていない部屋に閉じ込められるとは思ってもみなかったのだ。

「だっせー」

耳を澄ましても人の話し声など聞こえないし、ひっきりなしに車は通っているようなのに、そのエンジン音は酷く遠い。つまり、喚こうが暴れようが、外に音が漏れないという事だ。

こんな事なら、車の中で精一杯暴れた方が良かったかもしれない。

「助けにこいっての……」

操自身には拉致される心当たりは全くない。何より、犯人は顔を見られても平気だったのだ。もし身代金目当てなら、さっさと殺したに違いない。

となれば、やはり犯人の狙いは矢崎だろう。はた迷惑なヤツだ。しつこく追い回した挙げ句、周りが恋人だと誤解して、矢崎を釣るエサにしたに違いない。

いや、それより何より、こんな事をしでかす人間が、身近にいるということが、信じられなかった。だからこそ、橋本の心配も、矢崎の用心も、ばかばかしいと否定できたのだ。

そうして、蓋を開けてみれば、拉致監禁である。どうして、普通の高校生の身にこんな事が起こるのだろう。

が、信じられなくても、ここにいる。

「はあぁぁ……」

情けない。

あっさりと捕まった事実以上に、矢崎の恋人だと思われている事が情けない。

男なのだから、取り敢えず疑問に思うとか、確かめようとするのが当たり前だろうに、誰もガセだと思わなかったようだ。

「……はあああ……」
魂が抜けるように溜め息を吐いた操は、足音に気付いて、身体を回した。
ドアの向こうが明るくなったと思うと、半開きの扉が大きく開く。
と、カンテラ型の懐中電灯と一緒に、耳にずらりとピアスを嵌めた男が現れた。
あまり上等でないご面相が、下から照らされて、ちょっと類を見ないほど不気味だ。
左右の耳だけでなく、鼻にまで嵌まったワッカがてらりと光って、益々ホラーな雰囲気を醸し出している。ひょっとすると、乳首とか臍とかにも穴が開いているかもしれない。
「何しやがんだ！　解けよ！」
喚いても無駄な事は判りきっている。しかし、不気味さに負けて、操は思い切り声を張り上げた。
「なんとか言えよ！」
肩からずり落ちるように、だらしなく引っ掛けていた上着のポケットから手を出す。
「聞こえた？　来いよ。一人でな……」
へらへらと笑うピアス男の手には、携帯電話が握られていた。
「この……卑怯もん！」
「見張ってっからよ。他の連中連れてきたら、一発で判るからな。ンな事したらどうなるか、判ってんだろうな……。三十分で来い」
無造作に携帯電話を切った男は、その場にしゃがみ込んだ。

「誰だよ。……誰に電話したんだよ！」
「うるせぇよ。もう殺してもいいんだぜ」
ぼそっと呟いたピアス男は、歯を剝き出して笑った。
懐中電灯の光に、歯が黄色く浮かび上がる。
こいつは本気だ。
おそらく、人を殺す事など、なんとも思っていない。無抵抗な人間を痛め付ける事を好都合と思う程度だろう。
「にいちゃん？　にいちゃんに電話したのかよ。やめろよ。ビンボーなんだから、金なんか出せないんだからな！」
思い切り顔を歪める。
薄暗い光なら、少しは泣き顔っぽく見えてくれるのではないかと、期待してしまう。ついでに鼻も鳴らしてやる。
「うるせえ、オカマ野郎！　ちったあ黙ってろ！」
あまり、操と話す気分ではないらしい。
怒声を浴びせたくせに、視線を向けようともしない男を、操は繁々と観察した。
もちろん、自分が営利誘拐の被害者などとは思ってはいない。確かに翔峰の生徒なら誘拐のしがいもあるだろうが、オカマ野郎などと罵ってくださる辺り、間違いなく矢崎の関係者だろう。
これで、無事に助け出さなかったら、一生呪ってやる。

決意も新たに唇を引き結ぶと、ぎろりと男の視線が振り向けられた。
慌てて目を逸らすと、膝下までテープで巻き上げられた自分の脚が、視界に飛び込んでくる。
丈夫な繊維の入っているらしいテープは、なるほど少々暴れたくらいでは千切れなかった筈だ。
上から二番目の兄が、引っ越しの時に使っていたのを見た事がある。重量のあるものを梱包するための特別なテープとは知らずに調達したらしく、指で裂く事ができずに、文句を言いながらいちいち鋏で切っていたのを覚えていた。
人間を拘束する素材としては、充分に効力を発揮するだろう。
「ねぇ……逃げたりしないから、このテープ取ってくんない？」
できる限り甘えた声を出してみる。
無視された。
「手だけでもいいからさ。……肩が痛くなっちゃって……」
「うるせーな!! 二度と口を利けなくしてやろうか!?」
こいつは、自分より弱い者には、いくらでも強気になる男に違いない。
操は慌てて口を噤んだ。
下手な事を喋ると、口もテープで塞がれるかもしれない。
このまま、おとなしくしているしかないのだろうか。
と、不意に携帯電話の呼び出し音が響く。
「俺だ。……判った」

それだけ言って、通話が切られる。
澱んだ目が、操を睨み据えた。
「さて……お前の役目はそろそろ終わりそうだぜ」
「役目って……」
「ダンナは一人でのこの家を出たってよ。あの偉そうな大将が、こんな野郎のために必死になるってのは笑えるな」
物すごく厭な名詞を耳にしたような気がするが、我が身が可愛ければ、ここは聞き流した方がいいのだろう。
むっと黙り込んだ操を、男は舐めるように眺め回している。
なんだか、厭な予感がした。
取引相手が現れるまで、人質が甚振られるとか、嬲られるとか、安手のドラマにはありがちだが、できれば勘弁して欲しい。殴られるのは苦手だ。
「ふーん」
何が〝ふーん〟なのかは、とても聞けない。
「綺麗な顔してんな」
誰が、である。
まぁ、この場合、他に誰もいないだろうが。
矢崎が一人で現れると判って、妙な方向に余裕が出てきたらしい。

「どっから見ても、ヤローの癖に……」
蔑む言葉の割りに、視線は操の上を彷徨っている。
この目付きは、絶対にまずい。
脅されて連れ出された時よりも、こんな所に縛り上げられて転がされた時よりも、感じる危険がリアルだ。
「なんか誤解してるって！」
「誤解？　おめぇのダンナはなー、俺らのチームぶっ潰してくれたんだよ。リーダーは檻ん中放り込まれるし、幹部の連中は潰されて入院中だ。……みんなびっちまって、このままじゃ話になんねぇんだよ」
「そ……じゃなくて」
なんだか、相当にヤバイ話らしい。
「ざけんじゃねーよ。矢崎のクソ野郎を絞めてやらねぇと、示しが付かねんだ。奴をやっちまえば、尻尾振ってるような阿呆共も纏められっからな。そうすりゃ、奴の上にいる野郎も高みの見物なんぞしてられなくなる」
「ちょっ……と……」
ばっと伸し掛ってきた男が、操のズボンを下ろそうとする。だが、ぴったりと脚が合わさっていては、脱がせられる筈がない。
もちろん、操は協力する気などなかった。

女の子が羨ましがる真っ直ぐな脚を、初めてありがたいと思う。膝の間に拳が入るようなO脚だったら、べろりと剝かれただろう。顔がどうのと言いながら、結局のところ突っ込む事しか考えていない男は、尻を剝き出しにする事に執着していた。

「この野郎！　逆らうんじゃねえ！」

ごろっと転がされる。続いてばしっと音がして、頬が熱くなった。

オリジナリティがないぞ。と、怒鳴っても気にもしないだろう。末兄なら死にそうな顔をする言葉も、気にするとは思えない。

「クソ!!」

膝から足首までびっしりと巻き付いている梱包用テープの端を探そうとするピアス男は、焦れて苛ついていた。

「なんだよこれ！」

びっしりと縦に細かい繊維が入っているテープが、指で千切れる訳がない。しかも、三人がかりで脚を押さえ付けて丁寧に巻き上げたのだ。指が入る隙間もなかった。

「……チクショウ……」

かちゃっと金属音がする。

目の前に突き出されたのは、ナイフだった。一時期、子供が持ち歩いていたバタフライナイフなどではない。人どころか、熊でも殺せそうなサバイバルナイフだ。

「動くなよ。ざっくり切れたって、こっちは構わねぇんだからよ」

へらへらと笑いながら、男はぴたぴたとナイフで操の頬を叩いた。
本物か、それとも装飾用のものなのか知らないが、逆らわない方が良さそうだ。できれば、まともに切れて欲しい。ナイフの扱いに不慣れなヤツが切れないナイフを使ったのでは、血塗れになるのは目に見えていた。
幸か不幸か、ナイフは本物だった。
すっぱりと、粘着テープが切れる。と同時に、ズボンも切り裂かれた。
「へっ……。キレーな脚、してんじゃん。お前、毛も生えてねぇんじゃねえか？」
ナイフをポケットに仕舞った男は、脚を撫で回し始めた。
気持ちが悪い。
不幸な事に、野郎に撫で回されるのは初めてではない。だが、こんなに気持ちが悪いものだとは思いもしなかった。
「やめ……」
「やめるわきゃねぇだろ？」
操を突き転がした男が、背中に膝を突いた。ジッパーの音が、やけに大きく響く。
ぞっとする。
何をしようとしているのか理解できないような子供ではない。悲しいかな、経験まである。知識として知っていただけでは決して判らない、汗の匂いや、互いの息づかいまで、操は覚えているのだ。



ズボンをずり下げられ、尻を摑まれる。
ぐっと、指が押し付けられた。
「ちっ……。こんなんじゃ入らねぇだろ！」
「痛い！」
「ふざけんな！　緩めろ！」
首筋を摑まれて、頭を床に叩き付けられる。
「緩めろってんだよ！」
ぐいぐいと腰を押し付けてくる。
だが、竦み上がった身体が、開く筈がなかった。男を相手にした事はないのだろう。ちょっとした興味で手を出そうとしたものの、どうすればいいのか、判らないのだ。
きっと、女にも下手くそと言われているに違いない。
頭ががんがんする。尻を引っぱたかれ、ネクタイが首を絞め上げる。
それでも、操は酷く冷静だった。
「チクショウ！　こいつをぶちこんでやろうか？　あ？　どっちがいい？」
目の前にナイフが突き付けられる。
どっちも勘弁だ。
どちらにしろ、自分の身体は自由にはならなかったが。こんな男のために、身体を緩める事などできる筈がない。それぐらいなら、反撃のチャンスを待つ方がいい。

ぐったりと伸びたまま、操は低く呻いた。
「あんだと？」
「……痛いよぉ……」
弱々しく身体を動かす。
女顔というだけで、弱いと決め付けた連中に襲われたのは、一度や二度ではない。もちろん、まともにやり合うような事はしなかった。折角年寄りうけがいい顔をしているのだから、手近な商店や家に飛び込んで、助けを求めるぐらいの事はやってのけた。
それでも逃げられない時。
操にできるのは、一発逆転を狙う事だけだ。
スタミナには自信がない。しかし、瞬発力はちょっとしたものだと思っている。
ズボンを毟り取られたのは厭だが、粘着テープがなくなったのは、ラッキーだ。できれば腕も取って貰いたいが、脚だけでも、どうにかなるだろう。
問題は、もう二人がどこにいるか、だ。
「このオカマ野郎！　がたがた騒ぐんじゃねぇ！」
再び、頭が床に打ち付けられる。
「痛い……痛い……」
「うるせぇ！」
ネクタイが摑まれる。

「騒ぐんじゃねぇよ！」
「……おい……」
部屋の外から、声がする。
「来たみたいだぜ」
「なんだと？」
「必死こいてんじゃねぇの？　マクレ飛んできたみたいだぜ。……そいつと遊ぶのは後にしなよ」
のそりと顔を出した男が思い切り顔を歪める。
下半身を剝き出しにされた野郎を見て楽しい男など、矢崎ぐらいだろう。ピアス男も尻には固執していたが、操に興味があるというよりは、矢崎のものを壊したいという子供染みた破壊衝動らしい。
仲間に踏み込まれても、意外なほど冷静なのが、その証拠だ。
「ちゃんと縛っとけよ」
「判ってら」
毟り取ったズボンで、足首を縛り付ける。
「伊東は？」
「下で待ってるよ。お楽しみさ……」
へらへら笑う男は、ライフルでも撃つような動きをしてみせた。
「へっへっ……」

ピアス男も、得意気にナイフを取り出す。
「こいつら、ここで心中ってか？」
「いいねぇ。あいつをブチ殺してから、精々楽しんでやろうぜ」
下卑(げび)た笑い声を漏らす男は、操の脚を蹴飛ばして、そのまま部屋を出ていった。
二人の足音が遠ざかる。
と、入れ違いにバイクのエンジン音が聞こえた。
どうやら、この建物に三人。他に見張りが何人かいるらしい。少なくとも、矢崎の自宅と、この近所の二ヶ所に見張りが立っているという事になる。
「……ちくしょう……」
こんなみっともない恰好で、放り出しやがって。
ごそごそと足を動かす。
案外、簡単に縛めは緩んだ。
「不器用だな……」
きっと、靴紐もまともに結べないだろう。
必死に身体を捩(よじ)って、ズボンを解いた操は、無様に転がり回りながらも、どうにか立ち上がった。
すうすうと涼しい下半身が頼りないし、みっともない。だが、そんな事に構っていられる状況ではなかった。

後ろ手に縛られたまま、逃げられる所まで逃げる。それが、唯一矢崎の足手纏いにならない方法の筈だ。

廊下に出た瞬間、銃声がした。

瞬間、音の方向へ走り出す。

理性など、欠けらも残っていなかった。

足手纏いだの、反撃のチャンスを待つだのと、理性的な事を考える余裕もない。ただ、矢崎の姿を確かめたかった。

「ふざけんな！　逆らうとどうなるか、判ってんのか？」

罵声が聞こえる。

あの、ピアス男の声だ。

目の前の階段の下から、声はする。

どうやら、矢崎は無事らしい。

ほっとして、ゆっくりと階段を下り始めた操は、今になって、ここが病院だという事に気付いた。

病院でも倒産する事があるのか。それとも単なる移転か知らないが、ろくでもない連中が、いいように使っているようだ。

そこここに転がるゴミが、住処にしている連中がいる事を教えてくれた。

「あのガキがどうなってもいいってのか？　あぁ？　そいつを捨てろ！」

階段を下りた先は、ロビーだった。
懐中電灯の光が、まるでスポットライトのように、矢崎の姿を浮かび上がらせていた。
手にしているのは、特殊警棒だろう。その足元には、奇妙にひしゃげたライフル銃が転がっていた。
「う……」
怖い。
純粋に、矢崎に対して恐怖を覚えてしまう。
「捨てろって言ってんだよ！　いいのか？　あのガキを吊るしてやるぜ！」
矢崎の視線が、男達の顔を舐める。
どんな連中なのか、知っているのだろう。バカをやりそうな人数も判っているに違いない。だからこそ、ピアス男の言葉に、迷っているのだ。
「大嘘だよ！　俺はここだ！」
気が付けば叫んでいた。
「クソガキ！」
男が叫ぶ。
操に向かって足を踏み出した次の瞬間、そいつは長々と床に伸びていた。
「チクショウっ！」
ひゅっと、特殊警棒が空を切った。

ピアス男の手がナイフごと打ち据えられる。
「ぎゃあぁぁぁ……」
ごろごろと転がる男。
「舐めんじゃねぇ！」
喚きながら、どう見ても、壊れてしまっているライフルに飛び付く男の首にも、特殊警棒が打ち据えられた。
「ぐげっ……」
倒れ込み、びくともしない男は、意識を失っているらしい。
「……全く……。無茶を……」
黒尽くめのライダースーツの男は、惚れ惚れするほど格好いい。制服をきっちりと着込んで、優等生面しているより、ずっといい。
「用心しろと言っただろうが」
文句を言いながら、矢崎が歩み寄ってきた。
と、一瞬にして、顔色が変わる。
「操！」
ばっと駆け寄る。
革の繋ぎの前を開き、下に着込んだTシャツを脱ぐと、操の腰に巻いた。
まるでスカートだ。

だが、その文句は口にしない事にする。
「大丈夫か？　怪我は？」
言いながら、額を撫でる。
少しぐらいは擦り剝いているかもしれない。ピアス男ががんがん床にぶつけてくれた所為で、ひりひりするのだ。
「大丈夫だって……」
にっと、笑ってやる。
いや、笑ったつもりだったが、あまり成功はしなかったらしい。操の顔を覗き込む男の顔が、気遣わしげに歪む。
と、どういう訳か、目が熱くなった。
がたがたと身体が震え出す。
自分でも理解できない。
ピアス男は気持ちが悪かったし、少しばかり痛い目にも遭った。挙げ句に殺すと脅されもしたが、それはどこか他人事だったのだ。
それなのに、矢崎の体温を感じた瞬間、身体の震えが止まらなくなった。
怖かった。
気持ち悪かった。
厭だった。

総ての感情が、一気に押し寄せてきた。
「……操……操……」
慰めるような、キス。
「……ごめんな、操。お前を守るためだから……勘弁してくれ。銃を持ち出すようじゃ……。守りきれない」
耳にキス。
目元に、そして唇に。
ますます涙が止まらなくなった操は、矢崎の胸に顔を伏せたまま、警察への通報を聞いていた。

8

叩けば埃(ほこり)の出るカラダの分際で、非行歴のない高校生を監禁したら、どういう事になるか。バカなピアス男は考えてもいなかったらしい。
何も後ろ暗いところがない人間は、警察を利用する事を躊躇(ちゅうちょ)しないものだ。
ライフル銃まで持ち出したのもまずかった。
もちろん、監禁の証拠はゴマンと残っていたし、廃業した病院には、トルエンの入った瓶や、覚醒剤まで転がっていたらしい。
「その上、操ちゃんの涙だもんねぇ。……警察だって甘くなるよ、ねぇ」

頭を撫でてくれるのは、矢崎の兄だ。
大学の先輩が師事している弁護士の先生に連絡を取ってくれたのも、操の家に電話をして、母親に事情を話してくれたのも、彼だった。
矢崎が帰ってくるまで待つと言い張った操を、自宅マンションまで連れてきてくれて、着替えまで貸して貰った。
それでもまだ落ち着かない操を、昭夫はこうして抱き締めてくれている。
「心配しなくても大丈夫だって。……いくら有段者だって、相手もライフルとかナイフとか持ってたんだし……。ほら、ね？　ご飯食べよう」
一所懸命慰めてくれているのは判る。心配する事はないというのも、嘘ではないだろう。
何より、操がどんなに気を揉んでも、仕方がないと、判っている。
それでも、心配なのだ。
身体が勝手に震えて、涙が止まらない。
それをどう解釈したのか、警察の事情聴取は、後日改めてという事で簡単に済んだ。
心は冷静だし、矢崎に有利になるように証言しなければならないと思っていた。
だが、結局は、矢崎にしがみ付いて泣き続けていたのである。昭夫が来てくれなかったら、今も貼り付いていたかもしれない。
なんか、やどかりみたいだ。
誰かにひっ付いていないと、死んでしまう。

そんな感じだった。
流石にストックがなくなってしまったのか、もう涙は出てこなかったが、一人でいる事が酷く不安なのである。
「なんか、ホントに大事にされて……甘やかされて育ったって感じだねえ……」
呆れてというより、しみじみという言い方だったが、呟かれた言葉に、操は自分でも驚くほど敏感に反応した。
昭夫のシャツを摑み絞めていた手を無理矢理開く。
「お腹空いた」
「は？」
突然の言葉に、一瞬だけ目を瞬かせた昭夫が、くすりと笑う。
「いいよ。……おいで」
手を引かれて、ダイニングに連れていかれる。
何もないテーブルに操を着かせ、昭夫はオープンカウンターのキッチンに消えた。
「あっさりしたもんがいいよね」
答えは期待していないらしく、そのまま、キッチンでがたがたと作業をし始める。
自分の中の不安な感情が、潮が退くように消えていった。
「……ウチは両親とも飛び回ってるからね。生きてくために料理は得意になったんだよ。今まで一度も死んでないから、きっと大丈夫だと思うよ」

「矢崎さん…弟の…も、できるんですか？」
「料理？　得意だよ。中華系のダイナミックなのが……」
操が感心して聞いていると、不意に玄関の方でがちゃがちゃと音がして、ドアが開けられる。
恐る恐る立ち上がった操は、ステンドグラスを嵌め込んだダイニングのドアに映る人影を見据えていた。
「……兄さん、何か食い物……。操？」
枯れ果てた筈の涙が、またぞろ湧き上がってくる。
絶対に泣かない。そんなみっともない姿をいつまでも曝す気はない。根性で目を見開いた操は、まず真っ直ぐに矢崎の顔を見詰めると、深々と頭を下げた。
「助けてくれて……ありがとう」
頭を上げると、今にも泣きそうな矢崎の顔があった。
「そんな事言うな……」
「え？　だって……。助けてくれただろ？」
「……巻き込んですまなかった」
瞬きする間に、矢崎が目の前に立つ。そしてそろりと腕を回してきた。
「悪かった。……まさか奴らがここまでやるとは思ってなかった」
顔を覗き込み、髪を撫で付ける。
額のすり傷は、消毒して貰っただけだが、変な色の薬を付けられるよりはずっといいと思って

いた。
しかし、今この状況になってみると、真っ黄色な額をしていた方が良かったのではないかと思ってしまう。
矢崎の目付きが危ない。
擦り傷の目立つ額より、変な色の薬の方が笑える筈だ。真剣な顔で盛り上がっている矢崎から逃れる方法を考える操は、引き攣った笑みを見せた。
「本当、ありがとう。……兄ちゃん、心配してるだろうから、俺、帰るし……」
身体が逃げる。
だが、矢崎はがっしりと腕を回してきた。
「伊東っていうのは、息子もバカなら、父親も大バカ者らしい。父親っていうのがガンマニアで、ライフルをコレクションしてたみたいだ。……きっとニュースはそっちの方が大きいだろうな」
「ニュースって……」
「あんな所でライフルをぶっぱなしたんだから、そりゃ、ニュースにもなるだろう。ヤク中でイカレてる連中がやった事だしな。……大丈夫。操は純粋に巻き込まれただけという事になってるから。学校に連絡もしたし、何も問題はない」
本当だろうか。
確か、剣道の有段者が棒っきれを持っただけで、武器携帯となる筈だ。それとも、ライフルだのサバイバルナイフだのを相手にした場合は、話が別なのだろうか。

「悩むな……。大丈夫だって」
顔に出ていたのだろうか。にっこりと笑った矢崎は、操を抱き締めた。
「矢崎さん？」
そのまま、ずるずると隣の部屋に連れ込まれる。
「ちょ……ちょっと……」
ソファーセットと大きなテレビしかないリビング。操なら充分にベッド代わりになりそうなソファーに押し倒される。
「ちょっと矢崎……」
「無事で良かった……」
言いながら、唇を押し付けてくる。
「副総統っ……」
「大笑いだよ。上手く立ち回ったつもりでいたのに……。今まで、一度たりと計算が外れた事はないのに……。肝心な時になんの役にも立たない。一番護りたいヤツを危ない目に遭わせて……」
声が湿っている。
泣いているのかもしれない。
余りにも近くて顔は見えないのだが、縋り付いてくる矢崎の腕に、操は肩の力を抜いた。細かくキスをしながら抱き締める矢崎は、本当に操の事を心配してくれていたらしい。
操が怖かった以上に、矢崎も恐怖を感じていたのだろう。心配で心配で、後先考えずに動いて

しまったに違いない。
重ねられた唇が、忍び込んでくる舌が、自分の存在を確かめているような気がする。
この腕から逃げ続けていた。
掴まるのが怖かった。
一度捕まってしまったら、二度と逃げられないのではないかと、思ってしまったのだ。
「ん……。んんっ……」
喉の奥が鳴る。
頭の芯がじんじんと痺れる。
何も考えたくない。このまま、矢崎の炎に焼かれたい。この熱い腕が自分に執着している事が嬉しかった。
「あ……。や、ざきっ……」
のけぞる。
首筋に顔が埋まる。
軽く歯を立てられて、甘い疼きを感じてしまうのは何故だろう。
あの男に触られた時は、細胞の一つ一つが固く縮こまっていたのに、矢崎に触れられると、ふわふわと浮かび上がってしまうような気がした。
「操……」
甘い声。

熱い舌が耳を噛む。
と、一瞬にして、熱が離れていった。
「いい加減にしなさい。……ほら、操くんも。お兄さんが迎えにいらっしゃるって……」
「え？」
「電話、聞こえなかった？」
全然、聞こえなかった。
隣の部屋に昭夫がいる事も忘れて盛り上がってしまったぐらいだから、電話のベルが聞こえなくても、不思議ではない。
「孝昭。……強引過ぎると嫌われるよ。操くんも、流されないようにね」
少しばかり意地悪く笑った昭夫を見上げ、操は何度も頷いた。
「あ……はい」
慌てて起き上がって、シャツの前を合わせる。ちょっと気を抜いた隙に、しっかりボタンを外している辺り、矢崎は信用できない。昭夫に止めて貰わなかったら、美味しく頂かれてしまっただろう。
助けられて、感謝のえっちなんかした日には、人生が終ってしまうような気がする。
「ご飯できてるから、ちゃんと食べなさい。お兄さん、すぐに来るっておっしゃってたよ」
「はい！」
こんな所で、男を恋人にし掛かっていたとばれたら、何を言われるか判らない。

ここは頼りになる先輩に甘えていたと、信じて貰わないと、後々面倒だ。
そそくさと服を整えて、ダイニングルームに向かう。
「操ぉ……」
「兄ちゃんにばれたら、殺されるよ」
ぎょっとしたように目を見開いた矢崎に笑い掛けた操は、食卓に向かった。
大きな木桶に氷水が満たされ、素麺が泳いでいる。色とりどりの具が盛り合わされた皿と、ピッチャーに満たされた汁。普通の素麺が、美味そうに見えるのは、矢崎の兄が作ってくれたからだろうか。
嬉々としてガラスの椀を持った操は、ドアチャイムの音に、一瞬飛び上がった。
煩いのが来た。
下手をすれば、このまま連れ戻されるだろう。それぐらいなら、少しでも和んだ雰囲気を見せて、意気込みを逸らかせた方がいいに決まっている。
「……はーい」
玄関に向かう昭夫を見送りつつ、操は食事を開始した。
意地になって素麺を流し込み、次々とお代わりに手を伸ばす。
「……操。お前……」
間を置かず現れた長兄は、弟を訝しげに見下ろした。
「んぁ、兄ちゃん……」

ずぞぞ、と音を立てて素麺を啜り込む。
「何やってるんだ？」
休日の夜中にも拘らずスーツを着こんだ長兄が、人様の家にずかずかと上がり込んでくる。
「え？　ご馳走になってたんだけど」
「弟が助けて頂いたそうで、ありがとうございました」
きっぱりと、頭を下げる。こんな夜中にも拘らず和隆がスーツ姿なのは、弟の命の恩人への礼儀のためなのだろう。
そう考えると、暢気に素麺を啜っていた自分が、流石に恥ずかしくなる。
「……いえ。孝昭のトラブルに巻き込まれたようなものですから。こちらこそ、ご迷惑をお掛けして……」
「犯人が薬物中毒じゃ、どうしようもないでしょう。連中に理性を求める事もできませんし」
酷く殊勝な事を宣う長兄を、操は訝しげに盗み見た。壮絶な修羅場を想像していたのだ。
「……そう考えて頂ければ……。元々、恐喝しているのを通報したのが、切っ掛けみたいなんですよ。自分が体格がいいから、逆恨みとか怖がらないみたいで……」
和隆と昭夫が、なごやかに会話を始めた。
「なんだかなぁ……」
ほっとけ、と、口を動かした矢崎が、食事を再開する。
もちろん、操も素麺を口に運んだ。

何がなんだか判らないが、和隆の機嫌がいいのはありがたい。警察のお世話になったなどという事がばれたら、下手をすれば徹夜で説教かと思っていた。

相手が薬物中毒だろうが、逆恨みだろうが、隙を見せる方が悪いというのが、和隆の論理の筈だ。

ましてや、学校帰りにゲームショップに行っていた事を責めないというのは、かなりおかしい。

「……お前の兄貴、ゲイか？」

不意に矢崎がぼそぼそと小声で聞いてくる。

「へ？」

突拍子もない台詞に、操は目を瞬かせた。

「……やたらと男に持てるんだよな。……橋本さんも怪しいもんだし……」

「んにゃ？」

「橋本さんが付き合ってる彼女、兄貴に似てるんだよ。学校に顔を出すと、やたらと付き纏ってるし……。怪しいと思わないか？」

「……それは思った……」

橋本にしろ和隆にしろ、やたらと嬉しそうに昭夫と話しているのが引っ掛かった。

しかし、不思議ではない。

何しろ、操自身が昭夫にひっ付いているのが楽しいと思ったぐらいだから、同じ感覚を抱く男がいても不思議ではない。

「……あの兄さんになら譲ってやってもいいぞ」
「何それ……」
「邪魔をしないでやるって言ってるのさ。……大人なデートとか連れ出してくれそうだろ？」
にやにやと笑いながら素麺を啜る矢崎は、すっかり立ち直っているようだった。
「ひょっとして、連れ出してくれたらラッキーとか思ってるわけ？」
「お兄さん、しっかりした人みたいだしね。ウチのアニキはちょっと抜けたところがあるから、しっかり警戒してくれる人じゃないとね」
しれっと宣う矢崎は、意味ありげに二人の兄に目をやった。
和気あいあいと話をしていた和隆が、ちらっと操を見た。
「もういいか？」
「あ……うん」
「いいじゃないですか。明日、お休みでしょう？　ゆっくりしてらしてください」
楽しげに笑う昭夫が、キッチンに引っ込むと、ビールとグラスを持って現れた。
「未成年相手に飲むのもなんだし、我慢してたんですよ……。車は、うちのスペースに止めて頂いてますよね」
「いや。家族も心配してますし……」
げ……。
そういえば、この週末は父もいるし、末兄もいる。

説教と、垂れ流しの愛情の洪水に溺れる事になるのか。
「そうですよね。すみません。……ウチの弟もこんなに可愛かったらいいのに……。これですからね」
「いや……。そういえば、こいつの服は……」
操の身なりを繁々と眺めた和隆だったが、それ以上は言及せずに、昭夫に向き直る。
「後日、お返しに上がりますので……今日のところは」
どうやら、帰るしかなさそうだ。
溜め息を吐いた操は、制服の詰まった紙袋に手を伸ばした。
気が重い。
家に帰りたくないという気分が、父親と兄に会いたくないからなのか、それとも矢崎と離れたくないからなのか、操にもよく判らなかった。
「本当にありがとうございました」
玄関先で、深々と頭を下げた兄は、操の頭を軽くこづいた。
「……ごめん……」
長兄の腕を抱え込んだ操は、ゆっくりとエレベーターに向かって歩き始めた。
「ほら……」
紙袋を持ってくれた兄が、頭を撫でる。
傷を気遣ってか、いつもより、柔らかい。

「あんまり心配させてくれるなよ」
「うん……」
エレベーターに乗り込む直前、後ろを振り返った操は、酷く真剣な顔をしてこちらを見据える矢崎に、小さく手を振った。

杉本くんのヒミツ



1

学校の下駄箱が、メイルボックス代わりに使われる事は知っていた。
自分自身は貰った事はないが、投函される代表的なものは、やはりラブレターだろう。挑戦状や、果たし状では、流石に時代錯誤である。
愛想も素っ気もない茶封筒が、下駄箱に入っているのを見付けた時、杉本寿十五才――元い本日より十六才は一瞬眉を顰めた。
「なんじゃこりゃ……」
怖々と中を覗き込んだ途端に、今度はそれを取り落としそうになる。
ピンクのリボンが掛かった小箱が入っていたのだ。
これはやはりプレゼントというやつだろうか。
困った事に、確かに今日は十六回目の誕生日だった。誰かが誕生日プレゼントをくれても、不思議ではない。
が、今日に限っては、背筋がぞわぞわと泡立つ。
いや、ここが自宅のポストなら、不思議には思っても、寒イボは出ないだろう。
なんとすれば、ここは翔峰学院男子部なのである。
もちろん、女人禁制。

校内にいる女といえば、確実に六十は越していると思われる生活技術の講師高野と、食堂のおばちゃんくらいなのだ。そのいずれからのプレゼントでも、余り嬉しくない。

それ以前に、自分が彼女達から、プレゼントを貰える道理がなかった。

「誰だよー」

茶封筒の上半分を元通りに折り畳むと、それを小脇に抱えて、真っ直ぐにトイレに向かった。

個室に籠って、袋の中身を確かめる。

真っ赤な包装紙にピンクのリボン。リボンの間には小さなカードが挟まれていた。

――誕生日　おめでとう――

シンプルな金色の縁飾りのカードに書かれたメッセージは、確かに予想通りだったが、差出人の名がないのが薄気味悪い。

少々乱暴に包装を毟ると、中身の木箱にはＺＩＰＰＯとロゴが焼き印で押されている。

「おっ」

薄気味悪いと思った事など忘れて、嬉々として蓋を開けると、銀色の時計が鎮座していた。

懐中時計と言ったらいいのだろうか。金具に革のベルトで繋がれた時計には、なるほど、超有名なオイルライター・メーカーのロゴが刻印されている。

機能一点張りのデザインは嫌いではなかったが、送り主のイメージがこれほど思い浮かばないプレゼントも珍しい。

「うーん……」

謎の贈り物を、包装紙共々茶封筒に放り込むと、個室を出る。
と、朝顔の前に立った男が声を掛けてきた。
「なんだ、朝っぱらから、腹下し？」
「快食快便だぜぇ」
知ってるような知らないような、一応顔見知りの生徒に、応じる。
「なんだかなぁ。そういや、藤原とのリベンジマッチ、いつやんのさ」
「やんねーよ」
「えぇぇ？　藤原は、いつでも受けて立つとか言ってたぜ。俺、今度こそはお前に掛けようと思ってたのに」
どうして、こんな風に教師と馴れ合えるのかは、寿にはおそらく生涯謎だろう。この学校のノリは、やっぱりどこか変だ。小学校から、いや、下手をすると幼稚園から持ち上がりの連中とは、どうしても感性が違うらしい。
妙な事で有名人になってしまった寿は、溜め息を飲み込むと、目撃者にいらぬ疑惑を抱かせないために一応手を洗った。
「お先ー」
漫画雑誌くらいしか入っていない鞄に、茶封筒を放り込み、さっさとトイレを出る。
プレゼントを貰うのは素直に嬉しいが、やはり、差出人不明というのは不安だ。
――取り敢えず、誰がくれたのかを確認して、相手によってはありがたく使わせて頂こう――

調子の良い事を考えながら、教室に向かう。
一人で探し出すのは難しそうだ。ここは協力者を……。
こういう時に思い浮かぶのは、一人しかいない。
自分のクラスGの教室を通り過ぎると、廊下の端まで足早に歩く。
廊下の突き当たりの教室、一―Cまで来ると、勢い良く扉を開けた。
「おい、雑賀(さいが)！　いるか!?」
「おー、杉本。どうした？」
今年の一年で、一番のカワイコちゃんと評判の雑賀操(みさお)が、窓際の席でにこりと微笑んだ。
実のところ、この評判というのも、実は余りよく判らない。外部入学の人間に取って、やはり一貫教育の男子校は見事なほどのワンダーランドだ。
もっとも、その感性のお陰で、同じく男子校の不思議に悩む、学年一のカワイコちゃんと親しくもなれたのだが。
まあ、カワイコちゃんといっても、あくまで見た目だけのこと、中身はかなり杜撰(ずさん)で我儘(わがまま)小僧のようだった。どちらかといえば、悪さ仲間である寿には、この雑賀に言い寄る男の神経が判らない。
何年も男ばかりの中で暮らしていると、少しばかり可愛い見目(みめ)なら、なんでも良くなるのだろうか。別に完全寮制、外出禁止の環境でもあるまいに。登下校の間にも、可愛い女の子は幾らでも歩いている。

そう、雑賀操は、唯一親しいと言える存在であると同時に、不可解なプレゼント攻勢の経験者なのだ。しかも、誕生日おめでとうなどという可愛らしいメッセージどころか、完璧なラブレターまで貰った事がある。相談相手としては、打って付けだった。

「なぁなぁ、ちょっと話あんだけど……」

雑賀の席まで近付いて、少し声を顰めて告げる。

「話って……もうすぐ予鈴鳴るよ」

そう言いながらも、雑賀は席を立った。

こういう奴だからこそ、付き合えるのだ。

先に立って教室を出ると、雑賀はちゃんと付いてくる。

人気のなさそうな場所を思い浮かべた寿は、手近なところで、昇降口を選んだ。下駄箱の並んだ場所は、授業さえ始まってしまえば、余り人の来る場所ではない。

「で？　なに？」

いくつも並んだ下駄箱の陰にしゃがみ込んだ雑賀が、胡乱に見上げてくる。

ふう、と溜め息を吐いた寿は、雑賀の正面に座り込んだ。

膝に抱えた鞄から、例の茶封筒を取り出した。

「こんなもん、貰っちまった」

「はい？」

雑賀が手渡された封筒を怖々と覗き込む。

「ゴミかよ？」
その方がなんぼかマシだ。ガキみたいなイジメを企てるヤツが相手なら、拳で話をする事もできる。
しかし、だ。名乗る事もできないシャイなヤツのアプローチかもしれないと思うと、対処に困ってしまう。
「……おおっ……。かっくいー」
包装紙の残骸の下のものを見付けると、素直に雑賀が呟く。
他人事なら、寿もそう言ってやっただろう。
「……どーせなら、ライターの方くれりゃいーのにな」
雑賀の口から続いて出た言葉に、寿は首を傾げた。
「あ？」
「これって、同じデザインの時計が付いたライターがあんのよ。俺もさぁ、強請ったのに、二十になったらとか言われちまってさぁ……」
きっと強請った相手は兄ちゃんだろう。生徒会の副会長が恋人気取りで付き纏っているが、今のところ兄ちゃんに敵わないようだった。
「差出人の名前もないし、どうしようかと思ってさぁ……。お前ならどうする？」
「どうするって……。食い物だったら、キモいけど、時計なら使ったら？　そのうち、俺が渡したんだとか言ってくるんじゃねーの？」

事もなげに言ってくださる。
学年一のカワイコちゃんはものすごく丈夫な神経の持ち主だった。
「そっか……」
「で、妙な事言い出したら、突っ返しゃいいじゃん。……で、誕生日って当たりなワケ？」
カードを開いた雑賀が訊いた。
「当たり。今日だよ」
「……ふーん。教えてくれたら、煙草ぐらいプレゼントしたのに」
にやにやと笑う雑賀は、プレゼントと宣って、百円ライターを寄越した。
「ありがと。……そっか、誕生日教えたヤツなんていねーよな。どうやって知ったんだ？」
最近の社会状況に応じて、生徒の名簿などは作っていない。
一応、良家の子弟が学んでいるという事になっている翔峰学園は、犯罪に対して敏感だった。
本当のところは、女子部のための配慮だろうが、一律に配られる名簿などというものは、存在しないのだ。
「中学ん時の友達じゃねーの？　……で、この、コトブキって何？」
「あ？」
改めてカードを見た寿は、苦笑を浮かべた。
「名前だよ、名前。トシナガって読むんだよ。センちゃんも読めねぇってんで、出席簿なんかもカタカナになってんだぜ。……とに、ジジイが迷惑な名前付けた所為でよぉ」

「いーじゃん。誰が聞いても男の名前で。俺なんか、小学校入った時、女の方に名前が入ってたんだぜぇ。中坊ん時も間違われたしさぁ」

別に、名前だけで間違われた訳ではないだろう。何しろ、未だにカワイコちゃんなどと言われる雑賀の事だ。数年前ならさぞや〝美少女〟だったに違いない。

「コトブキとか呼ばれる身になってくれよ」

「そっかぁ。……じゃ、出席簿見ても、コトブキって字は出てねーんだ。やっぱ中坊ん時のダチじゃねーの？」

「いねーよ。ウチのガッコからここに来たのって、俺だけだもん」

寿は別にいいトコのボンという訳ではない。

父親の父親、すなわち、名付け親の祖父が入学させたのだ。学費の全面援助という餌で、父親を懐柔して、寿のプライドというやつを擽って。

お陰で、要らない受験勉強をし、祖父の思惑通りに翔峰の生徒に収まっている。

翔峰の卒業生である祖父は、孫の一人はどうしても自分の後輩にしたかったらしい。

妙な事まで思い出して、寿は小さく溜め息を吐いた。

「それで？　どうすんの？」

「何が？」

「その時計。……なんなら、俺が貰ってやろうか？」

揶揄う口調で聞いた雑賀が、時計をかざして見せる。

その手から時計を取り返すと、ポケットに突っ込んだ。
丁度その時、間の抜けたチャイムが鳴る。
「あ……戻るぞ。——じゃあな」
ひょいと立ち上がった雑賀が、等閑に手を振って走っていく。
「真面目くーん」
ぼそぼそと呟いた寿は、置き去りにされた封筒を引っ摑んだ。

2

大方の学校がそうであるように、翔峰学園も昼休みに学校外に出ていくのは禁じられている。
朝登校してから、最後の授業が終わるまでは、校内に監禁されるのだ。
正当な理由があれば許されるのかもしれないが、やはり、昼飯を外で食べるというのは、正当な理由としては認められないだろう。
そんな訳で、寿はいくつかある脱出口から、校外に出ようと試みていた。
野球グラウンドの裏の用具入れの物置によじ登り、外の道路に誰もいない事を確かめる。
誰もいない。
が、塀に手を掛けた途端に、低い声が浴びせられた。
「忘れ物でもしたのかな」

「あ……えー、体操服……」
最低の思い付きと思いながらも、口から出てしまったものは仕方がない。自分の想像力のなさを呪いながら、怖々と振り向くと、予想外の人物が胡乱な目付きでこちらを見上げている。
「えー……あー……会長様……」
もちろん、その会長様が寿の口にした事など、信じている筈もない。
「体操服ね」
「あ……はい」
「降りておいで」
そう言われてしまえば、従うしかなかった。
さすがにお坊ちゃんお嬢ちゃん校としか言いようのない微温湯に一本通った鉄骨。教師より誰より、生徒に恐れられている存在が、橋本総統だった。
良からぬ噂は幾らでもあるし、伝説としか言いようのないエピソードも囁かれている。その総てを信じる訳ではないが、逆らわない方がいいというのは、寿にも判っていた。
「……体操服なら、予備があるが……本当に必要なのかな？」
雑賀の所為で、こんな物騒な御方と知り合いになってしまっている自分が憐れだ。本当なら、顔も名前も知られていない筈なのに、今更しらばっくれる事は無理だった。
「……嘘です」
「正直でよろしい」

ひょいと眉を引き上げた橋本は、何を思ってか、右手を差し出した。
やはりこれは、連行するという意思表示だろうか。
「えっとぉ……」
逆らうのも恐ろしくて、寿は手を出した。乱暴に二、三度上下させて握手を装い、ぱっと手を離す。
と、いきなり橋本が笑い始めた。
身体を二つに折るようにして、背筋を痙攣させて笑っている。
「……なんか……。楽しいねぇ」
「何がです？」
楽しいのはあんただけだ。
いきなり、理由もなく大笑いされた方は、気分が悪い事この上ない。
「……時計、気に入ってくれた？」
「へ？　時計って？」
ちょっと待て。まさか、この学校の生徒会が、絶大な人気を誇っているのは、全員の誕生日を把握して、プレゼントを渡しているからとでもいうのか。
一瞬、バカな想像をしてしまった寿に、更なる大笑いが浴びせかけられた。
「なんだよ、いったい！」
「……いや。ごめん。……宮子さんが言った通りだと思って……」



「へ？　宮子？」
「……よろしく、兄弟」
「はぁぁぁぁ？」
素っ頓狂な声を上げた寿は、つくづくと橋本の顔を見詰めた。
宮子とは、寿を産んだ母親だ。
今現在は共に暮らしてはいない。小学生の頃に両親は離婚して、母親は出ていってしまったのだ。もっとも、その母親とは割りに頻繁に逢っていた。何しろ、寿自身が父親の方に残ると決めたぐらいだから、捨てられたという感覚はまるでない。むしろ、寿の方に母親を見捨てたという意識があったし、その所為か、しょっちゅう呼び出されても、その度に付き合っていた。
最近では、相談相手でもある。
そして、つい一月前に、結婚するという話を聞かされていた。
近々届けを出すと言っていたが、さっさと実行されたようだ。
「……そういやぁ、橋本って……」
「そう。ウチのオヤジ。……若い嫁さん貰って、浮かれ騒いでるよ」
「若いぃ？」
「若いよ。まだ三五だろ？」
確かに、若いと言えるかもしれない。大学に通っている最中に、できちゃった結婚をしたのだ。その子供が十六だから、友人達の母親よりはかなり若いだろう。

それでも、寿にとっては、あくまでも母親だ。若いと言われてもぴんと来なかった。
「……そういや、今度もできちゃった結婚だって言ってたような……」
「みたいだねぇ。オヤジはまだ何も言ってないけど、書斎に育児雑誌が溜まってるんだよ。紹介される前に、息子にばれたぐらい、隠し事もできない男だ。……まぁ、浮気もできないだろうから、安心していいよ」
「なんだよ、それ」
「君の事も、保護者みたいだって言ってたよ」
停止していた思考が、徐々に動き出す。
離婚した母親が再婚した相手の、先妻との間の子供。つまり、これから先も、なんの関係もないという事だ。
それを理解した寿は、内心でほっと息を吐いた。
「で、どうしてプレゼントなんか……」
「いや。新婚さん達は失念しているみたいだから……」
今更、だ。別に再婚しなくても、誕生日を覚えていた事など滅多にない。大抵は夏休みに入ってから、何時もより高い店で焼肉を奢ってくれるぐらいだ。
「総統が選んでくださったんですか」
「……そうだが……。やっぱり判るものか？」
「ウチのおばさん、こんな趣味良くないから」

時計なら、もっと、いかにもなゴテゴテとした品を選ぶだろう。そもそも、時計などという面倒なものを選ぶぐらいなら、現金とかゲームソフトで済ませるような、雑な女だった。
「趣味がいいと思ってくれた？」
「本当なら、ライターの方が良かったけど……」
今朝、仕入れたばかりのネタを、さっそく使う。
「それはさすがにまずいだろう。だいたい、背が欲しいんなら、煙草はやめるべきだな」
「判ってます！」
今更の説教に、寿は溜め息を吐いた。
とても高校生に見えない橋本は、やはり爺臭い言いようをする。身体に悪いだの、背が伸びないだのと言うのは、聞き飽きた。
「吸うなら、せめて自分の部屋だけにしなさい。その方が、後ろめたいっていうエッセンスが加わって、美味い筈だ」
「なんだそれ」
どうしてたかが煙草で、しつこく説教されなければならないのだろう。
ムカツク。
「じゃ、失礼します」
それでも、一応挨拶するのが、寿に残された最後の理性だった。この学校で生きていくための処世術とも言う。

「……なんだか、冷たいねぇ。折角、義理とはいえ弟ができるって、浮かれていたのに」
「はいぃ？」
「弟」
にっこりと、それはそれは爽やかな笑顔を浮かべてみせた軍人体型の男は、でかい手で寿の頭を撫でようとした。
「……ちょっと待て。何、ブキミな事言ってんだよ！　なんも関係ないだろ？　ウチのババアが再婚したって、俺ぁカンケーねーよ！」
「そんな悲しい事言わないでくれるかな」
「やめろって、キモいだろうが！　いーか！　んな事誰にも言うんじゃねーぞ！　黙ってろよ、判ってんだろうな！」
叫ぶだけ叫んで、ぱっと駆け出す。
と、物置の陰に大男がしゃがみ込んでいた。
「げ！」
こんな所に親衛隊が隠れていたのか。一般の生徒が総統様に逆らう事は許されないのかもしれない。
一瞬、身体を緊張させた寿は、大男の背中がひくひくと痙攣（けいれん）している事に気付いた。
笑っているらしい。
「……岡崎（おかざき）」

なんの気配も感じさせずに背後に立った橋本が、腹の底に響くような声を出した。
「……サイコー。総統に逆らうのが……こんな……」
ひーひー笑っている大男は、その場に膝を突くと、腹を抱え込んだ。
「こんなチビだって？」
言いたかっただろう言葉を告げてやる。
「いやいや……。ひー……。ひっひっひっ……。た、助けて…くれ……。いっいっいっ……」
痙攣している。
何がそんなにおかしいのか知らないが、寿は笑い上戸の大男という珍しいものを、じっくりと観察していた。これが何者なのかは、残念ながら知っている。
総統様のお取り巻きの一人。確か、岡崎――酷く似合わない名だったが。
「雪弥」
そう、雪弥だ。
「……す、すみませ……。ひー。ひっひっひっ……」
その雪弥君は、立ち上がろうとして、再び腹を抱える。
「岡崎さん。話聞いてました？」
だから、笑っているのだろう。
だが、寿は釘を刺すためにも、わざわざ指摘してやった。
「俺、総統に恨み持ってる連中に狙われる気はないから。余計な事は言わないでくださいよ」

矢崎を狙っている連中に、雑賀が攫われたのは、ついこの前の事だ。恋人という噂だけでそんな目に遭うのなら、弟となったら何があるか判ったものではない。
本当は、橋本と関わり合いになりたくないというだけなのだが、このタイミングを利用しない手はなかった。
「俺、雑賀みたく送り迎えしてくれる兄ちゃんとかいないし……。て事で、ここでの話は聞かなかった事にしてください」
「おい、としなが！」
耳から橋本の声を掻き出して、そのまま真っ直ぐ教室に向かって歩き始める。
「寿！　としちゃん！　……杉本！」
橋本を無視するのは造作もない。
だが、こんなのを引き連れていては目立ち過ぎる。何しろ、副会長としょっちゅう一緒にいるだけで、付き合っているなどという噂が立つぐらいだ。副が取れる実力者が相手だと、どんな事になるか、考えたくもない。それくらい、翔峰は〝変〟な学校なのだ。
仕方なく、振り向いた寿は、悠然と歩み寄る二人の大男を目にした。
何が悲しくて、こんなヤツと義兄弟になってしまったのだろう。母親の突飛な行動に呆れる事は多かったが、今回は最悪だ。
「岡崎さん。総統のやりようは結構みっともないと思いませんか？　止めてください」
きっぱりと言い切る。

一瞬目を剝いた岡崎は、橋本の肩を摑んだ。
「感謝します」
にっこりと笑った寿が踵を返すと、背後から大笑いが降り注がれた。
橋本も追いかけてこないようだ。
ほっとして、行き先を食堂に変更した寿は、広大なスペースに溢れる制服に、うんざりとして溜め息を吐いた。

3

その女に子供を産んで貰いたいと思わないのなら、セックスにコンドームは必需品。最近はプロでも信用できないから、どれだけ安全だと言われても、防御は自分でするべきだ。
大昔ならいざ知らず、DNAを調べられる時代には、男も女と同じぐらい用心しなければならない。
そんな事を言った母親だ。判っていて妊娠したに違いない。
まぁ、相手の男も喜んでいるみたいだから、息子が口を出す事でもないだろうが。
「……だからって、橋本総統だもんなぁ……」
ガーガーと掃除機を掛けながら、寿は部屋の中をうろつき回っていた。
やたらと広いリビングダイニングと、個室が二つ。

所謂、２ＤＫのマンションは、一応、寿が管理している。
何しろ、離婚すると決まった時に、父親に付いた方が、金回りが良さそうだなどと計算するような小学生だったのだ。小遣いを増額させるために掃除と炊事を引き受けるぐらいの事はした。
「ま、こんなもんか」
個室はそれぞれが掃除している。そして、リビングダイニングには、なるべくものは置くなと言ってあるのだ。余計なものさえなければ二十畳以上の床面積も、掃除は簡単だった。
タイミング良く、電子レンジが鳴る。
「よしよし……」
掃除機を片付け、キッチンに向かう。
対面式のキッチンは、カウンターで食事をするのに都合がいい。一々皿を食卓に運ぶよりは、カウンターに並べる方が簡単だし、後片付けにも便利だった。
「毎日毎日帰ってくるんだもんな……。たまにはデートでもしろっての……」
離婚した後ろめたさがあるのだろう。夕食を一緒に摂るというのが、父親なりの贖罪らしい。
そのくせ、息子に捨てられた母親が再婚した事を知らないのはいいとして、息子にステディなガールフレンドがいた事も気付いていないだろう。とことん、鈍い男なのだ。
このままでは、一人になってしまうと思った事もないに違いない。
「……失敗したと思ってたんだけど……やっぱりオヤジに付いて正解だったって事かね」
もし、母親に付いていて、そのまま橋本氏と再婚したら。

想像するだけで、ぞっとする。
首を振った寿は、レンジで作った蒸し鳥を、ビニール袋に入れて、氷水に突っ込んだ。
「よし！」
下ごしらえは完了。
遅くなるという連絡――それもほとんどない――がない限り、夕食は父親を待つ。
暇潰しに、ゲームを始めるというのが、日課だった。
訪ねてくる人もいなければ電話をしてくる人間も滅多にいない。
ところが、今日は、ゲーム機の電源を入れた途端に、ベルが鳴った。
「なんだと？」
仕方なく、電話に手を伸ばす。
夕食に帰れないという電話だと信じ込んで、スイッチを入れる。
「もしもし……」
『としちゃん？』
予想とは掛け離れた声が、受話器から聞こえてくる。
「おふくろ？　どうしたんだ？」
『あなた、悠介さんと知り合いなの？』
「ユースケ？　誰？　それ」
『橋本悠介。あなたの学校の生徒会長だって聞いたんだけど』

――へえ、そんな名前だったんだ――

「ふーん、そう」

しらばっくれてやる。

顔を合わせればなんでも喋る母親が、電話が苦手だという事は、よく判っていた。特に、寿の隣に誰がいるか判らない状況では、必要最小限の事しか喋れなくなる。この場合、誰かとは、嘗ての亭主に他ならなかったが。

流石に、元の亭主がいる場所で、再婚相手の子供の話はしたくないに違いない。

案の定、肝心な事は話せずに、母親は溜め息を吐いた。

『明日、学校の帰りに会いたいんだけど』

「何、しばらく出歩けないって言ってただろ?」

『いいから来なさい。私がそっちへ行ってもいいのよ』

「それ、まずいんじゃないの? 新婚さんなんだろ? 昔の男の家に行くってのは、やっぱまずいよぉ」

耳と肩で電話を挟んで、ゲームを始める。

動きが制限されている所為で、慣れたレースゲームが酷くスリリングなものになった。

「あっ……ちくしょう」

思わず呟く。

と、その声を聞き咎めた母親が、耳元で喚いた。

『またゲームやってるのね！　ちゃんと話を聞きなさい！』
「だーかーらー。新婚なんだから、ダンナの事構ってりゃいいんだよ。……俺のダチが生徒会に入り浸ってるから、会長も俺の事知ってたんじゃないの？　あ、そーか。ひょっとして、今日靴箱に入ってた時計、お袋のプレゼント？　なんだ、犯人探ししちゃったよ。ちゃんと名前書いとけよ。……ありがとね」
息を飲む気配がした。
やはり、息子の誕生日など忘れていたらしい。
まぁ、本人もどうでもいいと思っちゃいるのだが。
「じゃ、切るぜ。……会長、忙しいみたいだから、変な事で使っちゃダメだよ」
返事は聞かずに通話ボタンを切った。
電話はそのままソファーに投げ出して、ゲームを再開する。
いつもなら、それなりに熱中できるゲームなのだが、今日は十分としないうちに、飽きてきた。
コントローラーを投げ棄てて、ソファーに寝そべる。真っ直ぐコーナーに突っ込んだ車が、弾かれて後ろ向きに止まった。
なんとも、間抜けだ。
溜め息を吐いた寿は、電話を充電器に戻すと、そのまま腹這いになった。
「参ったぜぇ。ババアが総統のオヤになんのかよぉ……」
橋本はそんなことを気にはしないだろう。

しかし、寿の方は気になった。
あんな目立ち過ぎる男と関わり合いになるのは勘弁だ。有名人の知り合いは雑賀だけで充分である。
「……と。そうだ！　誕生日じゃんか！　まずい！」
どんなに忙しかろうが、絶対に誕生日を忘れない人物が、約一名。
ジジイである。
息子の一人が早世したからといって、孫に寿などという名前を付けるふざけたジジイは、毎年毎年、万難を排して襲撃してきた。
そして、ワケの判らない説教と共に、ワケの判らないプレゼントを置いていくのだ。何しろ、入学祝いに剣道の防具一式を買うというぐらい、ちょっとぶち切れたジジイなのである。
大昔の翔峰の話から始まる説教を聞きたくなければ、出掛けるしかない。
「全く。あのジジイも元気モンだからよぉ……」
末っ子の息子を、自分の母校に入学させようと画策するぐらい、元気者なのだ。
「迷惑なこった」
適当に食べてくれとメモを残して、財布と煙草をジャケットのポケットに突っ込む。息子のために付き合いもそこそこに切り上げている父親には悪いが、自分の父親の相手は、彼に任せるしかないようだった。
「サイテーの誕生日ってヤツ？　あーヤダヤダ」

ジーンズのベルト通しにキーホルダーを引っ掛けて、玄関に向かう。
悪い予感がして、エレベーターを避けて非常階段を使った寿は、マンションの来客用の駐車スペースに止まる車を見て、密かに笑みを浮かべた。
幾ら下りとはいえ、六階分の階段を駆け下りるのは、夏には向かない運動だ。だが、その労力を払った甲斐があったというものである。
満足気な笑みを浮かべた寿は、ふらふらと夜の街に出掛けていった。

4

やっぱり、最低の誕生日かもしれない。
体感ゲームのコクピットに座れた時には、こんな事になるとは思ってもいなかった。
未だに人気のあるこのゲームは、座るにも順番待ちになる時があるのだが、今日は意外にすんなりと座れたのである。
レースのゲームは得意中の得意だ。このゲーセンでは、多分五本の指には入るだろう。
今日も気持ち良く、チェッカーフラッグを受けたところまでは良かった。
問題は、その後、対戦に割り込んできた野郎だ。
接戦だったのは認めてやろう。
しかし、負けたからといって、こういう絡み方をするのは勘弁だ。

「お嬢ちゃん……カラオケでもどお？」
「冗談」
「そりゃないんじゃない？　勝ちを譲ってやったんだしさ」
「あんだと？」
目を剝いた寿の顔を、男は舐めるように観察している。
おい、待てよ、だ。
雑賀と違って、物心付いた頃から女の子と間違われた事など一度もないし、男にナンパされた事もない。
もちろん、こんな目で見られた事もなかった。だが、悲しいかな、生まれた時から性別を間違われ続けたという友人のお陰で、男の視線がどれほど気持ちが悪いか、知りたくもないのに知らされている。
ごく真っ当に、野郎としての人生を歩んできた寿は、男の視線に思い切りむかついた。
そりゃあ、ちょっとは成長不良かもしれない。それでも、小さいというだけで、女扱いをされるのは我慢ならなかった。
「てめェ、本気で言ってんのか？　俺ぁ、何回でもやってやるぜ！」
ゲームに負けた悔しさで、下らない事を宣っているのなら、何度でも勝負してやる。
「シャレだよ、シャレ。マジんなんなって」
にぱっと笑った男は、ポケットに手を突っ込んだ。

小銭が切れたのだろう。身体を斜めにして、奥の奥まで探った挙げ句、溜め息を吐いてゲーム機を離れた。

もちろん、即座に次の人間が座る。

気が削がれて、自分も席を立った寿は、両替に向かう男に舌を出した。

「だっせー」

「しょーがねーだろ。ガチャポンに注ぎ込んじまったんだよ！」

「ガチャポン？　クレーンじゃねーのか？」

「クレーンに注ぎ込むかよ！」

確かに、クレーンならテクニックで取れるが、ガチャポンの場合は運任せなのだ。どうしても欲しいキャラクターがあると、思わぬ金額を注ぎ込む事になる。

「ほら！　見てみろ。チクショウ。二、三十個はあるぞ！」

男が、店の入り口近くに転がされたカプセルを示した。

その場に投げ棄てられたカプセルを小学生が漁っている。どこかで見たような光景だが、それがガチャポンのカプセルだということが、日本が平和な証拠に見えた。

「で、出たワケ？」

「ま、な……」

大昔の、オヤの世代に人気のあったキャラクターを集めているらしい。道理で、小学生が不満顔な筈だ。

「ひょっとして、全部出した？」
「入ってなかったんだよ！　チクショウ！　外から見えねぇンだからよぉ、腹の立つ！」
「そりゃ、お気の毒。……で、諦めんのか？」
「ここのガチャポンいつ入れ換えるか知ってるか？」
「それは知らないけど、ウチの近所の本屋にあった思うけど……」
「どこ、それ。まだ開いてんのか？」
勢い込んで聞いてくる男を、寿は改めて観察した。
とんでもない大男を見慣れてしまった所為か、そう長身にも見えないが、もちろん、寿よりは長身だった。
女の子に声を掛けても、逃げられそうにない程度には清潔っぽかったし、そこそこのハンサム。寿が目指している〝いい男〟というイメージに近い。上を見れば切りがないが、この男程度なら希望がある。そう信じたい。
「なぁ、案内してくれよ」
後十センチなら、成長の余地はある筈だ。
実際、カワイ子ちゃんの雑賀より、二センチほど低いというのが、寿が一番引っ掛かっている点だった。
「杉本ぉ」
「へ？　杉本って……どうして？」

「これだからなぁ。有名人ていう自覚ある？　操ちゃんのナイトって有名じゃん」
「なんだよそれ。……あんた、翔峰？」
「そう。……で、その本屋、教えてくれよ。バイクの後ろに乗れる？　ちょっと待ってくれよ。いま、両替するから……」
どうやら、本当にガチャポンをやる気になっているらしい。
「ま、いっけどね……」
雑賀のナイトと言われた事で、気分が良くなった。わずか二センチでも、自分の方が低いというのが、目下のところ一番の不満なのだ。
「お待たせ」
「待ってねーっての。……ひょっとしてマジなのか？」
「そーだよ。結構ショックだったんだぜぇ。オレの金返せってぇの」
「……それはよく判る」
意地になってガチャポンに金を食わせ続けた挙げ句、最後まで裏切られて機嫌悪いところに持ってきて、顔見知りのガキに戦いを挑んだ挙げ句に負けたとなったら、女扱いして喧嘩を売りたくもなるだろう。
二年前なら、殴り合いになったかもしれないが、翔峰に入るために続けた我慢が、身に着いたのかもしれない。
オレも大人になったもんだ、などと思うと、少しばかり気分がいい。

「ほい、メット。……で、その本屋って、どこいらへん？」
「しょーがねーな。判ったよ、案内してやるよ」
「おう！　頼むぜぇ！」
思ったよりいいヤツじゃん。
そんな気分で、寿はバイクのビリオンに座った。

5

今日はそんなに悪い気分ではない。
ジジイの持ってきた誕生日プレゼントは、例によって訳の判らないものだったが、顔は合わせずに済んだし、父親はプレゼント代わりにジジイの説教を聞いてくれた。
それに、ゲーセンで知り合った男は、夜食を奢ってくれたし。
だから、本日はフケる事もなく、寿は珍しく自分の席で昼飯をぱく付いていた。
「杉本……お前、昨日誕生日だったんだって？」
「んぁ……」
コロッケパンを頬張ったまま、目だけで声の主を見上げる。
昨日のガチャポン男だった。
どうにかこうにか、口の中のものを飲み下すと、改めて相手を繁々（しげしげ）と観察した。

「あんた……て――三年？」
タイピン型のクラス章は、Ⅲ―G。
「何？　三年だとオカシイのかよ」
「いや、そういう訳じゃねえケド……」
そう、そういう問題ではないと思う。
三年が一年坊主の教室に、雑談をしにくるというのがオカシイのだ。
「そうでねくて……。何か用？」
「あー、あのさぁ。今日帰りに、ゲーセン行かネェ？」
「はいぃ？」
余りに不審げな顔をした所為か、男は困ったように視線を逸らした。
一瞬考え込んで、真っ直ぐに寿を見下ろしてくる。
「リベンジだよ。決まってんだろ」
思いっ切り怪しい。
だが、放課後の暇潰しとしては、いい線を行っているだろう。
「ふーん……別に暇だし、いいけど？」
途端に、男の顔が喜色に輝く。
――やっぱり、怪しい――
内心で呟いた寿は、それでも笑みを顔に貼り付けた。

「でさ……あんた、名前なんていうの？」
「え？」
昨夜、問わなかったのも確かだが、普通は自分から名乗るものだろう。少しばかり、意地の悪い事を考えながら、もう一度聞く。
「だから、名前……」
暫し（しば）の間、黙り込んでいた男が、やがて苦笑を浮かべて口を開く。
「多賀哲也（たがてつや）。以後お見知り置きを」
寿は目を瞬かせて、相手の顔を覗き込んだ。
どういう顔をしてこういう科白（せりふ）を吐くのか。なんだか、異星人でも見る心持ちだ。
「じゃ、放課後な」
妙に馴れ馴れしく寿の肩を叩いた多賀先輩は、登場した時同様、唐突に退場していく。
その背を唖然と見送ってしまうと、寿は何事もなかったように食事を再開した。
毎日毎日朝っぱらから弁当を作ってくれる父親は、まさかそれが朝食代わりとは思っていないだろう。あるいは、早弁の挙げ句昼飯は購買か食堂で済ましていると知ったら、もう一食分持たせてくれるかもしれない。
どちらにしろ、起き抜けにものを食べられない寿としては、父の思いやりはそれなりにありがたいものだった。
昼飯の確保のために脱出するというのも、結構気に入っている。

デザート代わりのチョココロネを牛乳で流し込んでいると、またしても来客があった。
「げぇ！　なんだよ、それ。そんなモン食ってんのぉ？」
次なるお客、雑賀操は、可愛いお顔を思い切り歪めて、めちゃくちゃ可愛げのない事をおっしゃる。
「何がだよ。美味いぞ」
「信じらんねぇ。どうしてそんなモン食えるんだよ」
不満げに唇を突き出した雑賀は、チョコレートは好きなくせにチョコレートクリームは許せないという、よく判らない嗜好の持ち主だった。そういえば、焼きそばパンを人間の食い物ではないと抜かしてくださった事もある。
「で、なんの用？」
「そうそう。数学藤原だったよな。どこまで行ってる？」
邪気なく微笑まれると、邪険にはできない。
「どこまでって……ちょっと待てよ」
机の中から教科書を引っ張り出した寿は、折り癖の付いたページを開いた。
何しろ〝天敵〟藤原の授業なのだ。判らないのかとバカにされるのが厭で、しっかり予習している。
「すっげー。杉本、こんな真面目だったんだ」
「藤原だけだよ。オレぁ、アイツにバカにされるのは許せねぇンだ！」

元々、数学は得意だ。地の底を這っている英語を補うために、受験でも一番力を入れたぐらいである。物理や数学が苦手だという雑賀は信じられないと宣うが、寿に言わせれば、英語に困らない雑賀の方が、よほど不思議だった。

公式さえ理解すればいい数学と、単語の一つ一つまで記憶しなければならない英語。どちらが大変かといえば、ただただ記憶力を必要とする英語だろう。もちろん。

「やっぱ、俺んとこより進んでる。……ノート貸して！」

「いいけど……」

「サンキュ！　あ、そうだ。これ、ウチのババアから、誕生日のプレゼント。いちんち遅れだけどね。なんだったら、お誕生会開いてくれるってよ」

やたらと嬉しげに笑う雑賀は、自分が生息する環境が、どれほど特殊なものなのか、理解していないようだ。両親とも、歳の離れた兄弟とも仲がいい雑賀は、もちろん、先輩方のウケも良かった。

カワイ子ちゃんと言われる下級生に懐かれて、悪い気がする筈がない。何しろ、既にオッサンが入り始めた同級生の間でも、雑賀の人気は盛り上がっていたのだ。

「何？」

二十センチ四方ほどの箱が差し出される。

「ケーキ」

「手作り？」

「そ」
女子高校生連中の作る、味の保証がないケーキと違って、雑賀の母親の作品なら、美味い事間違いない。
いそいそと箱を開けた寿は、思わず口笛を吹いた。
照りのいいチョコレートクリームに〝としながちゃんおたんじょうびおめでとう〟という文字が白く描かれたケーキ。
随分と小振りだが、その分、手間が掛かっている。
「可愛いだろう？　俺のデザインだぜぇ」
本人が嫌いなチョコレートクリームを指定してくれた辺りに、愛情を感じるべきだろうか。
可愛らしいむく犬がちんまりと座っているのも、愛情だろう。
「……そういや、さっきの先輩、なんだって？」
「見てたんか？　昨夜、ゲーセンで逢ってさぁ。レースで俺に勝とうってのが、甘いんだって。リベンジとか言いやがって……」
「なーんだ」
「なんだって、なんだ？」
にやにや笑う雑賀は、何の遠慮もなく前の席に腰を下ろした。
「ケーキ、なんだったら、生徒会室の冷蔵庫に預けとこうか？　チョココロネの後じゃ、キツいだろ？」



道理で、ケーキの箱が冷たい筈だ。生徒会室だろうが職員室だろうが平気で出入りする雑賀は、堂々と友人へのプレゼントと宣って、冷蔵庫を借りたに違いない。

「いい。食う」

ちらちらとこちらを見ている連中は、雑賀自らが運んだケーキの欠けらにでもあり付きたいのだろう。そのくせ、背後に矢崎の影を見てしまって、声を掛ける事もできないのだ。

案の定、数学のノートと共に雑賀が姿を消すと、クラスメイトが近付いて来た。

「分けて欲しい？」

「くれ！」

「杉本ぉ、一人でいい目見てんじゃねーよぉ」

口々に喋る男達は、雑賀の母親の作品を、舐めるような目で見ていた。

本当は雑賀を舐めたいのか、それとも単に食い物に引き寄せられているのか。

深く追及すると不幸になる気がして、寿は定規を取り出した。

「なんだよ、そんなんで切るのか？」

「ちょっと待てよ。カッター洗ってくるし……」

「箸で突きゃいいじゃん」

少なくとも、このクラスは食い意地の方が勝っているらしい。内心ほっと溜め息を吐きながらも、寿はプラスチック定規をケーキに突き立てた。

「ひっでー」

「操ちゃんのケーキがぁ……」
「雑賀のケーキじゃねーって。お袋さんが作ってくれたんだよ」
「えー？　杉本、お前ら、オヤ公認の仲なんかぁ？」
「なんだよ、それ」
「レズぴー」
「ひっでー」
騒々しい声の中から、寿の耳は恐ろしい言葉を拾い上げた。
「おめーら何言った？」
精々ドスを利かせて、周囲を睨み据える。
チョコレートクリームが付いた定規では迫力がないが、ナイフ代わりに男共の鼻先に突き付けた。
「俺と雑賀が何だって？」
「え？　マブダチだろ？　なぁ、そんなん判ってっから、ケーキケーキ」
ぐるりと取り囲む大柄な同級生たちを睨み上げる。
だが、その誰もが、マジな顔でケーキを見詰めていた。
どうやら、失言だったという意識はあるらしい。
これ見よがしに、ケーキに十文字に定規を刺した寿は、一切れを口に運んだ。
美味い。

自然と笑みを零した寿は、周りの男達を睥睨した。
「すっげ美味いぜぇ」
後は、惨状。
カッターを洗うだの、箸で突くだの言っていた連中が、手摑みでケーキを奪い合っている。
餓えたケダモノのようなクラスメイトを眺めながら、寿は定規を舐めていた。
こんな連中に妙な目で見られている雑賀に同情する。と同時に、見物人なら、こんな面白いバカ騒ぎもそうそうないと、面白がっている自分を意識していた。

6

食堂の一角に、人の近寄らない一団が陣取っている。
別に威嚇している訳でもなければ、立ち入り禁止のロープを張り巡らせている訳でもない。それでも、自分の目から見ても、避けられているのはよく判った。
生徒会長が決して親しみ易い存在ではないことは知っていたし、なんといっても、取り巻いている猛者がいけない。ガタイのいかつさは目を瞑るにしても、せめて、もう少し愛敬があるか、愛想の良い人間を集めるべきだった。生徒会長といえども、怖がられるだけでなく、ミーハーな人気が必要である。
つまらない事を考えながら、橋本は食堂を睥睨した。

見慣れ過ぎた制服の野郎共は、どいつもこいつも、欠食児童さながらにトレイに載った飯を平らげている。
「殺伐としてるなぁ」
「はい？」
周囲の野郎共に負けず劣らず、がっついている同席者が、こういう時だけ耳敏く橋本のぼやきを聞き付けた。
ちろりと大男を見遣った橋本は、露骨に眉を顰めてみせる。
「潤いがない」
切り返した途端に、一斉に答えが飛んできた。
「潤い!?」
「なんか悪いもん食いました？」
「ある訳ないっしょ、男子校に……」
三人が三人、顔を見合わせ、溜め息を吐く。
全員が部の人間だというのが、そもそもの間違いだ。こういう愚痴には、あまり乗ってくれない。同じ部員でも、外見に似合わず夢見がちな雪弥が、この場にいてくれれば、一緒に嘆くくらいはしてくれるのに。
莫迦な夢想をしてしまうほど、本日は暇だった。
と、いうより、このところ暇なのだ。

何しろ、この後の校内イベントといえば、期末テストくらいしかない。これはどう考えても生徒会の管轄ではないだろう。あえて生徒会の仕事を掘り出すのなら、テストの後の試験休みに、夏休み明けの学園祭の打ち合わせをしなければならない程度だ。

もっとも、そうでなければ、義母の子の事など構う筈もない。

そう、暇なのだ。

なるほど、母親ができた事はありがたい。たとえ彼女が悪阻が酷くて、寝たり起きたりの生活だったとしても、父親の御守りをしなくて済むというだけで、大歓迎だった。

実母が亡くなって四年。一度として台所に立たなかった中年男は、通いの家政婦が用意した食事を、温め直す事すらしない。まるで明治生まれの頑固ジジイだ。それはもう、台所に立つと呪われるとでも思っているのではないかと思ってしまうほどである。

そういう父親がいると、なんのかんのといって、同居の子供は雑用が増えるものなのだ。

少なくとも、新しく母親ができたお陰で、朝から靴下のありかを訊ねられる事はなくなった。

母がいなかった間は、たった四年。それでも、その間に作られた生活習慣というか、押し付けられた雑用というか、そういうものが一気になくなると、妙に暇を持て余すようだ。

「橋本さん？　本当に変ですよ。……腹でも下してんですか」

ぼんやりと考え巡らせていた橋本は、声の主をちろりと見遣った。

食欲が湧かない、という案はないらしい。まぁ、今日の同席者はラインの面々だから、部員の中でも特筆すべき食欲の持ち主ばかりなのだが。

「あ……。潤いが来ましたぜ」
唐突に、日本語になっていない言葉が吐かれる。
だが、まさしくその通りだった。
酷く機嫌のいい笑みを浮かべて、踊るような足取りで近付いてくるのは、雑賀操。橋本が次期会長を任せようと目論む矢崎が、ご執心の相手だ。
「矢崎を探してるのかな？」
「違うよ。……あれ？　雪弥さんは？」
今年一番のカワイ子ちゃんは、健気なまでに自分を追い掛け回している矢崎より、雪弥の方がお気に入りらしい。
幼稚園から大学まである翔峰学園が、中学高校と一クラス分ずつ生徒を増やしているのは、活気を与えるためだという。経営サイドの思惑は別として、目新しいカワイ子ちゃんが、新風を吹き込んでくれるのは確かだった。
実際のところ、幼稚園から高校卒業まで、知った顔ばかりと暮らしていたら、活気もなくなるだろう。
「浮気？　やるなぁ操ちゃん」
「矢崎が可哀想じゃないか。せめてもうちょっと判らないところでやるとかさぁ」
延々と同じ顔と付き合っている連中が、嬉々として揶揄う。
「バカ言ってないで、雪弥さん、どこにいるか教えてください」

むっとして頬を膨らませた少年は、橋本の隣に腰を下ろした。
自分が食堂に集まった生徒達の注目を浴びている事を判っていて、完全に無視している。
まぁ、これだけ目立つ容姿をしているのなら、視線に気付かない振りをするというのも、処世術の一つだろう。
「何か用があるのか？」
「ケーキ持ってきたんだ。雪弥さん、ウチのおばさんのお気に入りだからさ」
そういえば、球技大会の時、サンドウィッチを分けて貰った礼状を出したとか言っていた。
見た目とは裏腹に、雪弥は礼儀正しく心配りができる男だ。それを堅苦しいと思う人もいるだろうが、雑賀の母親は喜んだらしい。
「ケーキとは豪勢だな。……お兄さんが代わりに食べてあげよう」
「やらねぇ！」
舌を突き出す雑賀を眺めて、橋本は声を殺して笑った。
「生徒会室の冷蔵庫にあるのは、雪弥さんのだからね。巨大ネズミに荒らされないように、管理してよ」
どうやら、雪弥がいないのにわざわざ近付いてきたのは、責任者に命令するためだったらしい。
よく判ったやり方と言うべきか。
「判った。雪弥に断ってから分けて貰えばいいんだな。……しかし、お袋さん、マメだな」
「お誕生日ケーキだよ」

うけけけと、奇妙な笑い方をした雑賀は、どんなデザインのケーキなのか、楽しげに説明し始めた。

これが義理の弟の親友かと思うと、嬉しくなる。矢崎のお気に入りだという事も含めて、退屈凌ぎにはなるだろう。

「折角カラオケ奢ってやろうと思ってたのに、杉本の奴、先輩と遊びにいく約束とかしてるし」

ぶつくさと文句並べている雑賀。

だが、橋本の耳には何も聞こえていなかった。

――先輩と遊びにいく……？――

そこだけが海馬の中でぐるぐる回って、並べられる言葉がまるで入ってこない。

「誰と？」

「はい？」

「誰と遊びにいくって？」

「さぁ……二年の人？　ちょっとナンパな感じの。……それが何か？」

雑賀に不審げに聞き返されて、漸く我に返った橋本は、人が悪いと評される笑みを貼り付けた。

「いや、操チャンの誘いを断るなんて大した奴だな、と思って……」

「ていうか。誘ってないもん。……昼休みにケーキ届けにいったら約束してたから。ブッキングしてんの判ってんのに誘わないよ」

近頃、少々の当て擦りでは騒がなくなったとはいえ、厭そうな顔をしてみせる事だけは忘れな

い。鼻の頭に皺を寄せて、判ったかと言わんばかりに睨み返してくる。
「あ……そう」
「そう、だよ。……あいつ、レースゲームにだけは変なプライド持っててさ」
「なるほどね」
「あ。バカにしてるな？　モノホンの車とは全然違うとか言うんだろ！」
「……まぁそれは、Gがないからな……」
思考力が、極端に鈍っている。
矢崎が厭がる事も含めて、雑賀を揶揄うのは、何よりの娯楽だった筈なのに、寿の顔ばかりが浮かんでくる。
「聞いてる？　会長？」
「だめだめ。なんか知らないけど、黄昏てんのよ。潤いがないとか言ってさ」
横から要らない事を解説してくださる野郎に、雑賀は直ぐに乗り換えた。どうやら、ケーキの安全さえ確保できれば、橋本になど用はないらしい。
「潤い？　そんなの壁をどーんとぶち壊したら、幾らでもあんじゃないの？　折角、がたいのいいのが揃ってンだし……」
「いいなぁ、それ」
「でしょ？　でしょ？　会長。やろうよ……」
顔を覗き込んでくる少年をつくづくと眺めた橋本は、苦笑を浮かべた。

こんなのに欲情する矢崎の神経が判らないと思っていたが、なるほど退屈はしないだろう。全身で甘えてくる仔猫のような雰囲気がある。それも、生まれた時から人間に世話をされている飼い猫だ。

「だいたい、どーして女子部と分かれてんのさ」

「悲しいねぇ。それは俺達もずっと思ってた事なんだよ」

「小学校までは一緒なんだけどねぇ」

幼稚園からの同級生達は、今更どうしようもない事実に不満を抱く新入りに、表面だけ同調していた。誰もが一度くらいは言ってみる世迷言である。

どうしても厭なら、外部の高校に出ていけばいいのだ。そのままエスカレーターに乗る事を選んだからには、文句は言わないというのが、お約束である。

だいたい、ただでさえ面倒な学校の雑事に、男女問題まで絡んできたら堪らない。本当の共学になるにしても、取り敢えず自分の在学中は勘弁だ。

まぁ、宣言するつもりもないが。

実際、本当に女子部と統合するなどという話になったら、真剣に反対する男子部の生徒が確実にいるだろう。女子部の生徒に言わせたら噴飯モノかもしれないが、優越意識を持った男共も相当にいる筈なのだ。

どちらにしても、経営状態に問題のない現在、学園側が統合問題に着手するとも思えない。

「会長？　ホントにどうしたんです？」

「お前、誰だっけ？」
真顔で聞き返してやると、その場の全員が凍り付いた。
「と、いう訳で、じゃあな」
呆気に取られている面々を残して、さっさと食堂を出る。
流石に驚き過ぎて対応できなかったのか、誰も追ってはこない。
元々、むくつけき男共を連れ歩く趣味などないのだ。それでなくても橋本王国だの、総統などと言われているのに、四六時中デカイ男が付き従っているのでは、自ら喧伝しているようなものだ。
ただ、部活も生徒会の幹部も、体格がいい者が揃っている所為で、好き好んで連れ歩いていると誤解されているらしい。
確かに色々と裏事情もある。翔峰学園のお幸せな坊ちゃん達を守るために、小細工が必要なのも確かだ。
「……なるほど。確かに潤いも必要だな……」
雑賀を構う矢崎の気分がよく判った。同時に、何故義理の弟を構う気になったのか、思い当たってしまった。
視界の隅をちらちら動く二匹の飼い猫のウチの一匹。怖いもの知らずの仔猫達は、誰彼構わずじゃれ付く一匹に比べれば、もう一匹は少しは警戒心らしきものを持っているようだった。
ただし、逃げれば逃げるだけ追い掛けたくなるというハンター気質の人間がいるという事にま



では、考えが及んでいないようだった。
「あそこまで厭がられると構いたくなるものだな……」
幸い、義兄弟などという、面白い関係でもあるのだ。
寿を構う事にどうして理由を必要とするのか、橋本は全く考えもしていなかった。

7

五勝一敗で一端ゲームを中断して、近所の喫茶店で不味いスパゲティとコーヒーを奢って貰って、得意だというクレーンでぬいぐるみを三つばかり取って貰った。
多賀哲也センパイは、中々イイヤツだ。
「カラオケ行こうぜ」
喫茶店を出たところで、多賀がべったりと背中に貼り付いてきた。
「暑いって！」
もう気分はすっかり真夏だが、冷房が異常なほど利き過ぎた喫茶店で骨の髄まで冷え切った身体には、他人の体温は心地良かった。だが、鬱陶しい事には違いはない。身体を捩って多賀の腕から逃れた寿は、カードレールに腰を下ろした。
「カラオケぇ？　それぐらいだったら、ライブハウスの方がいい」
「ライブハウス？　そういうの好きなのか？」

「……好きってほどじゃないけど。……どうせ聞くならナマがいいじゃん」
いくらイイヤツでも、オンチじゃないとは限らない。ビミョーに音程がずれる、自分は気付かないオンチというのが、この世で一番酷い歌だ。
どういう訳か、カラオケ好きの半分は、その中途半端オンチなのである。
「なるほどね。じゃ、どこへ行く？」
「うーんと……。どこにしようかな……」
頭の中で、近所のライブハウスをサーチする。
ある程度のレベルで、ここに近くて、などと考えていると、候補はどんどん減ってゆく。
と、目の前の男が、結構老け顔だという事に気付いた。
「ライブハウスってのとはちょっち違うけど……。多賀さん、大学生になってくれる？」
「いいけど……。なんだ？　飲みにいきたいのか？　今時、そんな煩いこと言う店はないだろ」
「あるんだな、これが……。狭い店なんだけどさ。オトナと一緒に来いとか言って、追い出されちゃうんだよ。どーせ酒なんか飲ましてくんないのに」
「……いいぞ。そこへ行こう」
放課後、そのまま出てきた筈なのに、多賀は制服の目立つズボンではなく、カーゴパンツにTシャツという格好だった。それを利用させて貰わなければ。
「けど、お前、大酒飲みじゃないだろうな。そんなに奢ってやれねぇぞ」
「奢ってくれるの？」

「誕生日なんだろ？　けど、限度はあるからな」
「だから。どーせジュースっきゃ飲ましてくれないんだって。頭ガチガチのオヤジでさぁ。二十になるか、身体ができ上がるまでは酒はダメだって言って、煙草まで取り上げるんだぜ。信じらんねぇ」
だらだらと歩き始めた寿は、多賀を案内して、裏通りに入っていった。
シャッターの降りた商店街の中に、終夜営業の店の灯と、飲食店の看板だけが目立っていた。
「こんな所に通ってんのか？　シブイな」
「違うって。ちょっとした知り合い」
「なんだそれ」
「結構ライブに通ってるバンドがあってさ。そこの知り合いがやってる店なんだよ」
地下一階。狭い急な階段を下りた先が店だ。
さして広くもない店の奥に、こぢんまりとしたドラムセットが置いてある。そこだけが、普通のスナックではないと、主張していた。今日のところは、ドラムすら使われず、アコースティックギターとバイオリンがいた。
「げ！　ウェスタン？」
「げ、とはなんだ、げ、とは。失礼なヤツだな」
ドアの前にいた髭面男が、寿を見下ろす。
「あ……。いや……その……」

いかにも、ウエスタンの似合いそうな男である。はっきり言って、寿とは何があっても相容れない。
「こらこら。そんなんでも客なんだから、脅すなよ」
奥から声が掛かる。
髭面にぺこりと頭を下げた寿は、そのまま奥に向かった。
コの字型のカウンター席の中央にやたらとひょろ長い男と、小柄な女がいる。
「久し振り」
「なんだかね。セイジの噂、もう聞き込んだのか？　ホントに耳が早いんだから」
女が宣う。
「え？　何？　何？　何かあんの？　来月のツアーじゃないよね。何があんの？」
途端に、カウンターを乗り越えそうな勢いで、飛び付く寿に、女は露骨に顔を背けた。
ちょっとばかり過激な野郎のファンを引き連れているロックバンドのファン仲間である。ボーカルの名前を出せばどうなるか、判っている筈だ。つまり、喋ってくれる気はあるという事である。
「お喋り」
嗜める男に、女は態とらしく唇を尖らせて見せる。
と、いう事は、本当に何かあるという事だ。
やる事はもちろん決まっている。カウンターに貼り付いて、食い下がるのだ。

「マスター。教えて。教えて！　ねぇねぇ！」
「煩い。ウエスタン嫌いなんだろ。帰った帰った」
「えぇぇぇ……。聡江さんいるんじゃん。ご飯食べさせてよ。……あ、ガッコのセンパイの多賀さん。誕生日だから、奢ってくれるって。聡江さん。俺、十六になったんだよぉ。誕生日のプレゼントは許したげるから、教えてよ。セイジが何かやんの？　カタファルクで動く訳？　新しいドラムってどんな感じ？　北海道のライブ行ったんだろ？　どうだった？」
それでも、一応声を顰めるぐらいの理性はあった。
バンジョーまで加わって、本格的なウェスタンスタイルになったバンドは、さっきから聞いた事のあるようなないような曲を奏でている。
本当なら大声で怒鳴ってやりたいところだが、一応、寿は演奏者に気を遣っていた。
「センパイねぇ。……高校生じゃないの？」
「大学。……未成年だけど……」
「まぁ、いいわ。そこ、座んなさい」
この夫婦は、身長が四十センチは違うだろう。
主導権を握っているのが、小柄なヨメサンの方だと思うと、結構笑えた。
「……シークレットライブがあるのよ。あんたは参加できないけどね」
「えぇぇぇ」
「未成年と下戸お断りの酒飲みライブよ。……紛れ込もうとしても無駄だからね。身分証明書を

提示させるとか言ってたし……」
「うっ……」
胸を押さえてカウンターに倒れ込んだ寿の肩を、誰かが叩く。
「なんだよ!?」
「杉本……杉本……なんの話？」
多賀だった。
「え……あ……ごめん」
「いや、謝られても……。隣いいの？」
ぽりぽりと頭を掻いた多賀が、遠慮がちに隣に座ってくる。
「先輩だって？」
マスターが、二人の前にコースターを一枚ずつ置く。
「ええ」
まあ、実際、嘘ではないのだ。マスターとても、補導係ではないのだから、この外見ならばそうそうは突っ込むまい。
しかし。
ライブの情報が目的だった訳ではないだけに、手に入れた情報はおいしかったが、参加できないのでは意味がないし、それでなくとも、カントリーが大誤算だった。
あまり長居をする気がなくなってくる。

そんな風に感じ始めると、無闇に能天気なカントリー演奏が、だんだんと癇に障ってくるから始末が悪い。

目の前に出された烏龍茶を、半分ばかり喉に流し込むと、のろのろと席を立った。

「今度は何？」

「うーん……やっぱ帰ろうかなと……」

「へ？」

「オヤジの飯用意しなかったからさ……早めに帰らないと」

「はい？」

「だーかーらぁ。ウチに寄らずに出掛けてきちゃっただろ。……晩飯作らないと煩いんだよ」

「はぁ」

恐ろしく気の抜けた顔をした多賀を見下ろし、寿はにっこりと笑い返した。

「そういう訳で……今日はありがとね」

「おい!?」

ひらひらと手を振り、寿は足取りも軽く出口に向かう。

入り口近くに陣取った例の髭男にも、愛想良く会釈をすると、店を出た。

想像外の出来事に、思い切りショックを受けている。人様に言わせたら、思い切りバカバカしい話なのだろうが、ファン心理とはそういうものだ。

よろよろと足まで縺れてしまう。

「おい！　なんで帰るんだよ！」
追い掛けてきた多賀が、肩を摑んだ。
「だから。晩飯作るんだよ。ウチ、父子家庭だからさ。晩飯は俺の当番なんだよ」
「オヤジなんか、ほっとけよ」
「ほっときたいのはヤマヤマだけどさ。一応あんなんでも、保護者だし……」
「いいじゃんか。カラオケ行こうぜ」
「やだよ」
心酔しているボーカリストのシークレットライブに行けないと判ったその後で、カラオケなんぞに行く気にはなれない。
「どうしてだよ。約束しただろ？」
「知らねーよ」
鬱陶しい。
一瞬でも、いいヤツなどと思った自分が情けなくなる。
もう話すのも厭だ。
唇を引き結んだ寿は、真っ直ぐに前だけを見据えて、歩き始めた。
相変わらず、加賀は話し掛けてくる。腕を摑んだり肩を摑んだり、やたらと気軽に触ってくるが、相手にする気は微塵もない。
閑散とした商店街を抜けて、駅に向かう。

「おい。舐めてんじゃねぇぞ！　杉本！」
肘を摑まれる。
振りほどこうとして、抱き付かれた。
正確に言えば、腕を振り回すつもりが、力負けしてふらついた挙げ句、抱き留められたのだ。
腹の底が冷えるような怒りに、寿は男を睨みつけた。
「今更それはねぇだろ？」
冗談じゃない。
それでも、喋る気はしなかった。
無言のまま、加賀の腕から逃れようと暴れる。
「逆らうなよ。判ってんだろ？　付き合えよ」
何がだ。
そこいらの女を引っ掛けろ。血迷っているんじゃない。
「何か言えよ。悲鳴を上げてもいいぜ」
黙っている事が許せないのか、声に怒りが混じる。
直ぐ隣を絶え間なく車が流れていく。人通りもある。歩道を塞ぐようにして暴れている二人を、迷惑そうに見る者もいる。
だが、ガキの言い争いを気にする人間などいる筈もなかった。
まるで自分が透明人間になったような気がする。

「……来いよ！」
「ふざけんな！」
ついに叫ぶ。
と、加賀はにんまりと笑った。
気取っていれば少しは見られる顔が、下卑て見られないものになる。
「そうやって叫んでりゃいいんだよ。来いよ。……いいトコ行こうぜ」
「……としなが？　何してるんだ？」
いきなり、車道側から声を掛けられる。ぎょっとして顔を振り向けると、橋本がいた。
声が素直に聞こえると思ったら、フルオープンの車だ。
この蒸し暑い夏に、御丁寧に幌を外しているのは、頭が支えるからだろうか。そんなことを考えてしまうぐらい、コンパクトな車だった。
「……あ……総統……」
もちろん、多賀も橋本の顔を知っているようだ。
が、流石に次に続いた言葉は、流石に予想外だっただろう。
「弟になんの用かな？」
「弟ぉ？」
多賀が思い切り不審な顔で、橋本と寿を見比べる。
「な……何を……」

今まで、必死で言葉を飲み込んでいた所為で、罵声が出てこない。余計な事を喋らせないためにも、ここで釘を刺すしかないのに、唇はわたわたと震えるだけだった。

「両親が別れてね。けど、兄弟は兄弟だ」

それだと、自分と橋本が正真正銘の兄弟のようじゃないか。間をすっ飛ばすな。そう言いたいのだが、義理の兄弟と認めるのも厭で、言葉を探しているうちに、腕を摑まれた。

視線が外れる事なく、橋本は歩道の脇に立っていたのである。普通なら、相手が車から降りる時は逃げるチャンスなのに。これだから、屋根のない車は厭だ。

「乗れ。制服でふらふらしてるんじゃない」

なんだか、蛇に睨まれた蛙だ。

「多賀くんも、あまり遅くならないように」

ものついでのように、名前を呼んだ橋本は、義理の弟を助手席に引きずり込んだ。

「おやすみ」

ひょいと右手を上げて挨拶代わりにして、車を発進させる。

「……免許持ってんのかよ」

バックミラーから多賀が消えると同時に、一番の疑問を口にする。

「もちろん。兄さんの誕生日ぐらいは覚えておくように。五月五日だからね。二度と言わないから、忘れないように」

忘れようったって忘れられない日付だ。



「良かった。次の誕生日にはもう学校からいなくなってんだ」
単なる先輩でしかないと、言外に告げる。だが、橋本は完全に無視した。
「多賀と付き合う気なのか？」
降って湧いた質問に、思わず声が舞い上がる。
「はぁ？　何言ってんだ？　頭腐ってんじゃないのか？　だいたい、翔峰って変だよ。野郎同士が付き合ってるとか、可愛いだのアイドルだのって」
「……確かにな。けど、操ちゃんはやっぱり可愛いと思わないか？」
「それは認めるけど……」
確かに、むさ苦しい男共ばかり見ていると、雑賀の存在は一服の清涼剤に思えてくる。本当ににっこり笑うだけで、教師まで操っているのだから、立派なものだ。
いくら矢崎の威光が強くても、雑賀にちょっかいを出す人間が皆無というのは、本人の立ち回りが上手い所為でもある。
つくづく、子供の頃から持てていたのだろうと思わせる、人あしらいの上手さだった。
「お前も可愛いよ」
「だからやめろって。……チクショウ。なんだって今更そんな事言われるんだ？　自慢じゃねーが、俺ぁ、ガキの頃から可愛いって言われたこたぁねーぞ！」
「同じだ。……やっぱり兄弟だなぁ」
「ザケンなよ！　誰が兄弟だって？」

曾爺ちゃんの爺ちゃんぐらいの時代には親戚だったと言われたら可能性は認めるしかないが、少なくとも親戚付き合い大好きの口煩いジジイの話に橋本などという遠い親戚は出てこない。それだけに、きっぱりと胸を張って赤の他人と言い切れた。

「やっぱり、一度ぐらいは可愛いと言われたかったって思わないか？」

妙にしみじみと同意を求められ、寿はきっぱりと否定した。

「思うワケねーだろ。俺ぁ、ガキの頃はでかかったんだよ」

「小学校の頃？」

「そうだよ、悪かったな！」

「悲しいねぇ。ボクも初等部の頃から大きくてねぇ。その頃なら小さいだけでも可愛いって言って貰えるのにねぇ」

可愛い橋本などというのは、どれだけ頑張っても想像もできない。第一、高校生にもなって、可愛いという言葉を求めるという心理が判らなかった。

「何ふざけたこと言ってやがんだか。……止めてくれよ。あんたとドライブする気はねーぜ」

「久し振りにお袋さんに顔を見せてやれ」

一月前に会った。

同居している家族なら〝久し振り〟かもしれないが、離婚した親となると、最近の話だ。

「いーから。降ろせよ。ババアの顔なんか見たくもねぇ」

「それまで上手く行っていたのに、新しい家庭に遠慮して、自分の子供と疎遠になるなんて話も

あるらしいからな。早いうちに逢っておいた方がいい」
「ウチのババアがンなデリケートな訳ねーだろ。離婚した母でございますって、ガッコに電話してくるような女だぜ？」
「彼女らしいね」
けっ。
何が悲しくて義理の息子に同情されなくちゃならないんだ。
確かに少し変わり者かもしれないが、高校生の若造に同情されなければならないような女ではない。第一、母親と逢えなくなったからといって、困る事は何もないのだ。
「……ちゃんと送っていってあげるから」
「だーかーらー。オヤジの晩飯作らなきゃなんねーんだって」
「……判った。じゃあ家まで送っていこう」
飛び降りてやろうかと思ったところだったが、寿は肩の力を抜いた。
何しろフルオープンの車だ。走行中に飛び降りるほど考えなしではないが、信号で止まった時に飛び降りるのは造作もない。
「失敗だったな……」
「え？」
「屋根のある車にするべきだったな。……飛び降りるなよ……」
どうやら、見破られていたらしい。

苦笑した寿は、シートに身体を預けた。
「屋根のある車ぁ？　ベンベとかベンツとか、でっかい車庫にずらっと並んでたりして」
「いや、ドイツ車は好きじゃないとか言って、ウチの車は全部ボルボだ」
「ふーん」
やっぱり、金持ちだ。全部ボルボという言いようが、妙に厭らしい。
「じゃ、これは借りた車？　わナンバーだっけ？」
「違う違う。……これは親父の玩具みたいなものなんだ。……実は、これに初心者マークを貼ると怒られるんだが……」
そういえば、どこにも初心者マークは貼っていない。
確か、免許取得後一年以内は、初心者マークを貼らないと道交法違反になる筈だ。どこから見てもオヤジ車に乗った従兄弟が、格好が悪いからと文句を言っていたのを思い出す。
「見付かると切符切られるよ？」
揶揄した途端に、くくくと、喉を鳴らして笑い始めた橋本は、初心者マークとは思えないスムーズな運転で、寿の家を目指していた。
どうやら、道案内の必要もないらしい。
あのワケの判らない加賀に比べれば、橋本の方がましだろう。
いざとなれば逃げ出す事もできる。
この車は、密室にはなりえないという事実を今更のように確認した寿は、開放感に満ちたドラ

イブを楽しみ始めた。

8

お茶でもどうぞ、と言うのは、車で送ってくれた人への、単なる社交辞令だ。
それをマジに受け止めて、のこのこマンションの部屋まで入り込んだ橋本は、物珍しげにリビングを眺めていた。
「お父さんは？」
「まだ帰ってないみたいだ……」
靴もなかったし、何より自分の家で隠れる訳もないだろう。
当たり前の答えに、橋本が妙に真摯な顔で頷く。
「ま、その辺、適当に座って」
ソファーを顎で示して、キッチンに引っ込む。
湯を沸かすのと、コーヒーメーカーをセットするのと、どちらが早いだろうなどと、どうでもいいような事を思案していると、カウンターの所に橋本が立っていた。
「何？」
「紅茶がいいな」
――我儘言うんじゃねー――

内心で罵りながら、ケトルに水を半分ほど入れる。
なんとなくレンジの前に立ったまま、ケトルをじっと見守る。
「知ってるか？　見張ってるとお湯はなかなか沸かないんだぜ」
「バカ言ってねぇで、座って待ってろって」
「ほんとだって……なんなら時間計ってみな」
言われて、つい時計を見た途端、橋本が楽しげに笑い出す。
揶揄ったらしい。
「邪魔すんなら、出てけ」
「冷たいなぁ。お互いの事を知りたいと思わないか？　……折角兄弟になったんだから」
まぁ、お互いかどうかはともかく、学校一の有名人の事だ。知りたくないといえば嘘になる。
だが、関わりたくない、というのも正直なところだった。
少なくとも、膝を突き合わせて、互いの生い立ちを暴露し合う気にはならない。
「……あんたは、オレのカーチャンの再婚相手の息子で、ウチのガッコの生徒会長で……誕生日は五月五日。現在十八才で、運転免許を持ってる。とーチャンのロードスターを乗り回してて、自宅の車庫にはボルボがゴロゴロ……。さらにオヤジさんが厭がるから初心者マークは車に貼らない。――どう？　これだけ知ってたら、充分だろ」
一気に捲くし立ててやると、何故か橋本は真剣な顔で見詰め返してくる。
「記憶力いいねぇ」

挙げ句に、吐いた言葉がこれだ。
さっき聞いたばかりの事である。記憶力もクソもないだろう。
「紅茶淹れてやるから、飲んだら、さっさと帰れよ」
ケトルが小さく鳴き始めた。もう少しの辛抱だ。
こんな奴に構っている暇はないのである。
帰ってきてしまった以上、やはり夕食は作りたい。そのためにも邪魔はして欲しくなかった。
別に食事を作らなかったからといって、父親が怒る訳でもないのだが、自分の中の約束事は守りたいのだ。
言い訳としても申し分ない。どちらかというと、こちらの比重の方が大きかったが。
ティーポットを用意して、軽く流すと、水道を湯に切り替える。温い湯が熱くなるのを待っている間に、ケトルの口から蒸気が吹き始めた。
こんなに丁寧にしてやる必要はない、とは思いながらも、モノ知らずと言われるのが厭で、つい真面目に紅茶を淹れる手順を辿る。
父親が妙なところで贅沢な所為で、茶葉の類は揃っているのだ。
自分用のお気に入りを除けて、奥の缶を取ろうとしたところで、またもや、橋本が声を掛けてくる。
「アール・グレイ?」
折角、香りが臭いくらいに強いのを選んでやったのに、文句を言われるとは。

「香りが好きなの！」
「すごいな。紅茶は趣味？」
唐突に振られて、思わず眉を顰める。
こんなのに付き合っていたら、夜が明けてしまう。
無視を決め込んで、ウバ茶の缶を取る。
「意外にマメだね」
ポットの湯をカップに注ぐ手元を眺めがら、橋本が感心したように呟く。
――ホントにもう！　なんなんだこいつは!?――
口には出せないまでも、目付きにだけは思い切り不審を込めて、橋本を見上げる。
「おさんどんしてるっていうのが、既に意外だったけどね」
懲りないのか、鈍感なのか。おそらく前者だろうところが厭だ。
何が楽しいのか、橋本は一人でぺらぺらと喋り続けた。
それを半分聞き流しながら、ポットに散々沸かした湯を注ぐ。
そのポットと温めたカップをトレイに載せると、カウンターの上に置いた。
「はいよ。適当に飲んで帰りなよ」
「適当って……寿君は飲まないの？」
「食事の支度をするんだよ」
限りなく冷たく言い放つと、冷蔵庫に向き直る。

食事を作る決心はしていても、メニューまでは考えていなかった。というより、冷凍庫の中身で取り繕おうと思っていたのだ。まさか、橋本が腰を据えてしまうとは思わなかったのだから、仕方がない。

仕事があると言えば、さっさと帰ってくれると思ったのに、橋本は一向に気にする様子がないのだ。下手をすれば、自分も食べていくと言い出しそうな勢いである。

密かに溜め息を吐いた寿は、豚肉のパックを取り出した。

振り返ると、カウンターから物珍しげに、こちらを眺めている橋本と目が合う。

「何してんだよ」

「葉っぱが開くの待ってるんだけど」

呆れて睨み返すと、橋本はにこりと微笑み返した。

「見てて楽しい？」

「楽しい」

あっさりと答えた橋本は、カウンターに腰を据えてしまう。

本当に訳の判らない男だ。

「なぁ、寿。……お前、少しは警戒した方がいいよ」

「何を？」

思わず聞き返すと、橋本は溜め息と共に肩を竦める。

「操チャンは、天然モンの鈍いコちゃんだし、何より矢崎がガードしてるからいいけど……」

「いいけど、何!?」
つい、声を荒げる。
「いや……腕力に頼ってると、怖い目に逢うんじゃない？　親心だよ」
「あんたみたいな親をもった覚えないけどね」
野菜を取り出しながら、気のない答えを返す。
「じゃあ、兄の忠告」
ああ言えばこう言う。懲りない野郎だ。
「何を心配してるか知らねぇがな、俺ぁ今まで男にコナ掛けられた事なんざ一回もねーんだよ」
「多賀は？」
「厭がらせじゃないか」
「……全く……」
何が全くだか知らないが、大袈裟な溜め息を吐いた橋本は、身を乗り出してカップの湯をシンクに捨てた。慣れた手つきでカップに紅茶を注ぎ、香りを確かめて満足そうに笑う。
「……うまいな……」
「そう？」
細切りにした豚肉に、醤油と片栗粉を入れて混ぜ合わせる。それを多めの油で炒めて、ざく切りにしたニラを加えて炒めた。
「なんだそりゃ」

「ニラ豚。お袋直伝の、必殺手抜き料理さ。まだ作ってない？」
「……まだお目に掛かってないな……。美味いのか？」
普通なら、ここで食べてみるかと問うべきだろう。一応先輩だし、学校一の権力者だから、無視するのもまずいに違いない。
だが、尻尾を振るのも業腹だった。
「味見させてくれないかな」
「なんだかな。食い意地張ってないか？」
「まあまあ……」
仕方がない、という振りで、小皿にニラ豚を取り分ける。箸を添えて出してやると、橋本はなんの遠慮もなく口に運んだ。
紅茶とは合わないと思うのだが、そんな事は気にしないらしい。
「これ、味付けは醤油だけだよな」
「そう」
「どうしてこんな複雑な味がするんだろう……」
どうやら、お気に召して頂けたらしい。
「ニラだからだろ？　香辛料そのものじゃん」
「確かに……」
小学生の息子に教えられる料理といえば、こんなものだったのだろう。離婚が決まってから、

母親が教えてくれたのは、みそ汁の作り方とニラ豚だった。
結局、二月に一度は逢っていたから、その度に新しいメニューを教えられたが、一番最初に教えられた手抜き料理が、一番登場回数が多かった。
「……親父さん遅いね。いつもこんな時間？」
「大抵はもう帰ってるよ」
そういえば、遅い気がする。
キッチンを出た操は、リビングのサイドボードのファックス兼用電話に目をやった。留守録のランプは点いていない。代わりに、ファックスが届いていた。
「なんだかなぁ……」
まぁ、父親の考える事など想像できる。猫撫で声で息子に詫びるのを周囲の人間に聞かれたくなかったのだろう。案の定、ファックスの文面は、宴会に出ると書いてあった。御丁寧に二次会の連絡場所まで記している。
この男の所為で、調べるのを忘れたのが間抜けだ。お陰で、しなくてもいい食事の支度を始めてしまった。
「……愛されてるねぇ」
「何がだよ」
「同じ父子家庭でもえらい違いだ」
頭越しにファックス用紙を覗き込む橋本を、寿は鬱陶しげに眺めた。

「何しみじみしてんだよ。寂しいって歳じゃねーだろ？」
「どうだろう。……ただの自己中男だったと思ってたら、若い嫁さんにはでれでれになってるしねぇ」
ひょっとすると、慰めて貰いたいのだろうか。こんなでかい図体をして、しかも十八にもなって。新しい家族ができて、疎外感を覚えているのかもしれない。
そう思うと、突然の兄弟宣言も理解できるような気がした。
杉本家には、なんの変化もないが、毎日毎日無神経な女と顔を突き合わす羽目になった橋本は、複雑なのだろう。親に余計な心配を掛けずに出歩くには、義理の弟の存在は都合がいいのかもしれない。
母親の幸せを思えば、寂しがり屋のでっかい息子の相手ぐらいしてやるべきだろうか。
内心で溜め息を吐いた寿は、ファックス用紙をゴミ箱に投げると、キッチンに戻った。冷蔵庫からビールを取り出し、ニラ豚の皿と一緒にカウンターに並べてやる。
「……あ……と。車だったんだ」
慌てて、ビールを戻す。
「真面目だねぇ」
「未成年の飲酒運転はさすがにまずいだろ？　それとも泊まってく？」
「いいのか？」
「別にいいけど……」

どうしてそんな事を口走ったのか。自分でも判らなかった。
総統だの独裁者だのと言われている男が、自分の居所をなくして不安になっていると思うと、少しばかり構ってやろうという気になったのだろう。
「……そうだな。少し早めに起きれば、学校には間に合うし……」
「まっじめー。さすが生徒会長」
けたけたと笑った寿は、再び取り出したビールを、カウンターに載せた。
と、それを持って、橋本がソファーに移動する。
図々しいヤツだ。だが、橋本らしいといえば、橋本らしい。
くすくすと笑いながら、寿は冷蔵庫を開けて、つまみを物色し始めた。

9

何か、とんでもない間違いをしたような気がする。
何故泊めてやるなどと言ってしまったのだろう。
父親が、どうやら今夜は帰らないかもしれないと気付いた時点で、寿は急に後悔に襲われていた。
別に具体的に何がある訳でもない。
それにも拘らず、なんとなく不安なのは何故だろう。

どうも、酔っているらしい橋本が、目の前のソファーに座っているだけなのに。
らしいというのは、言っている事はごく真面(まとも)だし、態度も普通、顔色さえ変わっていないからである。
が、目付きだけは、どうも怪しい。その眼で眺められると、居心地が悪くて仕方がなかった。
いっその事、さっさと潰れて寝てくれればいいのに、そんな事を思いながらも、付き合うしかない。
「酔ってない？」
「どうだろう……」
妙に頼りのない答えが返ってくる。
「眼が座ってきてるよ」
半ば呆れて切り返すと、橋本は眉根を寄せて、益々目付きを悪くする。
「今まで酔った事はないんだが……」
「本当に？　自分が気付いてないだけじゃなくて？」
黙ったままでは気詰まりだ。それぐらいなら、下らない事を喋っていた方がずっといい。
「記憶をなくしたとか、見覚えのない所で目が醒めたとか……」
「ないない。ウイスキーをボトル一本空けても、二日酔いもしなかったぐらいだからな」
「そんなこと自慢すんなよぉ」
どうやら、酔い潰すのは諦めた方がいいらしい。ウイスキーだのブランデーだのは、父親の部

屋の金庫の中だ。小学生の頃、サイドボードに置いていたウオッカを飲んで、急性アルコール中毒で病院に運ばれた所為だろう。

「おいおい。いくらなんでもウォッカの一気飲みはまずいだろう」

間抜けな過去を披露してやると、案の定、ガキの無茶は橋本に大受けした。

「一気飲みじゃないって。ズブロッカって葉っぱが入ってるじゃない。あれが欲しかったんだよ。で、ジュースと混ぜるとこれが結構美味くて……」

「先が思いやられるな」

くすくすと笑う。

酔っぱらった記憶がないとは言っているが、全く酔わないという事ではないらしい。

真剣に観察しないと気付かぬ程度に赤くなった顔と、よく変わる表情。

いつもはとても高校生には見えないオッサンだが、酔っぱらうと少しは可愛げもある。

もっとも、アニメの軍人が画面に出ていない間に、御機嫌で酒を飲んでいるという方が、よりイメージに近かったが。

「こっちへ来いよ。ほら、ここ」

ソファーを叩く。

酔っ払いのオヤジのようだ。

実際、父親も、小学生だった寿を横に座らせて自分だけ酒を飲む事があった。

きっと、犬猫を飼っていたら、それでも良かったのだろう。自分ではない体温のあるものを側に置いておきたいというのは、寂しい酔っ払いの常らしい。

「……全く……。何が酔った事ないだよ……」

本人は自覚がないようだが、間違いなく酔っ払いだ。まぁ、これなら記憶がなくなる事もなさそうだし、二日酔いもしないのなら、始末のいい酔っ払いと言えるだろう。

「ビールならまだあるけど？」

「いいから。来いよ……」

「犬でも飼えば？　でっかいふかふかのヤツ……」

「何言ってんだ？」

一人が寂しいといえるキャラクターではないだろう。新しい母親が子供を産めば、益々疎外感を覚えるに違いない。

「つまみ、何がいい？」

「もういいから。……ほら、ここ、ここ」

間違いなく、本人が意識していないだけの酔っ払いだ。

一瞬、妙な不安を覚えたのは、酔っ払いの世話をさせられる羽目になるという予感の所為だったらしい。

実のところ、息子のためにと外で飲む酒を控えている父親の世話をしているので、酔っ払いの相手は慣れている。

だが、いくら慣れても鬱陶しい事には違いはなかった。
追い出す訳にも行かず、仕方なく、腰を上げる。
「どこへ行くんだ？」
「布団用意するから。……そろそろ寝ないと、朝、起きられないだろ？　風呂入る？　着替えは……入らないだろうな……」
改めて橋本を眺めた。
父親は決して小柄な方ではない。
だが、がっしりとした軍人体型の橋本に比べると、ただひょろ長いだけだったと思う。父親のパジャマを着るのも難しいだろう。
「悪いけど、浴衣で我慢してくれる？　パンツも入らないだろうなぁ……。ウチのオヤジ、ガリガリだし……」
「パンツぐらいすぐに乾くだろ？」
「……よろしく。風呂、そこだから。浴衣出しとくから……」
意外とあっさりと風呂に向かう橋本を見送って、寿は溜め息を吐いた。
同じ酔っ払いでも、父親よりはずっと扱い易い。少なくとも、酔い潰れた身体をベッドに引きずっていく手間がないだけ上等だろう。縦にも横にも規格外れに大きい橋本を運ぶ事など、考えただけでうんざりする。布団を運ぶくらいなら、お安い御用だ。
ベッドの下から客用の寝具を引っ張り出しながら、思わず呟いた。

「この布団で収まるんかね……」
幸い、一昨日の資源ゴミの回収に合わせて雑誌の始末をしたので、部屋は片付いている。中学の時、泊りにきていた友人は標準サイズだったので気にした事もないが、橋本だと足が食み出しそうだ。
「……綺麗に片付いているな」
「え？」
足音も立てずに、背後に橋本が立っていた。
「何？　シャンプー切れてた？」
「やめた」
「えっと……」
「兄貴はやめだ」
「はぁ？」
今更何を言っているのだろう。
誰も兄貴になってくれなどと言った事はないし、実際、赤の他人なのだ。
「誰にもやらない。俺のものにする」
「ちょ……ちょっと待て！」
不自然な恰好で振り向いたまま顔を、大きな手が両側から挟む。
そのまま、唇を押し当てられた。

抵抗する間など一瞬もない。
驚き過ぎて、目を見開いたまま、寿は橋本のなすがままになっていた。
しつこく唇を吸われて、じん、と痺れてくる。
「やめ……」
言葉が漏れると同時に舌が忍び込んできた。
くらくらするようなキス。
いきなり、足元が消える。そんな感覚で、膝が崩れた。
「……と、し、な、が……」
一つ一つ音を切って、確かめるように名前を呼ぶ。耳に直接吹き込まれる息は、背筋をぞくぞくさせた。
「……何…するんだ……」
「……誰にもやらない」
「おいっ！」
単なる独占欲。
人恋しさが昂じて、こんな突飛な行動に出たのか。
普通サイズのベッドに押し倒されて、巨体に伸し掛かられる。
圧倒的な体格の差。
厚い胸、分厚い肩。みっしりと筋肉が発達した身体が、擦り寄せられる。

「酔っ払い！」
「酔ってないよ」
「嘘っ……んんっ……」
怒鳴る口を口で塞がれる。
歯の裏から喉の奥まで、我が物顔に暴れる舌は、やがて誘うように舌に絡んできた。
「んっ……」
鼻から声が漏れる。
身体が熱い。腰がずんと重くなって、大男の息に肌が粟立った。
酔っている所為だ。
ほろ酔い加減の時に限って、そこいらにいる女が全員美人に見えるのと同じだろう。そうじゃなければ、硬い筋肉に覆われた身体に欲情する筈がない。
くっきりと陰影を刻む身体が妙にセクシーに見えて、ついうっとりと眺めてしまった。
「気に入った？」
「……丈夫そう……」
「寿ぐらいなら、抱えて走る自信はあるぞ……。悪い事は言わないから、貰われちゃいなさい」
笑い声が、厚い胸板から直接響いてくる。
「いつ脱いだんだよ。……あれ？　俺も？」
「光栄にございます」

キスに夢中で気付かなかったと、白状したようなものだ。
確かに、それもある。だが、橋本が手慣れているのも間違いなかった。
力強い腕は、発育不良の身体など軽々と支えてしまう。そして、大きな手が思い掛けず器用に動いた。
情けないほど貧相な身体を見詰めて、ほうっと橋本が溜め息を吐いた。
「綺麗なもんだな……」
やっぱり橋本も酔っぱらっている。
きっと、どんな女でも美人に見えるに違いない。
「酔っ払い……」
くすくす笑いが込み上げてくる。
こんな身体が欲しいのなら、くれてやってもいい。そんな気分だった。中坊の時、酔った挙げ句、名前も知らない女に誘われてホテルに行った。あの時の気分によく似ている。
いや。今回は名前も知っているし、どんなヤツなのかも知っている。学校では絶対的な権力者だ。その男が、大事そうに手を這わしているのが自分の身体だと思うと、勝手に笑いが込み上げてきた。
「あっ……」
鳩尾から臍へ、そのまま下に唇を這わせていた橋本が、存在を主張し始めた昂ぶりに、キャンディーを舐めるように舌を這わせる。

「やだっ……」
ぐん、と熱を持ったそれの感覚だけになってしまう。
なんのコントロールもできない。天井知らずに上がっていく熱を口で浅い息をして、どうにか逃がそうとする。
「ああっ……」
何かが、入り込んでくる。
前と後ろを、熱が責める。
「やだっ……あ……。いい……」
どうしてだろう。何があったんだろう。
童貞を捨てた時でも、もう少し冷静だった。それなのに、何も考えられない。
「寿……。寿……」
太い指が、胸の突起を押し潰す。
たったそれだけで、背筋を電気が走った。
理性など、直截な快感の前には歯止めになどならない。
とにかく今の快楽が総てになる。
自分の身体を探る指が、誰のものでも良くなっていた。無闇に熱くなっていく身体は、既に暴走状態である。
とんでもない所を弄られているというのに、不快感より衝動が上回るのだ。



腰から下が溶けていく。
不意に、刺激をくれる指が逃げていった。
「やだ……」
この熱を開放してくれるのだったら、なんでもやる。
分厚い、そして熱い身体が離れていくのが、酷く寂しかった。
「やだよぉ……」
だるい身体を起き上がらせようとする。
と、大きな手がそれを制した。そして、貝殻骨（かいがらぼね）に歯が立てられる。
「あ……」
どうしてそんなところが感じるのか。今まで気にしたこともない。
熱い舌が這い回り、その度に、喉の奥が勝手に鳴く。首筋から背筋を辿り、双丘（そうきゅう）に辿り付く頃には声が抑えられなくなっていた。
「会長……。会長……」
「寿……」
「んっ……んんっ」
絶対に、正気だったら許せる事ではない。双丘の奥にひんやりとするものを塗り付けられ、指で掻き混ぜられる。
「やだっ……。会長……橋本……あっ……やだって……。早く……助けて……」

ねちゃねちゃと、厭らしい音を立てて指が出入りする。
「……息を吐いて……」
掠れた声が耳元で囁かれ、ねっとりと耳を舐められた。
ゆっくりと、橋本が潜り込んでくる。
「あ、あ……」
がくがくと身体が震える。そして、熱い身体が覆い被さってきた。
「とし……とし…ながっ……」
背中を覆う身体。
がくがくと揺らされる身体。寿の身体を好き勝手に蹂躙する肉。
引き攣れるような痛みがあるのに、その奥に混じる快感が行為を受け入れさせているのか。それとも、橋本の熱い身体を自分のものにしたいのか。
「お願い……。かい……ちょう……。助けて……たすけ……て……」
大きな手が股間に伸ばされる。
必死に、自分の身体を支える寿を抱え込んだ橋本は、獣のような唸り声を上げて、身体を震わせた。

10

がっしりとした腕に頭を預けて、寿はぼんやりと窓を見詰めていた。
背中から抱き付いてくる男は、今が夏だという事を完全に無視している。クーラーをがんがんに利かせて、それでも抱き付いているのだから、かなり妙だ。そのうえ、寿自身も、抱き締められて安心しているのだから、もっと妙なのかもしれない。
「寿……」
「なんです会長？」
「会長はないだろ」
「じゃ、橋本さん」
橋本が溜め息を吐く。
その息が背筋を擽り、ぞくぞくした。
「悠介だ」
「ふーん……」
自然と顔がにやける。だが、そんな表情を橋本に見せてやる気はなかった。
「……離さないからな……。他の連中にほいほい着いていくんじゃないぞ」
もちろん、寿は何も答えない。
と、何を思ってか、橋本が顔を覗き込んできた。
「あんなバンドが好きなのか？」
窓の横のポスターを見ていたと思われたらしい。

「……俺もタトゥー入れようかな……」
カタファルクのポスター。もちろん中央にはセイジがいる。
剝き出しの腕にはごつい棘の生えた蔦のタトゥーが入っていた。
「ダメだ」
別に本気で言った訳ではない。しかし、まるで保護者のような言いようが気に障った。
「なんでだよ」
「絶対、飽きる」
「はぁ？」
寿の身体に伸し掛かるようにしてポスターを睨んでいる男の顔を見上げる。
「同じアクセをずっとしてられるか？　飽きたからって、簡単に消せるものじゃないし皮膚移植なんかしたら、せっかくの綺麗な身体に傷が付くだろ」
「こら、何、腐った事言ってんだよ！」
「……諦めろって……。もう離さない。……俺のものだ……」
「ばーか」
呆れた振りで、俯せた。
身体が離れる。と、突然、背中が寂しくなった。
だが、すぐに温かい身体が覆い被さってきた。
その重みが、熱が、泣きたくなるほどの安心感を与えてくれる。

「もう離れられないよ。こんなに相性がいいんだ。……他のヤツなんか、お前に比べたら、人形みたいなもんだ。……判ってるだろ？　お前もそうだろ？」
「……眠い……」
熱くなった瞼を、開く気はない。
「……寿……」
情けない声を出す男は、寿に縋り付いてきた。
みっしりと筋肉の発達した身体は、いずれ自分のものにしたいと思っていた。だが、自分がなりたいのではなく、抱き締めて貰いたかったのかもしれない。
それも、向き合って抱き合うのではなく、背中から、抱き締めて欲しい。
「寿……とし……。寿……」
「煩いって……」
眠った振りをしながら、寿はどうすればこの男を捉えておけるか、考え始めていた。

267 杉本くんのヒミツ

あとがき

新書はお久し振り？　だよね。ワシらの話には珍しく、雑誌掲載時にはアンケートとかで随分と感想を頂けたもんで、かなり楽しく書かせて貰いました。単純だよね。

好き勝手書かせて貰ったし。

編集様には良く、コンな学校ってホントにありますか？　みたいなこと言われたけどさ。これが、あるんだな。わっはっは。多少のデフォルメはもちろんあるけど。いや、実際はもっと下品かも……。ま、男子校なんて、そんなもんよ。学校の真中に、壁があるってガッコもあったしね。今はもう分学じゃないかもしんないけど。

結局、自分らの高校時代がモデルになっちゃうよねぇ。どうしたって、今の高校セー知らないからなあ。他の作家の皆様、どうです？　て人に聞いてどうする――。

いやいや、このまま五頁は辛いぞ。

て、ことで、ちょっと、話題を変えちまおう。

近頃、わが家の電化製品が、寿命なのか、次々壊れててさ。それも、我慢すれば一応使えるって言う、スゴーく嫌な壊れかたしてて、あー、もう最低よ。最初は、ゲーム機に繋いでるテレビ。

音が出ないのよ。ワシらのやるゲームってほとんどRPGだもんで、音がないならないでなんとかなっちゃうのよね。結局、お蔵入りしてたテレビを持ち出して、取り替えることで、これは一応解決。それから、電気ポットが使い物にならなくて、買い替えたんだけど、これは一月しないうちに給湯のモーターが壊れて、お取り替え。そして、CSチューナー。なんと、EPG——番組ガイドが出ないのよ。これが思う以上に不便できぁ。流石にチャンネル数が多いんで、番組情報誌とかは購読してんだけど、詳しくはEPGをご覧くださいってのがミエミエなのよ。この番組表がないと予約できないしね。

あーっ！

いや、ちょっと今、思い付いて、チューナーの電源コードを入れ直して見たんだけど、治っちゃった。コードが半分コンセントから抜け掛かってたよ。うーん……この一週間の苛々は何だったの。チクショウ！　でもいいや、これも解決だよね。これで、予約録画ができる。ホントに治ったのか、そのうちまたトラブルのかは、神のみぞ知るってか。

判ります？　要するになーんか苛々するけど、壊れたって言うには……の電化製品のトラブルが続いてたのさ。パソコンとコピーもそうなのよね。これはホンマモンのトラブルなんだけど。なんと、原稿書くのと原稿の打ち出しには、それほど支障がない。直すとなると、色々面倒なのが判ってるモンで、ついつい先延ばしにしちゃってんだけどさ。

なんだか、今年は厄年って言うか——そんな年ってあんのよね。電化製品だけじゃなくて、里見も壊れちゃったし。……辛気臭くなるから、これ以上はやめとこ。取り敢えず、今年の災厄は、ここら辺で終わったと信じるしかないやぁね。

まぁ、この本に関しては、里見の入院もあんまり影響しなかったし、善しとしよう。

何のかんのと言って、最初にこのシリーズを書いてから、もう一年以上経ってるのよね。校正で読み返した時は、中々新鮮でしたわ。

体育祭だの文化祭だの、やっぱり高校時代はネタに事欠かないなあ。なんて、人事のように思ったりして。矢崎も橋本もオッサン臭い連中だモンで、書くには苦労しないしねぇ。実は結構、ツボなんじゃないか？　なんて、ふと、自分の趣味に疑問を感じたりして。

もっとも、書下ろし分の橋本・杉本編を書いた直後に、エクリプス本誌に、操の兄ちゃんの話を書いたもんで、どうやら、半分は気の迷いだって事が判りましたけど……。半分て、ところがミソね。

うーん、ゲームネタなら、腐るほど書くことがあるんだけどな……。こればっかりは、興味のある人とない人が、真っ二つに割れるしなあ。——実は密かに書くことを自戒してたりする。

何のかんのと言って、書き始めれば何とかなるのに、どうも、今回は……。それこそ、庭の藤が今年は六〇〇くらい花付けたとか、ごたごたしてて、海軍道路の桜を見に行けなかったとか、

私のFDちゃんが、ラジエターにポスターの切れ端を張り付けてた事件とか。しょむないネタは一杯あるんですけどぉ。

本の中身の話しろよって？　うーん……それはやっぱり読んでもらうのが一番だしぃ。気に入っているだけに、ここで妙な解説して、逃げられても困るしなあ。いやいや。

そういや、困ると言えば、ウチのお猫様の中の約一匹は、去勢をしているにも拘わらず、何故か梅雨前になると発情したかの如く、妙にそわそわと騒ぎ始めるんだよね。空中に向かって、アオアオ鳴いてみたり、妙に人に擦り寄ってみたり……。元オスネコのくせに、なんとなくメスネコの発情期みたいなところが、結構笑えたりするんだけどさ。それだけじゃ終わらなくて、なんか知らないけど、突然、家の中を駆け擦り回り始めるのよ。テレビに飛び乗りテーブルの上を駆け抜け、キーボードを踏み荒らし……てね。もちろん、人間も例外じゃなかったりしてさ。肩を踏み台にしてみたりしちゃう訳よ。これが、怖い。何しろ、敵は七キロ近くあるからねぇ。寝転がってる時に、腹の上なんか走られた日にゃ、重いわ、爪は食い込むわで、もう死ぬ目を見ちゃう。そうなのよ。猫って走る時には爪をスパイク代わりにするんだもん。

そりゃ、家中にマーキングしないだけ増しなのかも知んないけど……。自分の上に飛び乗られない限りは、見てても可笑しいんだけどね。青春だぁ！　とか、やり場のないエネルギーをどうすりゃいいんだ！　なんて言ってんじゃないか……なんて思ったりして。あり余るエネルギーを

発散してます、てのがミエミエだし。なんせ、気がすむと、自分の巣に戻ってだらだらし始めるんだよね。

半月くらいは手元のクッションにいつでも手を伸ばせるように準備しとかないと、危険なんだな。何しろ、今、絶好調だからね、彼は……。

しかし、不思議なのは、やっぱり、こいつ去勢してんだけどナ、てこと？　考えたところで、答えなんて出そうにないけどね。

あっ……と。気付けば、五頁目じゃありませんか。

と、言う訳で、流石に少しは、このシリーズに付いて宣伝しておかなくちゃ不味いのかなぁ。この〝クールが熱い〟はもう少し続くからね。まあ、いいか。こんなこと言ってると版元から怒られる？　いや、きっと許してくれるさ。そうではなくて……。

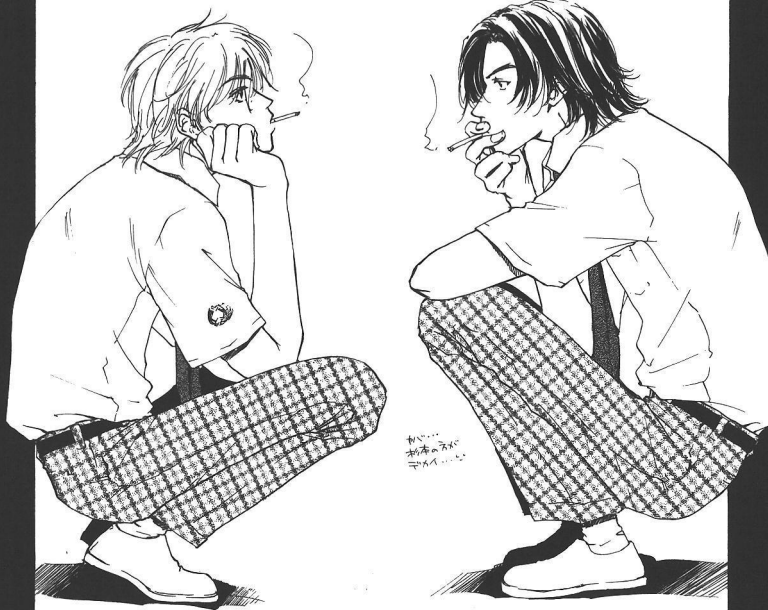
しばらくの間、お付き合いくださいね。……にっこり。

新田一実

追伸　感想ください。是非！　このシリーズは、マジで読んでどう思ったかが聞きたい。

よろしくね！

『クールが熱い』シリーズ1冊目ですね！ありがとうございます！
これまで、私がカットさせて頂いた、新田さんのおハナシと、初めての、ガムくちゃん系（笑）1話目読んだ時は、たいへん新鮮でした。（でも操ちゃん170cmぐらいあるんですね。なんか、イメージとして、165cmぐらい…とか思ってたもので、絵におこすと、チビッコ的な感じに…）
あ！1話目というと、新書化あたって、その時の原稿に手直しが入るべく、見返したらあまりに絵が違いすぎて、ふいてました。衣服のズボンとかも、ぜんぜん変ってるシーンがまちまちで、オレのアバウトさに笑笑…。雑誌掲載時が『アレ…？』と思ったそこいらしゃがみ…？？失礼しました——。
ところで、今回の書き下ろし!!なんと杉本君とアノ人が…!!!（←後記から読む人への配慮/笑）で来、すごくびっくりでした。しかも、えーか、この時点でおでてきてほしいたのだもん——。そんなコトは、おくびにも出さぬ杉本ち…あなどれねえ…。



操ちゃんは、すぐ気づかないだろーな——…金ちゃんだし（笑）個人的に、杉本さんが好きなので、彼主役で嬉しかったよ。
操ちゃんが、そのことを知るのはいつなんだろう…？ずっと知らないままなのか？？そこらへんのエピソードをつめて！お願いしたいですよ、新田サン——。（とか、こんなんでガガって言ってみるヨシエ。）

2000.5.xx　園田小夏太。

ECLIPSE ROMANCE 新田一実の本

本体価格855円＋税（＊印 本体価格854円）

＊品切れの場合は、店頭で注文するか、郵便振替でご購入下さい。
郵便振替の際は、巻末の振り込み用紙の表に、あなたの住所・氏名・電話番号と、通信欄には、書名・冊数を明記し、定価＋送料分を郵便局でお振り込み下さい。
（送料1冊310円　2冊380円　3冊450円　4冊以上500円）



＊時に抱かれて

ill.氷栗 優

天使の肖像と評判の絵画を描く男・アモンと、そのモデル・ルシファー。二人の心には互いに癒せぬ傷があった。やがて肖像画に魅かれた写真家の鷹取恭平が現れた事で、二人の現実が微妙に変化してゆく。描かれた肖像を魔物と評し、ルシファー自身に執着を見せる彼のレンズはルシファーの魔性を写し取り封じた過去を暴き出すのだが——。



＊Love Me Please

ill.氷栗 優

美人で天才科学者、でもちょっと変わり者。それが僕の兄ちゃん、須永克彦。そんな兄ちゃんのベターハーフになるのが僕の密かな夢だった。当然、障害は山のようにある。兄ちゃんを良からぬ目で見ている研究所のオーナー、竹林を追い払うだけでも一苦労だというのに、今度は妙な人造人間まで割り込んできて——!?



＊不完全恋愛マニュアル

ill.富士山ひょうた

ご近所のよしみで、兄弟同然に育った俊明と雅己。可愛くて美人で三歳年上の俊明を追いかけて、東京の大学に進学した雅己には、おおいなる野望があった。それは……俊明を恋人にする事。見た目を裏切り、強くて男らしい俊明を、容姿、頭脳共に優秀、ただし超弱気の雅己はモノにすることが出来るのか!!



長嶺先生の憂鬱
ill.富士山ひょうた

室戸美咲こと長嶺敏樹は、来る仕事拒まずの職業作家。ホモ恋愛小説執筆の依頼を受けたはいいが、恋愛不感症を自認する敏樹には勝手が判らない。そんな折り、弾みで食事に誘った馴染みのバイク便の兄ちゃんに告白されてしまう。しかも、肉体関係の強要というオマケ付きで。恋愛不感症男にショック療法は効くのか……!?



久住先生の誤算
ill.富士山ひょうた

久住鷹哉、29歳と9か月。そこそこに売れているイラストレーター。彼の趣味は気に入った相手をからかうこと。今の標的はガソリンスタンドでバイトをしている浪人生の黒川昌毅だ。彼を家に誘う事に成功した久住はいつもの様にからかうが、それによって昌毅は傷付いてしまう。思わぬ事態に困惑する久住は……!?



久住先生の告白
ill.富士山ひょうた

黒川昌毅は悩んでいた。彼の想い人・久住鷹哉はイラストレーターという『仕事』をしっかりと持っている大人だ。それに対して自分は浪人生。彼に釣り合うために編集者を目指そうと思うのだが、当の久住の気持ちがわからない。久住に愛されている自信が持てない昌毅は、今は受験に集中しようと決意するが……。



さよならを言う気もない
ill.富士山ひょうた

バーテンダーの玄将は、高校生の義都に「声に惚れた」とナンパされ、つき合い始めるが、次第に年の差のギャップに苦しみ始める。そんな中、米国から帰国した玄将の又従兄弟・祥之が二人に割り込み、義都に興味を持つ。一方、義都は玄将を包み込むような、大人の魅力をもつ祥之に愕然とし、お互いすれ違いはじめ……。

ECLIPSE ROMANCE

この本を読んでのご意見・ご感想
ファンレターをお寄せ下さい。

〒153-0051　東京都目黒区上目黒1-18-6　桜桃ビル3F
(株)桜桃書房　第一コミック編集部
「新田一実(にったかずみ)先生」係／「富士山(ふじやま)ひょうた先生」係

クールが熱い1
～副会長がボクにキスをした～

2000年6月15日　初版

著　者――新田一実
発行人――長嶋正巳
発行所――株式会社桜桃書房
〒153-0051
東京都目黒区上目黒1-18-6
【営業】TEL. 03-3792-2411
FAX. 03-3793-7048
FAX. 03-3792-7143
【編集】TEL. 03-3793-4939
FAX. 03-3793-9348
郵便振替――00190-6-27014
印　刷――共同印刷株式会社
装　丁――鳥居泰果
Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえいたします。
©2000 KAZUMI NITTA

9784756713254

1920293008554

ISBN4-7567-1325-4

C0293 ¥855E

定価：本体855円＋税

歴史を誇る私立高校男子部へ通う雑賀操は、少々素行不良の一年生。

操は何かと自分を構ってくる品行方正な副会長・矢崎を鬱陶しく思うのに、その矢崎と自分がウワサになっていることを知り腹を立てる。

ある日、末兄につき合い飲みに行った帰り、バイクに乗った矢崎と出会う。操は矢崎が優等生の顔をした不良だと思い、弱みを握ったと思い込むのだが――!?

小説エクリプスにて大人気連載作品!!

ILLUSTRATION▶富士山ひょうた

